

源氏物語引歌索引

桐 壺

1 人の心をのみうごかしうらみをおふつもりにやありけむ(五4・27)

あしかれと思はぬ山の峰にだにおふなる物を人の歎きは(詞花集卷六、雑上、三三、男をうらみてよめる 和泉式部)

2 世のためしにもなりぬべき御もてなし也(五3・27)

恋ひわびてしぬてふ事はまだなきを世のためしにもなりぬべきかな(古今集卷古、恋六、二〇〇君、つれなく侍りける人に 忠岑)〔余〕

3 いとはしたなきことおほかれど(五10・27)

さもこそは夜半のあらしのさむからめあなはしたなの真木の板戸や(未詳)〔引〕

4 さきの世にも御ちぎりやふかかりけむ(六1・28)

君と我いかなる事を契りけむ昔の世こそ知らまほしけれ(和漢朗詠集卷下、交友、三九、新千載集卷十、恋一、二〇三、題しらず 読人しらず)〔河〕〔休〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔余〕

5 世になくきよらなるたまのをのこみこさへうまれ給ひぬ(六2・28)

あか玉の光はありと人はいへどきみがよそひしたふとくありけり(日本書紀卷一、二六、豊玉姬)〔河〕〔孟〕〔眠〕

6 めづらかなるちごの御かたちなり(六3・28)

珍しき人を見むとやしりもせぬ我が下紐のとけわたるらむ(古今集卷古、恋四、三三、題しらず 読人しらず・古今六帖第五、ひも、三六、)とけつゝあらむ)〔河〕しかもせぬ(真本「しり」、〔孟〕しかもせぬ、〔眠〕

7 かしこき御かげをばたのみきこえながら(七2・29)

① 海の底沖は恐し磯廻よりこぎ連み往かせ月は経ぬとも(万葉集卷三、三九六)〔河〕みなその…いはまよりこぎめぐりませ、〔孟〕みなそのおきをかしこし岩まよりこぎめぐりませ月ふけぬまに

② 勅なればいとまかしこし鶯の宿はととはといか答へむ(拾遺集卷六、雑下、三三、内より人の家に侍りける紅梅をほらせ給ひけるに鶯のすくひて侍りければ家の主人の女まつかくそうせさせ侍りける・大鏡卷六、四〇、紀真之女)〔河〕〔孟〕

8 おとしめきずをもとめ給人はおほく(七2・29)

なほき木に曲れる枝もあるものを毛をふき疵を言ふがわりなき(後撰集卷六、雑二、二五、いたくこと好む由を時の人いふとききて 高津内親王)〔紫〕〔河〕いふがわりなき(本「わりなき」、〔休〕〔引〕いふがわりなき、)〔相〕〔孟〕

〔湖〕〔余〕〔对〕〔事〕〔集〕

9 人のきぬのすそたえがたくまさなきこともあり(七7・29)

※まさなきこともあり―さがなきことどもおほかり河こゝにしも何匂ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に(拾遺集卷古、雑秋、二〇六、房の前裁見に女どもまうて来

りければ 僧正遍昭・遍昭集、一六六、嵯峨に侍りし法師の坊の前に前裁のはべりけるを女どものたちとまりて見侍りしかば〔河〕

10 このみこみつになり給年御はかまぎのこと〔七二・30〕

百敷に千年の事は多かれどけふの君はためづらしきかな

〔拾遺集卷六、雜賀、二二〕、天曆の御時内裏にて為平のみ

こはかまぎ侍りけるに 参議好古〔五〕けふの君には、

〔眠〕

11 事にいでのもきこえやらずあるかなきかにきえいりつゝ〔六〇・30〕

①

言に出でて言はばゆゆしみあさがほには咲きでぬ恋も

するかも〔万葉集卷六、三七五・古今六帖第、人知れぬ、三

三六〕ほには咲きいでゝ恋をするかな〔河〕いへばゆ

しみ…ほにはさきいでぬ恋もするかな、〔五〕いへばゆ

しき…程さきいでぬ恋もするかな、〔一〕、△眠▽〔引歌

に不及〕

② 言に出でていははゆゆしみ山川のたぎつ心は塞きあへにけ

り〔万葉集卷六、二二三・柿本集、一五五〕、たぎつ心をせき

ぞかねつる〔古今六帖第、いはで思ふ、三三六、人麿、

たぎつ心をせきぞかねつる〕〔河〕〔孟〕〔湖〕たぎつ心を

せきぞかねつる

③ ことに出でゝいはぬばかりぞ水無瀬川下に通ひて恋しきも

のを〔古今集卷六、恋、二六七、題しらず 友則・友則集、

一五五・古今六帖第、いはで思ふ、三三六、友則、〔声にい

で〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔引〕

12 まみなだもいとたゆげにていととなよくと〔一〇・31〕

大船を荒海に漕ぎ出弥船たけわが見し児らが目見は著しも

〔万葉集卷六、三三六〕〔拾遺集〕あるみにいだしやふねたき、

〔余〕

13 いとなよくとわれかのけしきにてふしたれば〔一三・31〕

夢にだに何かも見えぬ見ゆれども我かもまどふ恋の繁きに

〔万葉集卷六、三三六〕〔紫〕〔異〕〔河〕なにかもみえず、〔孟〕

我かもまよふ、〔引〕

14 かぎりあらむみちにもをくれさきだゝじとちぎらせ給けるを

〔元一・31〕

① での山麓を見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじと

て〔古今集卷六、恋、二六七、心地そこなへりける頃あひし

りて侍りける人のとはで心地おこたりて後とぶらへりけれ

ばよみて遣はしける 兵衛〔眠〕

② 別れてはいつ逢ひ見むと思ふらむ限りあるよの命ともなし

〔後撰集卷六、離別、一三三〕善祐法師の伊豆国に流され侍

りけるに 伊勢・伊勢集、一三三、せきう法師の和泉の講

師に流されける頃皆人の歌よみけるに〔古今六帖第、別、

三三〇〕いせ、いつか逢ひ見むと思へども〕〔余〕

③ かりそめのゆきかひちとぞ思ひこし今は限りの門出なりけ

り〔古今集卷六、哀傷、八三〕甲斐の国にあひ知りて侍り

ける人とぶらはむとてまかりける道なかにてにはかに病ひ

をしていまいまとなりければよみて京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍りける歌 在原滋春・大和物語、六三、「思ひしを」〔余〕

15 かぎりとしてわかるゝ道のかなしきにかまほしきはいのちなりけり (元三・31)

① 亀山にいづ葉のみありければとむるかたもなき別れかな (拾遺集卷六、別、三三、みちの国の守これともが罷り下りけるに彈正のみこのかうやく遣はしけるに 戒秀法師)

〔拾〕とゞめんよしも

② 何せむに命をかけて誓ひけむいかばやと思ふ折もありけり (拾遺集卷十四、恋四、八七、女を恨みて更にまうでこじと誓ひて後に遣はしける 実方朝臣・実方朝臣集、三三六、ある女をいかなることかありけむ今はさらに問はじなど誓ひて帰て程へていかゞ覚えけむ) 〔拾〕時もありけり

③ 都にも恋しき事の多かれは猶このたびはいかむとぞ思ふ (後拾遺集卷十三、恋三、七四、父の許に越の国に侍りける時重くわづらひて京に侍りける斎院の中將が許に遣しける 藤原惟規) 〔拾〕思ふ人のみ、〔新〕

④ 死ぬてもとりもあへずはやはらるゝといきかたき心地こそすれ (大和物語、五三) 〔拾〕

⑤ 別れ路はこれや限りの旅ならむさらにいくべきことちこそせぬ (新古今集卷六、離別、八三、修行に出でたつとして人のもとに遣しける 道命法師) 〔集〕

16 よろしきことにだにかゝるわかれのかなしからぬはなきわざ

なるを (元14・32)

物皆は新しきよしただしくも人はふるきし宜しかるべし

(万葉集卷十、二八七) 〔河〕物はみな：人はたゞふりぬるのみぞよろしかりける

17 むなしき御からをみるゝ猶おはする物とおもふがいとかひなければ (二〇五・32)

うつ蟬はからを見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて (古今集卷六、哀傷、八三、掘川のおほきおほいまうち君身まかりにける時に深草の山にをさめてける後に詠みける 僧都勝延・遍昭集、二八七、深草の山に納め奉りしを思ひ参らせむ心のほどは思ひやるべし、煙だにたて深草の山)

〔紫〕〔異〕〔河〕〔入〕〔休〕、〔孟〕なぐさみぬ、〔峴〕〔引〕〔事〕、〔細〕〔引歌に及べからざる也〕、〔湖〕〔引歌に

不可及歎 18 猶おはする物とおもふがいとかひなければ (二〇五・32) あるいは忘れつゝ猶なき人をいづらと問ふぞ悲しかりける (土佐日記、四) 〔拾〕いづくとゝふぞ、〔余〕

19 はひになりたまはんをみたてまつりていまはなき人とひたぶるに思なりなん (二〇六・32) 燃え果てゝ灰となりなむ時にこそ人を思ひのやまむごにせぬ (拾遺集卷五、恋三、五九、題しらず よみ人しらず)

〔紫〕、〔異〕人のおもひの、〔河〕、〔孟〕〔峴〕はいになりなん、〔湖〕もえ出て灰になりけん…やまんとぞせめ、〔引〕 〔余〕〔集〕

20 いまはなき人とひたふるに思なりなん (二〇六・32)

みよしのたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴く
なる (伊勢物語、三六・古今六帖第六、かり、三三三) (紫)

(異) (河) (孟)

21 心ばせのなだらかにめやすくにくみがたかりしこと (二〇12・33)

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人にみえつ
ゝ (古今集卷十、物名、さき、まつ、びは、ばせをば 紀

のめのと) (河) (孟)

22 おぼしいづるさまあしき御もてなしゆへこそすげなうそねみ
給しが (二〇13・33)

① 情にはゆるぶことなくすがの山すがなくのみや恋ひ渡りな
む (万葉集卷七、四〇五、大伴宿禰家持) (新)

② うちそばみ君ひとり見よまる小菅まろはひとすげなしとい
ふなり (蜻蛉日記、四〇) (余)

23 なくてぞとはかゝるおりにやとみえたり (二〇14・33)

① ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は恋しかりけ
る (古今六帖第六、物がたり、三三三)、「語らばで恋しきも
のと別れてぞ知る」 (秋前) (秋宮) ありのすさみに、(奥)
なくてぞ人の、(紫) (異)、(河) ありのすさみに (本本真本す
さび)、(新) 語らばで恋しき物と別れてぞ知る (にくかりき
なくてぞ人は恋しかりける)、(余) (余) (对) (事) (大) (評)

(集)

② ある時のありのすさびに語らばで恋しきものと別れてぞ知
る (古今六帖第六、物がたり、三三三) (余)

③ あればありとなげしのよそにみし人の秋風吹けばそれぞ恋
しき (曾丹集、七月をばり、三三三) (余) なげくのよそに

24 たどなみだにひちてあかしくらさせたまへばみたてまつる人
さへつゆけき秋也 (二〇13・33)

① 人はいさごとぞともなきながめにぞ我れは露けき秋も知ら
るゝ (後撰集卷六、秋中、三六、男のもとに遣しける 読入
しらず) (紫) (異) (河) (孟) (湖) (引)、(余) 秋はしらる

② ねになきてひちにしかども春雨に濡れにし袖と問はゞ答へ
む (古今集卷十、恋二、吾等、題しらず 大江千里) (河)

(孟)

③ ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけ
り (古今集卷四、秋上、二六、題しらず 読入しらず、清正
集、二六五、秋立つ日人に、古今六帖第六、とこ、三三三)

「臥してぬる」 (眠) ひとりねの (不及引歌)

25 みたてまつる人さへつゆけき秋也 (二〇13・33)

① 秋風になびく草葉の露よりも消えにし人を何にたとへむ
(拾遺集卷三、哀傷、三六六、中宮かぐれ給ひての年の秋の
御前の前裁に露の置きたるを風の吹きなびかしたるを御覧

じて 天曆御製) (眠)

② 人はいさごとぞともなき眺めにぞ我れは露けき秋も知らる
ゝ (後撰集卷六、秋中、三六、男のもとに遣はしける 読入

しらす) (岷) ながめにて

26 野わきたちてにはかにはださむきゆふぐれのほど(二七・34)

①身に寒く秋のさよ風吹くからにふりにし人の夢に見えつる

(曾丹集、三三六) (一)ふくなべに夢に見えつゝ

②はだ寒く風は夜ごとになりまざる我が見し人はおとづれもせず(曾丹集、三三七、八月中) (事)

③朝ぼらけ萩の上葉の露みればやはだ寒し秋の初風(曾丹集、三三三、新古今集卷四、秋上、三三、題しらす 曾禰好忠、「萩の上葉の」(河)おぎのうはとの、(孟)

④秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼むくるゝ夜ごとに

(古今集卷三、恋三、三三、題しらす 素性法師・素性法師集、二五三・古今六帖第一、秋の風、三三六) (新)

27 つねよりもおほしいづることおほくてゆげひの命婦といふをつかはす(二八・34)

①春霞たなびき渡る折にこそかゝる山辺はかひもありけれ

(新古今集卷六、雑上、二四四、東三条院女御におはしましける時円融院つねにわたり給ひけるを聞き侍りてゆげひの命婦が許に遣しける 東三条入道前撰政太政大臣) (異)

時にこそかゝる山辺もかひはありけれ、(河)かゝる山べもかひはありけれ

②いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり(古今集卷十、恋一、五五、題しらす 読人しらす・小町集、一五六六「あやしかりける秋の夕暮」(岷)なけれど

も(第三句)

28 おもかげにつとそひておほさるゝにもやみのうつゝには猶おとりけり(二二・34)

むば玉の闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり(古今集卷十、恋三、六四、題しらす 読人しらす・古今

六帖第四、片恋、三六六) (釈前、(釈宮) だい本 さやかなる、(奥) (巻) (異) (河) (入弄) (一) (細) (千句) (一) (休)

(紹) (屋) (孟) (岷) (新) ぬば玉の、(湖) (引) (余) (全)

29 やもめずみなれど(二一三・34)

長からぬ命のほどに忘るゝはいかにみじかき心なるらむ(伊勢物語、二六) (河)命のうちに 示本真本「ほどにせ、(孟)

30 やみにくれてふしゝづみ給へるほどに(二一四・34)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に感ひぬるかな

(後撰集卷五、雑二、二二二、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとめてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうちなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第二、三三三

「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一六五、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言) (引) (新) (余)

(事) (評) (集)

31 月影ばかりぞやへむぐらにもさはらすさしいりたる(二二一・34)

①訪ふ人もなき宿なれどくる春は八重むぐらにもさはらざ

りけり〔古今六帖第三、宿、三三六・貫之集、一七四三、三条
右大臣殿の御屏風の歌〕〔奥〕〔業〕〔異〕〔河〕〔入弄〕〔一〕、

〔細〕〔第二句ノミ〕、〔休〕〔絶〕〔屋〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕〔引〕〔新〕

〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

②八重むぐらしげれる宿の寂しき人こそ見えぬ秋はきに

けり〔拾遺集卷三、秋、一四、河原院にて荒たる宿に秋来る
といふころを人々よみ侍りけるに 惠慶法師〕〔釈前〕

さびしきは、〔釈宮〕〔釈書〕〔奥〕〔業〕〔異〕〔河〕〔入弄〕〔絶〕

〔孟〕〔峴〕〔事〕

③今更にとふべき人も思ほえず八重葎してかどさせりてへ

〔古今集卷十六、雑下、七五、かへし 読人しらす・古今六帖
第五、くれどあはず、三六四〕〔異〕〔河〕〔孟〕

32 よもきふの露わけいり給につけてもいとつかしうなむとて

〔二三・34〕

いかでかは尋ねきつらむ蓬生の人も通はぬわが宿のみち

〔拾遺集卷十六、雑賀、二三、題しらす 読人しらす・高光
集、一四六、多武峯に住む頃人のとぶらひたる返事に〕

〔河〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕〔引〕〔新〕

33 しばしはゆめかとのみたどられしを〔三二・35〕

かげろふのほのめきつれば夕暮のゆめかとのみぞ身をたど
りつる〔後撰集卷三、恋四、八吾、女につかはしける 読人
しらす〕〔余〕

34 とひあはずべき人だになきをしのびてはまiori給ひなんや

〔三九・35〕

思ふこといはずでたゞにやみぬべき我とひとしき人しなけ
れば〔伊勢物語、三三・新勅撰集卷七、雑三、二六、題しら
ず 業平朝臣、「いはでたゞにぞ」〕〔峴〕いはでたゞにや

35 宮木のつゆふきむすぶ風のをとこにはきがもとを思ひこそ
やれ〔三五・36〕

①みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり

〔古今集卷三、東歌、陸奥歌、二二五・古今六帖第一、露、三
四三〕〔峴〕〔下句ノミ〕

②あらし吹く風はいかにと宮城野の小萩が上を人のとへかし

〔新古今集卷十六、雑下、一六、野分したるあしたに稚き人
をだに問はざりける人に 赤染衛門〕〔拾遺集〕露もとへか

し、〔新〕〔余〕〔集〕

③宮城野のもとあらのこ萩露を重み風を待つごと君をこそま
て〔古今集卷十四、恋四、六六、題しらす 読人しらす・古今
六帖第五、人を待つ、三六六・同第六、秋萩、三四六〕〔事〕

36 いのちながさのいとつらう思給へしらるゝに松のおもはんこ
とだにはづかしう〔三〇・36〕

①いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむこともはづか
し〔古今六帖第五、名を惜む、三六三〕〔釈前〕〔奥〕〔業〕

〔異〕〔河〕〔休〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕いかにしてありと知ら
れじ、〔釈宮〕〔一〕〔絶〕〔孟〕いかにして、〔釈書〕いかにしてありときかれじ、

〔入弄〕〔入細〕、〔峴〕いかにしてありとしられん、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさし

き〔古今集卷十九、雑体、二〇三、題しらず 読人しらず・古今六帖第四、雑の思、三三三六〕「事もやさしく」〔新〕

③いたづらに世にふる物と高砂の松も我を友と見るらむ

〔拾遺集卷六、雑上、四三三、つかさたまはらで歎き侍りけるころ人のさうしかくせ侍りける奥にかきつけ侍りける 貫之・貫之集、一六〇六〕〔新〕

37 もくしきにゆきかひ侍らんことは〔三三七・36〕

仮初めのゆきかひちとぞ思ひこし今は限りの門出なりけり〔古今集卷十六、哀傷、六三三、甲斐の国にあひ知りて侍りける人とぶらはむとてまかりける道なかにてにはかに病ひをしていまとなりにければよみて京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍りける歌 在原滋春・大和物語、六三三、〕「思ひしを」〔河〕〔孟〕〔岷〕

38 ゆくしき身に侍ればかくておはしますもいまましよう〔三三三〕

①わびぬれば常はゆくしき七夕も羨まれぬる物にぞありける〔拾遺集卷十五、恋三、三三三、題しらず 読人しらず・古今六帖第一、七日の夜、三三〇三、深養父〕〔河〕、〔紹〕常にゆくしき、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔余〕

②ゆくしとていむとも今はかひも有らじ憂きをば風につけて止みなむ〔拾遺集卷十九、雑恋、二二〇、女のもとに扇を遣はしたりければいひ遣はしける よみ人しらず〕〔河〕〔休〕

〔孟〕〔岷〕

③言に出でていはばゆくしみ山川のたぎつ心は塞きあへにけり〔万葉集卷十二、三四三、柿本集、一五三三〕「たぎつ心をせきぞかねつる」・古今六帖第五、いはで思ふ、三四六、人麿、

「たぎつ心をせきぞかねつる」〔余〕たぎつ心をせきぞかねたる

39 くれまどふ心のやみもたえがたきかたはしをだに〔三三四・36〕

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな〔後撰集卷十五、雑一、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとせめてまらうどあるじ酒あまたくびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、三三三、〕「迷ひぬるかな」・大和物語、三三・兼輔集、一六三三、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言〔奥〕〔紹〕迷ひぬるかな、〔卷〕〔異〕〔河〕へくしき〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕

〔対〕〔大〕

40 わりなき心のやみになんといひもやらずむせかへり給ほどに

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな〔後撰集卷十五、雑一、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとせめてまらうどあるじ酒あまたくびの後酔にのりて子供のう

めてまらうどあるじ酒あまたくびの後酔にのりて子供のう

へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第一、三三七

「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一三三、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言「釈前」まよひぬるかな、〔釈宮〕、〔眠〕〔上句ノミ〕

41 あながちに人めおどろく許おぼされしもながるまじきなりけりと (四四12・37)

三輪山の山辺真麻木綿短木綿かくのみ故に長しと思ひき (万葉集卷二、一三、高市皇子尊) (新)

42 今はつらかりける人のちぎりになむ (四四13・37)

君とわれいかなることをちぎりけむ昔のよこそ知らまほしけれ (和漢朗詠集卷下、交友、三三〇・新千載集卷上、恋、一〇三、題しらず 読入しらず) (引)

43 いとしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人 (四四9・38)

①五月雨にぬれにし袖にいとしく露置きそふる秋のわびしさ (後撰集卷六、秋中、二七、母のぶくにて里に侍りけるに先帝の御文給へりける御返事に 近衛更衣) (紫) (河)

〔和〕〔孟〕〔眠〕〔湖〕ぬれにし袖を、〔拾〕〔第二句ノミ〕ぬれにし袖を、〔新〕〔余〕〔集〕

②大方も秋はわびしき時なれど露けかるらむ袖をしぞ思ふ (後撰集卷六、秋中、三六、御かへし 延喜御製) (異)

③わが宿や雲の中にも思ふらむ雨も涙もふりにこそ降れ (伊勢集、一三六、拾遺集卷十五、三三、題しらず 人麿、「わがごとや」〔集〕)

44 かごともしきこえつべくなんといはせ給ふ (四四9・38)

①梓弓真弓楸弓としを経て我がせしかごとうるはしませよ (伊勢物語、六) (河)〔孟〕

②下紐のしるしとするも解けなくに語るがごととはあらずもあるかな (後撰集卷上、恋三、三三、かへし 読入しらず・伊勢物語、三六、「恋すぞあるべき」・古今六帖第五、ひも、三三六、「恋すぞあるべき」 (河)しるしとなるも (真本するも) …かゝるがごととは (真本かたるが) 恋すぞありける (真本有べき)、〔孟〕かゝるがごととは恋すも有りけり

③東路の道の果なる常陸帯のかごとばかりも逢ひ見てしがな (古今六帖第五、おび、三三〇・新古今集卷上、恋二、一〇三、題しらず 読入しらず、「おはむとぞ思ふ」 (河)〔孟〕あ

はむとぞ思ふ
45 いとうしろめたう思ひきこえ給て (四四2・39)

女郎花うしろめたくも見ゆるかなあれたる宿に独りたてれば (古今集卷四、秋上、三三、物へまかりけるに人の家に女郎花うゑたりけるを見てよめる 兼覽王) (河)〔孟〕

46 おまへのつばせんざいのいとおもしろさきかりなるを御覽するやうにて (四四4・39)

秋風になびく草葉の露よりも消えにし人を何にたとへん (拾遺集卷三、哀傷、三三六、中宮かくれ給ひての年の秋御前の前裁に露の置きたるを風の吹きなびかしたるを御覽じて 天曆御製) (河)〔和〕〔孟〕〔眠〕

47 長恨歌の御ゑ亭子院のかゝせ給て伊勢つらゆきによませ給へ

るやまとこの葉をももろこしのうたをもたゞそのすぢをぞ
まへらごにせさせ給(二六・39)

①紅葉ばに色見えわかで散る物は物思ふ秋の涙なりけり(伊勢集、二二五、長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひて其の所々をよませ給ひけり御手にて・続後撰集卷十、恋四、三六、題しらず 伊勢)〔葉〕〔河〕〔二〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔岷〕紅葉ばの色にわかれずふる物は、〔異〕紅葉ばの色見わかれずふるものは、〔湖〕〔新〕

②玉簾の明るるも知らで寝し物を夢にも見じと思ひけるかな(伊勢集、二二五)〔異〕〔休〕〔細〕〔新〕〔余〕思ひかけきや、(二)〔第二句ノミ〕〔湖〕

48 あらき風ふせぎしかげのかれしよりこはきがうへぞしづ心なき(二六・39)

①あはれわれ いつゝの宮の みやびとゝ その数ならぬ 身をなして 思ひしことは かけまくも かしこけれ共 たのもしき かげに二たび おくれたる ふたばの草を ふくかぜの 荒きかたには あてじとて せばき袂を 誰れかみむ とおもふ心に おほけなく かみつ枝をば さしこえて はな咲く春の みやびとゝ なりし時はゝ い かばかり しげき影とか たのまれし 末の世までと こととして 誰ならなくに をやまだを 人にまかせて わ れはたゞ 袂そほづに 身をなして ふたはる三春 すぐ しつゝ その秋ふゆの あさぎりの 絶間にだにも と思ひしを みねのしら雲 よこさまに 立ち変りぬと みて

しかば 身を限とは おもひにき 命あらばと たのみし
は 人におくるゝ ななりけり 思ふもしるし やまがは
の みなしもなりし もるびとも 動かぬきしに 守りあ
げて 沈むみくづの はてくは かき流されし かみな
づき 薄きこほりに とぢられて とまれる方も なきわ
ぶる なみだ沈みて かぞふれば ふゆも三月に なりに
けり 長きよなく しまたへの ふさぎ休まず 明けく
らし 思へどもなほ かなしきは やそうち人も あたら

よの 例なりとぞ さわぐなる 況てかすがの すぎむら
に 未だかれたる 枝はあらじ おほ原のべの つぼすみ
れ つみ犯しある ものならば 照日もみよと いふこと
を 年のをはりに きよめずは わが身ぞ遂に ちぢぬべ
き 谷のうもれ木 はるくとも 借ややみなむ 年のうち
に 春ふくかぜも 心あらば 袖のこほりを とけとふか
なむ(拾遺集卷六、雑下、吾四、円融院の御時大將はなれ侍
りて後久しく参らで奏せさせ侍りける 東三条太政大臣)

〔拾〕〔新〕〔余〕たのもしき 陰にふたゝび おくれたる
ふた葉の草を 吹風の あらきかたには あてじとて
せばきたもとを ふせぎつゝ(二部ノミ)

②この折れる桜の散らで残れるは荒き風にも当てずやありけむ(忠見集、三三六、桜散りてなき折に折りたるを人のもたれば)〔余〕

③宮城野のもとあらのか萩露を重み風を待つごと君をこそまつて(古今六帖第三、人を待つ、三三六、同第六秋萩、三四六、

古今集卷十四、恋四、六六〔事〕

49 かくても月日はへにけりあさましうおほしめさる(二二14・40)

身を憂しと思ふに消えぬものなればかくてもへぬる世にこそありけれ(古今集卷十五、恋五、〇六、題しらず、読人しらず)〔岷〕〔湖〕〔新〕〔余〕〔集〕

50 たづねゆくまほろしも哉つてにてもたまのありかをそことしるべく(二二7・40)

奥津島雲居のきしを行きかへりふみかよはさむ幻もがな(拾遺集卷六、雑下、四七、対島守小野のあきみちがめ隠岐がくだり侍りける時にとも雅の朝臣のめ肥前がよみて遣はしける、元輔)〔余〕雲井の峯を

51 花とりのいろにもねにもよそふべき方ぞなき(三10・40)

花鳥の色をも音をもいたづらにもものうかる身はすぐすのみなり(後撰集卷四、夏、二三、かへし、藤原雅正・貫之集、二二二、返し、「色をも香をも…すぐすなりけり」)〔紫〕〔休〕すぐすなりけり、〔異〕色にもねにも…すぐすなりけり、〔河〕すぐすばかりなり、〔岷〕物思ふ身は、〔湖〕〔引〕〔新〕、〔余〕すぐすばかりなり(すぐすのみなり)、〔対〕〔事〕〔大〕

52 あさゆふのことぐさにはねをならべ枝をかはさむと(三11・41)

①生きての世死にての後の後の世も羽を交せる鳥となりなむ(大鏡卷三、六三、村上天皇・玉葉集卷十二、恋三、二五碧、宜耀

殿の女御にたまはせける、天曆御製)〔異〕はねをならぶる、〔河〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔集〕

②秋になる言の葉だにも変らずは我も交せる枝となりなむ

(大鏡卷三、六三、村上女御芳子・玉葉集卷十二、恋三、二五碧、御返し、女御藤原芳子)〔異〕、〔河〕秋ちぎる、〔孟〕秋ちぎる…我もかはらぬ、〔岷〕〔湖〕〔新〕〔余〕かくちぎる(初句、〔集〕

53 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやと(二二4・41)

九重の内だにあかき月影に荒れたる宿をおもひやるかな(拾遺集卷七、雑秋、二二二、中宮のうちにおはしましたける時月の明き夜歌よみ侍りけるに、善滋為政)〔余〕〔集〕

54 あしたにおきさせ給とてもあくるもしらでとおほしいづるにもなをあさまつりことはをこたらせ給ひぬべかめり(二二7・41)

玉すだれ明くるも知らで寝しものを夢にも見じと思ひけるかな(伊勢集、二二二、長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひてその所々をよませ給ひけり御手にて、「玉簾の」)〔積前〕あくるもしらず、〔積宮〕玉すだれあくるも知らず…夢に見えずとなげきつるかな、〔釈書〕玉の簾あくるもしらず…思ひかけきや、〔奥〕〔紫〕〔異〕あくるもしらず…思ひかけきや、〔河〕〔二〕〔休〕〔紹〕思ひかけきや、〔弄〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

55 いとたいくしきわざなりと人のみかどのためしまでひきいで (二八四・42)

①なにわざをわれはしつゝかあまてるやひるめの神をしばしとらめん (未詳)〔河〕、〔孟、われはしつゝも、〕〔眠〕

②如何ばかり 良き業してか 天照るや 日靈女の神を 暫し留めむ 暫し留めむ (神楽歌、日靈女歌、七三)〔河〕

56 かの御をば北の方 (二九六・42)

親の親と思はましかば問ひてまし我が子の子にはあらぬなるべし (拾遺集卷六、雑下、五三、源重之が母の近江のこぶに侍りけるにうまこの吾妻よりよるのぼりて急ぐ事侍りてえ此度逢はで上りぬることと言ひて侍りければおぼの女のみ侍りける・源重之集、二九三、うまこのよりこで京へ行くを恨みて女に代りて)〔業〕あらぬなりけり、〔河〕

〔孟〕〔眠〕

57 いまよりなまめかしうはづかしげにおはすれば (三〇三・43)

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時

(古今集卷六、誹諧、二〇六、題しらず 僧正遍昭・古今六帖第六、女郎花、三〇三、遍昭集、二八六)〔河〕〔孟〕

58 すべていひつゞけばことくしうゝたてぞなりぬべき人の御さまなりける (三〇五・43)

散るとみてあるべき物を梅の花うたて匂ひの袖にとまれる (古今集卷二、春上、四、寛平の御ときさいの宮の歌合の歌 素性法師・素性法師集、二七〇、古今六帖第六、梅、三〇六)

六 素性・寛平御時后宮歌合、三三三、素性 (拾) (第四句、新)

59 こよなおおほしなぐさむやうなるもあはれなるわざなりけり (三三四・46)

こよなくてけふは涼しき袂よりあふぐ風さへ秋になりつゝ (中務集、三六四、東宮の殿上人あふぎ奉れ給へる)〔拾〕

60 はゝみやす所もかげだにおぼえたまはぬを (三三九・46)

なき人の影だに見えぬ遣水の底に涙を流してぞこし (後撰集卷三、哀傷、一四三、なくなりける人の家にまかりてかへりてのあしたにかしこなる人に遣はしける 伊勢・伊勢集、一四六、亡くなりける人の家にまかりてあしたにかしこの人に遣しける)〔花〕〔孟〕〔眠〕そこは涙を、

〔尾〕

61 又この宮とも御なかそばくしきゆへ (三六一・47)

優婆塞がおこなふ山の椎がもとあなそばくしとこにしあらねば (うつほ物語、菊の宴)〔拾〕

62 このおりのうしろみなかめるをそひぶしにもと (三五八・48)

年月は我が身にそへて過ぎぬれど思ふ心のゆかずもあるかな (西宮左大臣御集、三三四、九条殿の三の宮に聞え給ふ・新古今集卷十一、恋一、九六、九条右大臣の女にはじめて遣しける 西宮前左大臣)〔河〕〔孟〕

63 いとよきなきはつもとゆひにながき世をちぎる心はむすびこめつや (三六一・49)

ゆひそむる初もとゆひのこ紫衣のいろに移れとぞ思ふ〔拾遺集卷五、賀、三三〕、三善のすけたら冠し侍りける時 能宣〔異〕〔余〕

あるかひもなき、〔紹〕影をやみせん…池の心ぞあるかひもなき

64 むすびつる心もふかきもとゆひにこきむらなきの色しあせずは〔元〕3・49〔

①今日よりや天の河原はあせなくむ底ひともなく唯渡りなむ

〔後撰集卷五、秋上、七夕をよめる 紀友則〕〔紫〕けふよ

りは…あせならんそよみともなく、〔異〕七夕の…明けな
くむそよみともなくこゝわたるべく

②君こそは閨へもいらじこ紫わがもとゆひに霜はおくとも

〔古今集卷十四、恋置、六三、題しらず 読人しらず〕〔河〕

〔孟〕〔峴〕

③ゆひそむる初もとゆひのこ紫衣のいろに移れとぞおもふ

〔拾遺集卷五、賀、三三〕、三善のすけたら冠し侍りける時

能宣〔河〕〔孟〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔第三句ノミ〕

65 なる人なくもおはしけるかな〔三〕6・50〔

※にる人なくもこゝらみるよにありがたく河別表

秋の夜の月かも君は雲隠りしましく見ねばこぞ恋しき

〔万葉集卷十、三三六・拾遺集卷五、恋置、六三、題しらず 人

麿〕〔河〕雲がくれしはしも見ねばこゝら恋しき

66 池のこころひろくしなしてめでたくくりのゝしる〔元〕3・

51〔

散りぬとも影をやとめむ藤の花池の心のあるかひもなく

〔躬恒集、二五八〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔峴〕〔新〕〔余〕池の心ぞ

1 かたりつたへけむ人のものいひさがなきよ (三三・55)

こゝにしも何句ふらむ女郎花人の物いひさがにき世に

(拾遺集卷七、雑秋、二〇六、房の前裁見に女どもまうで来りければ 僧正遍昭・遍昭集、一六七、嵯峨に侍りし法師の坊の前に前裁のはべりけるを女どもたちとまりて見侍りしかば) (河) (休) (引) (余)

2 しのぶのみだれやとうたがひきこゆる事も (三三六・55)

①春日野の若紫のすりごろもしのぶのみだれかぎり知られず

(古今六帖第、すり衣、三三六・伊勢物語、二六・業平集、二三四) (釈前) (釈宮) (異) むさし野の、(奥) (紫) (河) (休) (孟) (屋) (岷) (湖) (引) (余) (全) (対) (事) (大) (集)

②みちのくのしのぶもちずり誰故に乱れむと思ふ我ならなく
に (古今集卷五、恋四、三四、題しらず 河原左大臣・伊勢物語、二七・古今六帖第、すり衣、三三六) (新)

10・55)

かざすとも立ちと立ちなむ無き名をば事無し草のかひやなからん (後撰集卷七、雑三、三三三、しぞくに侍りける女の男に名立ちてかゝる事なむある人にいひさわけといひ侍りければ 貫之) (河) (紹) 立ちにし我が名には、(岷)

4 この君もいとものうくしてすきがましきあだ人なり (三六・56)

①秋と云へばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にこそありけれ (古今集卷五、恋三、二四、題しらず 読人しらず) (紫)、(異) よそにてき、し

②あだ人もなきにはあらずありながら我が身にはまだ聞きぞ習はぬ (後撰集卷七、恋三、二七、女の許よりあだにきこゆることなどいひて侍りければ 左大臣・清慎公集、三三〇、また、「なきに非ずありといへば、聞きも習はぬ」) (紫) (異)

5 あそびももろともにおさく／＼たちをくれず (三三三・56)

とやの野に兎ねらはりをさをさも寝なへ兎故に母にころば

6 むつれきこえ給ける (三五・56)

思ふとていとこそ人に馴れざらめしか習ひてぞみねば恋し

き (拾遺集卷五、恋四、三〇、題しらず 読人しらず) (河) なにしに人にむつれけん、(孟) (湖) (余) なにしか人にむつれけん、(引) いとこそ人になれざらめ、(拾) いとこそ人になれざらめ、何しか人にむつれけん

7 殿上にもおさく／＼人ずくなに (三三六・56)

くれたけの よゝのふること なかりせば 伊香保の沼のいかにして 思ふこゝろを のばへまし あはれ昔々ありきてふ 人麿こそは うれしけれ 身は下ながらこの葉を 天つそらまで きこえあげ 末の世までのち

りの身に つもれることを とはるらむ これを思へば
 いにしへも 葉けがせる けだものゝ 雲にほえけむ こ
 ちして ちゞの情も おもほえず 一つこゝろぞ ほこ
 らしき かくはあれ共 てるひかり 近きまもりの 身な
 りしを たれかは秋の くるかたに 歎き出でゝ みかき
 より 殿上もる身の みかきもり をさゝしくも おも
 ほえず こゝの重ねの なかにては あらしの風も きか
 ざりき 今は野やまし ちかければ 春はかすみに たな
 びかれ なつはうつ蟬 なきくらし 秋はしぐれに そで
 をかし ふゆは霜にぞ せめらるゝ かゝる佗しき 身な
 がらに つもれる年を しるせれば 五つの六つに なり
 にけり 是にそはれる わたくしの 老のかずさへ やよ
 ければ 身は賤しくて としたかき ことの苦しき かく
 しつゝ ながらの橋の ながらへて なにはの浦に たつ
 なみの 波のしわにや おぼゝれむ さすがに命 をしけ
 れば こしの国なる しらやまの かしらは白く なりぬ
 とも おとはの滝の おとにきく 老ず死なずの くすり
 もが 君が八千代を わかえつゝ見む (古今集卷五、雑
 体、短歌、100) ふる歌にくはへたてまつれる長歌 壬生
 忠岑 (紫) (異) (河) (花) とのへもる身のみかきもり
 おさゝしくもおもほえず (一部ノミ)

8 さりぬべきすこしはみせむかたわなるべきもこそとゆるし給
 はねば (三九・56)

①かたはなるなの乙箭にも聞こゆれば思ひいらるゝこゝろに

もあるかな (うつほ物語、初秋) (拾)

②つはものゝはらに宿るはつらけれどかたはに見えぬ乙箭な
 りけり (うつほ物語、初秋) (拾)

③秋の夜の数をかせむ鳴の羽の今は乙箭のかたはにはせむ
 (うつほ物語、初秋) (拾)

④大鳥のはねやかたはになりぬらん今は乙箭に霜の降るらん
 (うつほ物語、初秋) (拾)

9 をのがじゝうらめしきおりゝましがほならむゆふぐれなど
 の (三十一・57)

①おのがじし人死にすらし妹に恋ひ日にけに瘦せぬ人に知ら
 えず (万葉集卷三、三二六) (紫) (河) 日ごとにやせぬ人
 にしられず、(孟) 人死すらしも：日ごとにやせぬ人に
 しられず、(拾) (余) 人にしられず

②秋風の四方の山よりおのがじゝふくに散りぬる紅葉悲しな
 (拾遺集卷七、物名、四十九日 すけみ) (紫) (河)

(孟)、(湖) (引) 紅葉かなしも、(拾) 秋風に、(余)

③春は梅秋はまがきの菊の花おのが香かくぞ哀なりける (古
 今六帖第一、まがき、三三〇、貫之) (紫) (河) (孟) をの
 がじゝこそ恋しかりけれ

④置く箱の心やわける菊の花移ろふ色の己がじゝなる (貫之
 集、二五五、延喜の末よりこなた延長七年よりあなた内々
 の仰にて献れる御屏風の歌二十七首、冬) (拾) (余)

⑤恋はみなさまざまありと聞くなべに己がじゝとぞ首は泣か
 れける (古今六帖第四、恋、三六四) (拾) (余)

10 まちがほならむゆふぐれなどのこそみ所はあらめ(三六・57)

④人しれぬ人待ち顔に見ゆるはたが頼めたる今夜なるらむ

(拾遺集卷六、雑恋、二三)、まだ少將に侍りける時うねへ

まちのまへをまかり渡りけるにあすかのうねべながめいだ

して侍りけるに遣はしける 小野宮太政大臣(拾、余)

②池水の底にあらではねぬなほのくる人もなし待つ人もなし

(拾遺集卷六、雑恋、二三)、返し 明日香の采女(拾)

11 心あててそれかかれかなとふなかに(三二・57)

心あててに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花

(古今集卷五、秋下、三三)、白菊の花をよめる 凡河内躬恒・

古今六帖第六、きく、(四六六)、躬恒・和漢朗詠集卷上、秋、

12 たどうはべばかりのなさけにてはしりがき(三三・58)

①うはべなきものかも人はしかばかり遠き家路を還さく思へ

ば(万葉集卷四、三三、湯原王・古今六帖第五、くれどあは

ず、三六七、「ものかは人は返すと思へば」(拾)かへ

すおもへば、(余)かへすとおもへば

②うはべなき妹にもあるかもかくばかり人の情を尽くさく思

へば(万葉集卷四、六六、大伴宿禰家持)(拾)つくすと思

13 世のおほえくちおしからずものねざしいやしからぬ(三九・60)

滝つせにねざしとどめぬ浮草のうきたる恋も我はするかな

(古今集卷三、恋、三五)、題しらす 忠岑・忠岑集、二六九

「根ざし止まらぬ」(河)(五)

14 すべてにぎはしきによるべきなむなりとて(三九・60)

高き屋に登りてみれば煙たつたみのかまどは賑ひにけり

(新古今集卷七、賀、七〇)、貢き物ゆるされて困とめるを御

覽じて 仁徳天皇御製・水鏡、一〇三(河)(五)

15 さびしくあばれたらむむぐらのかどにおもひのほかに(四〇・61)

今さらにとふべき人も思ほえず八重葎してかどさせりてへ

(古今集卷六、雑下、六三)、題しらす 読人しらす・古今

六帖第五、くれどあはず、三六六(眠)(引)

16 すぐれてきすなきかたのえらびにこそをよばざらめ(四二・61)

直き木に曲れる枝もある物を毛を吹き疵をいふがわりなき

(後撰集卷六、雑二、二五)、いたくこと好む由を時の人い

ふときゝて 高津内親王(紫)いふがわりなき

17 そひふし給へる御はかげいとめでたく女にてみたまつらま

ほし(四二・62)

灯のかげにかがよぶうつせみの妹が咲しおもかげに見ゆ

(万葉集卷二、三三三)(拾)

18 とあればかゝりあふさきるさにてなのめにさてもありぬべき

人のすくなきを(四二・62)

①そへにとてとすればかかりかくすればあないひ知らずあふ

さきるさに(古今集卷六、雑体、誹諧、一〇三)、題しらす

読人しらす・古今六帖第四、雑の思、三六三(釈前)しか

あればとあればかゝり、〔釈宮〕しかありと、〔奥〕〔紫〕

〔屋〕しかりとて〔初包〕、〔異〕しかあれば、〔河〕〔花〕

〔二〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕

〔大〕〔評〕〔集〕

②今日そへに暮れざらめやはと思ども堪へぬは人の心なりけり
〔後撰集卷三、恋四、八三、みくしげ殿にはじめて遣はしける 敦忠朝臣・大和物語、三六、〔岷〕

19 のがじゝはちりもつかじと身をもてなし〔三五・63〕

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわがぬる床夏の花

〔古今集卷三、夏、一奇、隣よりとこ夏の花をこひにおこせ

たりければをしてみてこの歌をよみて遣はしける 躬恒・古

今六帖第六、なでして、〔四七二〕、「植えしより」・和漢朗詠

集卷上、秋、前裁、三九、〔集〕

20 又さやかにのみてしがなとすべなくまたせ〔四八・63〕

①逢ふことの 稀なるいろに おもひそめ わが身は常に

あまぐもの 晴るゝ時なく 富士のねの 燃えつゝとはに

おもへども あふことかたし なにしかも 人をうらみ

む わたつみの 沖をふかめて おもひてし おもひは今

は いたづらに なりぬべら也 ゆくみづの たゆる時な

く かぐなはに おもひ乱れて ふるゆきの けなばけぬ

べく おもへども えぶの身なれば なほやまず 思ひは

深し あしびきの やました水の 木がくれて たぎつ心

を たれにかも あひ語らはむ 色にいでば 人しりぬべ

み すみぞめの タペになれば ひとり居て 哀れくにと

歎きあまり せむ術なみに 庭にいでゝ たち休らへば

しろたへの ころもの袖に おくつゆの けなばけぬべ

く おもへども なほ歎かれぬ はるがすみ よそにも人

にあはれとおもへば〔古今集卷六、雑体、短歌、題しらす

ず 読人しらす〕〔河〕あはれくとなげきあまりせんす

べなみに庭にいでゝたちやすらへば〔二部ノミ、〔孟〕あは

れくゝと歎きあまりせむすべなみに庭にいでゝ〔同〕

②阿武隈に霧立ち曇り明けぬとも君をばやらじまてばすべな

し〔古今集卷三、東歌、陸奥歌、二〇七、〔河〕霧たちわた

り、〔孟〕

21 なみだもさしぐみもしはあやなきおほやけはらだゝしく〔四

4・64〕

古への野中の清水みるからにさしぐむものは涙なりけり

〔後撰集卷三、恋四、八四、おひすみける人心にもあらで別

れにけるが年月をへてもあひ見むとかきて侍りける文を見

出でゝ遣はしける 読人しらす〕〔拾〕〔余〕

22 くまなきものいひもさだめかねていたくうちなげく〔四一四・

65〕

思ふてふ人の心のくまごとに立ち隠れつゝみる由もがな

〔古今集卷六、雑体、俳諧、三三六、題しらす 読人しらす

・古今六帖第四、雑の思、三三六、〔河〕〔孟〕

23 いとくちおしくねぢけがましきおほえだになくは〔四一・65〕

奈良山の児の手柏の両面にかにもかくにも倭人の徒〔万

葉集卷六、三三六、〔河〕ふたおもてゝねぢけ人も、〔孟〕

24 (帳) ふたおもてとにもかくにもねぢけ人かな、(余)
あまりゆへよし心ばせうちそへたらむをばよろこびにおもひ

(四三・65)

葦屋の 菟原処女の 八年児の 片生の時ゆ 小放髪に
髪たくまでに 並び居る 家にも見えす 虚木綿の 隠り
てぞれば 見てしかと 悵憤む時の 垣ほなす 人の眺ふ
時 血沼壮士 菟原壮士の 盧屋焼く すすし競ひ 相結
婚ひ しける時は 焼太刀の 手柄押しねり 白檀弓 鞆
取り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立ち向ひ 競ひ
し時に 吾妹子が 母に語らく 倭文手纏 賤しきわがゆ
ゑ 丈夫の 争ふ見れば 生けりとも 逢ふべくあれや
ししくしろ 黄泉に待たむと 隠沼の 下延へ置きて う
ち嘆き 妹が去ぬれば 血沼壮士 その夜夢に見 取り続
き 追ひ行きければ 後れたる 菟原壮士 天仰ぎ 叫び
おらび 足ずりし 牙喫み建びて 如己男に 負けてはあ
らじと 懸佩の 小剣取り佩き ところ葛 尋め行きけれ
ば 親族どち い行き集ひ 永き代に 標にせむと 遠き
代に 語り継がむと 処女墓 中に造り置き 壮士墓 此
方彼方に 造り置ける 故縁聞きて 知らねども 新喪の
如も 哭泣きつるかも (万葉集卷六、一〇六) (拾) (余) 処
女墓 中余造置 壮士墓 此方彼方二 造置有 故縁聞
而 雖不知 新喪之如毛 哭泣鶴鴨(二部ノミ)

17 帯 木

25 うらみにいふべきことをもみしらぬさまにしのびて (四六・65)

我を君難波の浦にありしかば憂きめをみつのあまとなり
き(古今集卷六、雑下、六三、題しらず 読人しらず)

(弄) (一) (第二句ノミ)、(五)

26 うへはつれなくみさをつくり (四七・65)

① 葦葉の上はつれなき裏にこそ物あらがひはつくと云ふなれ
(後撰集卷七、恋四、六四、せをそこ通はしけれどもまだあ
はざりける男をこれかれあひにけりといひ騒ぐをあらがは
ざなりと恨み遣はしければ 読人しらず) (河) (五)

(帳) (湖) (引) (新) (余)

② 若ねはふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を
(拾遺集卷十四、恋四、八三、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、うき、三五四) (花) (休) (紹)、(五) おもふ心
に、(帳)

③ あるが上にまたぬぎかくる唐衣み棹もいかづつもりあふべ
き(後拾遺集卷十五、雑一、八四、赤染、右大臣道綱に名たち
侍りけるころつかはしける 大江匡衡朝臣) (五) (余)
つくりあふべき、(湖)

27 ふかき山ざと世ばなれたるうみづらなどにはひかくれぬる
(四八・65)

山里は物の寂しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけ
り(古今集卷六、雑下、六四、題しらず 読人しらず・小
町集、五六九・忠岑集、二六九・和漢朗詠集卷下、山家、異
三、「ものさびしかる」(業)物のわびしき

28 心ふかしやなどほめたてられてあはれすゝみぬればやがてあ

まになりぬ (四14・66)

我を君難波の浦にありしかば憂きめをみつゝの蟻となりなき

(古今集卷六、雑下、題しらず 読人しらず) (細) (第一

二句ノミ)、(休) (紹) (岷) (湖)

29 ひとすらにうしとおもひはなれぬ男きつつけて (四3・66)

ひとすらに我が思はなくに己れさへかりくとのみ鳴き渡るらん (後撰集卷七、秋下、三六、題しらず 読人しらず)

(紫) ひとすらに (河)

30 つかみ人ふるごたちなど (四4・66)

西京なる御達は 綾千疋 繡千疋 繰りあげて 居るかと

しのびきするや ぬのびきするや 蟋蟀の 何ど姦むかし

萩の花や (風俗歌、雑芸歌、四) (紫) くりあげてを

るとか しのびきすなや ぬきひきすなや…などかたち

から、イ本みのくにかみの宿の御達は、(河) (孟)

31 あへなく心ばそければうちひそみぬかし (四5・66)

百年に老舌出でてよよむとも我はいとはじ恋は益すとも

(万葉集卷四、七四、大伴宿禰家持・古今六帖第二、おむな、

三三六六) (紫) (河) (孟) おいくちひそむよどむとも、

(拾) (余)

32 にごりにしめるほどよりもなまうかびにては (四7・66)

はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉におびむく

(古今集卷三、夏、一四、蓮の露を見てよめる 僧正遍昭・

古今六帖第六、はちす、三三三三、へんせう・遍昭集、二六六六、

はちすに露のおきたるを、「などかは露を」・和漢朗詠集

卷上、夏、蓮、二二、「にごりにそまぬ…などかは露を」

(釈前) (釈宮) (奥) (紫) (異) (河) (二) (八細) (休)

(孟) (岷) (湖) (引) (余) (事) (評)

33 われももうしろめたく心をかれしやは (四11・67)

忘すらんと思ふ心のうたがひにありしよりけにもぞ悲しき (伊勢物語、美・新古今集卷五、恋三、二二) (細) (孟)

(七句ノミ)

34 さるかたのよすがにおもひてもありぬべきに (四14・67)

① 志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすがの山と見つつ偲ば

む (万葉集卷六、三六、山上憶良) (河) (孟)

② あひみるめおきのこじまにふけよりてあまうてみちぬやす

がなみなり (宋詳) (河) (孟) あまそでみちぬ

35 あまりむげにうちゆるべみはなちたるも心やすく (四3・

67)

恨みぬも疑はしくぞ思ほゆる頼む心のなきかとおもへば

(拾遺集卷五、恋三、六六、題しらず 読人しらず) (拾)

(新) (余)

36 つらづえをつきてむかひる給へり (四六五・69)

① 歎きこる山とし高くなりぬればつら杖のみぞまつつかれけ

る (古今集卷六、雑体、誹諧、二二、題しらず 大輔)

(河) (孟) (余)

② こと繁き心よりさく物思ひの花の枝をやつら杖につく (貫

之集、二〇〇元・古今六帖第四、三三三三、貫之) (河) (孟)

〔余〕

③よもすがら物思ふ時のつら杖はかひなだるさぞ知られざりける(伊勢集、一六三〇) 屏風、夜一夜物思ひたる女の面杖つきたる所) 〔余〕

37をのくむつごとともえしのびとゞめずなんありける(四六・七・六九)

むつごとともまだ尽きなくに明けぬなりいつらは秋の長してふ夜は(古今集卷五、雑体、誹諧、一〇三、題しらず 凡河内躬恒・古今六帖第五、ふせり、三三六、)「明けにけり：長しといふよは」(河)「明けにけり、(孟)

38かくかずならぬ身をみもはなたでなどかくしもおもふらむと(四一・七〇)

かつみつゝかげ離れ行く水の面にかく数ならぬ身をいかにせむ(拾遺集卷五、恋四、八五、天曆の御時承香殿の前をわたらせ給ひてこと御かたにわたらせ給ひければ 斎宮女御・斎宮集、一六四、)いかなる折にかありけむ御硯に入れ給ひたりける、「河と見て…水の音に」(花)、(休)かつみゆる、(紹)〔屋〕〔岷〕〔余〕

39うとき人にみえはおもてぶせにや思はんとはゞかりはちて(四九・七〇)

かぎせども花も隠れぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなる(後撰集卷三、春下、六、延喜の御時殿上のをのこともなかめにめしあげられておのくかざしきしける序に 凡河内躬恒)〔拾〕〔新〕〔余〕

40人なみくにもなりすこしおとなびんにそへてもまたならぶ人なく(吾一・七一)

大女 少彦名の 神代より 言ひ継ぎけらく 父母を見れば 尊く 妻に見れば 愛しくめぐし うつせみの 世の理と かく様に 言ひけるものを 世の人の 立つる言立

ちさの花 咲ける盛りに はしきよし その妻の児と 朝夕に 笑みみ笑まずも うち嘆き 語りけまくは 永久に かくしもあらめや 天地の 神こと寄せて 春花の盛

りもあらむと 待たしけむ 時の盛りそ 離れ居て 嘆かす妹が 何時しかも 使の来むと 待たすらむ 心さぶしく 南風吹き 雪消まさりて 射水川 流る水沫の 寄る

辺無み 左夫流その児に 紐の緒の いつがり合ひて 鳩鳥の 二人双び坐 奈呉の海の 沖を深めて さどはせる 君が心の 為方もすべ無さ(万葉集卷六、四二六)〔拾〕

ちさの花 さけるさかりに はしきよし そのつまのこと あさよひに ぬみゝぬますも 打敷き かたりけまくは とこしへに かくしもあらめや あめつちの 神

ことよせて 春花の さかりもあらむと またしけむ 時のさかりそ(二部ノミ)

41てをおりてあひみし事をかぞふればこれひとつやは君がうきふし(吾一三・七二)

手を折りて逢ひ見しことを数ふれば十といひつゝ四つはへにけり(伊勢物語、三、)〔紫〕あひみし年を、〔異〕〔河〕へにける年を、〔湖〕下句ノミ、〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕

〔評〕〔集〕

42 けしきばめるせうそこもせいでいとひたやごもりになきけなかりしかば(三二・73)

憂きよりひたや籠りと思ふとも近江の海は打出で、見よ(和泉式部日記、四一・和泉式部集、四四〇)〔紫〕思へども…うちでくを見よ、〔異〕〔河〕思へども、〔孟〕〔湖〕〔余〕

43 いたくつなびきてみせしあひだに(三二・74)

引き寄せばたゞになよらで春駒の綱引きするぞなは立つと聞く(拾遺集卷六、雑賀、二二五、題しらす 平定文)

〔釈前〕たゞにはよせて…つなびきすればなはたゆときく、〔釈宮〕なはたゆときく、〔奥〕〔紫〕〔異〕、〔河〕

(此哥心不叶)、(一) たゞにもよらで、〔細〕(上句ノミ)、

44 たはぶれにくくなむおほえ侍し(三三・74)

ありぬやと心見がてら逢ひ見ねば戯れにくきまでぞ恋しき(古今集卷十六、雑体、誹諧、二〇三、題しらす 読人しらす)

〔紫〕〔異〕〔河〕(一) へ細く、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕

〔引〕〔新〕〔余〕〔事〕〔集〕

45 たつた姫といはむにもつきなからずたなばたのてにも(三三・74)

① わが行きは七日は過ぎじ竜田彦ゆめ此の花を風にな散らし(万葉集卷九、二四八)〔河〕〔孟〕 たつた姫…風に散らし

な

② 見る毎に秋にもなるかな立田姫紅葉そむとや山もきるらむ

(後撰集卷七、秋下、三六、題しらす 読人しらす・友則集、一三三)、「見るからに…山べしるらむ」(古今六帖第一、霧、三三三)、「秋にもあるか…山は照るらむ」(休) 秋にも成ぬ…山の照るらん、(紹) (余) 山のてるらん、(孟) みるまに…山のてるらむ、(岷) みるからに秋にも成か

…山の照るらむ、(湖) 秋にもなるか…山のてるらん

46 そのかたもぐしてうるさくなん侍し(三三・74)

武蔵鎧さすがにかけて頼むには訪はぬもつらし訪ふもつるさし(伊勢物語、三)〔岷〕

47 そのたなばたのたちぬふかたをのどめてながき契にぞあえま

し(三三・74)

逢ふことはたなばたつめにひとしくて裁ち縫ふわざはあえずぞありける(後撰集卷七、秋上、三三、源昇朝臣時々罷り通ひける時にふむ月の四五日はかりに七日の日の料に装束

てうじてといひつかはして侍りければ 閑院)〔紫〕〔異〕

おなじくてたちぬふかたはあはずぞあるべき、〔河〕〔孟〕

おなじくて、(一) おなじくてたちぬふことは、〔細〕(下句ノミ)、〔休〕〔紹〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔集〕

48 げにそのたつた姫のにしきにはまたしくものあらじ(三三・74)

① 見る毎に秋にもなる哉立田姫紅葉そむとや山もきるらむ(後撰集卷七、秋下、三六、題しらす 読人しらす・友則集、

後撰集卷七、秋下、三六、題しらす 読人しらす・友則集、

一五三、「見るからに…山べしるらむ」・古今六帖第一、霧、三五五、「秋にもあるか…山は照るらむ」〔紫〕〔異〕〔河〕

秋にもなるか…山のてるらん、〔引〕秋にもある哉

②竜田川もみぢ乱れて流るめりわたらば錦中やたえなむ〔古今集卷五、秋下、二六三、題しらず 読人しらず・古今六帖第一、にしき、三五三〕〔集〕

49 こよひ人まつらむやとなんあやししく心くるしきとてこの女の家はたよぎぬみちなりければ〔五二・75〕

今ぞ知る苦しき物と人またむ里をばかれずとふべかりけり〔古今集卷六、雑下、六六、紀の利貞が阿波介にまかりけるときに、馬のはなむけせむとて今日といひおくりける時にこゝかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければつかはしける 業平朝臣・伊勢物語、二五・業平集、一六五、古今六帖第二、里、三三三、業平〕〔余〕

50 この女の家はたよぎぬみちなりければ〔五二・76〕

①吹く風に逃へつくる物ならばこの一本はよぎよといはまし〔古今集卷三、春下、六、題しらず 読人しらず〕〔河〕

〔紹〕〔岷〕〔新〕

②春風は花のあたりをよぎてふけ心づからや移ろふとみむ〔古今集卷三、春下、六、春宮のたち花の陣にて桜の花のちるをよめる 藤原好風・古今六帖第一、春の風、三三三、藤原好風〕〔紹〕〔岷〕

③みわが崎荒石も見えず波立ちぬいづくゆ行かむ避道は無し〔万葉集卷七、一三六〕〔余〕

51 池の水かけみえて月だにやどるすみかをすぎむもさすがにており待ぬかし〔五二・76〕

①ふたつなき物と思ひし水底に山のはならで出づる月影〔古今集卷七、雑上、六六、池に月の見えけるをよめる 紀貫之・貫之集、一七九、池にみゆる月をよめる、「物と思ふを」・古今六帖第一、雑の月、三三四〕〔物と思ひしを〕

〔紫〕物と思ふを

②雲居にて相語らはぬ月だにもわが宿過ぎて行く時はなし〔拾遺集卷六、雑上、四三、参議玄上がめの月のあかき夜かどのまへを渡るとてせをそこいひいれて侍りければ 伊勢・伊勢集、一八三、はるかみの宰相の北の方月の明き夜かどの前を渡り給ふとてせうそをのみ云ひ入れ給へりければ返事に、「渡るとは見ず」〔巻〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔集〕

52 きくいとおもしろうつろひわたり〔五二・76〕

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば〔古今集卷五、秋下、三三、仁和寺に菊の花をめしける時に歌そへて奉れとおほせられければよみて奉りける 平さだふん・古今六帖第六、きく、三五九、千里〕〔集〕

53 風にきはへるもみちのみだれなどあはれとげにみえたり〔五二・76〕

秋の夜に雨と聞こえて降りつるは風に乱るゝ紅葉なりけり〔後撰集卷七、秋下、四〇、題しらず 読人しらず〕〔集〕

54 ふところなりけるふえとりいでゝふきならしかげもよしなど

つゞしりうたふ (詠2・76)

飛鳥井に 宿りはすべし や おけ 蔭もよし 御寒も寒

し 御寒もよし (催馬楽、飛鳥井、〇 (釈前) 安須加井

余ツ、也登利波安ミ春乎之ツ、也安ミ於介引一可爾毛与

引一美毛比ツ、毛於左牟之一見万久左毛於与之引引入釈

宮V入釈書V、〔奥〕あすか井にやどりはすべし影もよ

しみもひもさむしみまくさもよし、〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕

〔休〕〔紹〕入屋V〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

55 きよくすめる月におりつきなからず (詠6・76)

人にあはむ月のなきには思ひ置きてむね走り火に心やけを

り (古今集卷十九、雑体、誹諧、二三、題しらず 小野小町

・小町集、二五五、一月のなき夜は)〔花〕〔孟〕 (第二句ノ

ミ、)〔月のなき夜〕、〔岷〕 (第二句ノミ)

56 男いたくめで、すのもとにあゆみきてにはのみぢこそふみ

わけたるあともなけれなど (詠6・76)

秋は来ぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみ分けてとふ人はなし

(古今集卷三、秋下、二六、題しらず 読人しらず)〔紫〕

〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔一〕、〔細〕 (第二句ノミ)、

〔休〕、〔紹〕とふ人もなし、〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

57 ことのねも月もえならぬやどながらつれなき人をひきやとめ

ける (詠9・76)

芦ねはふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を

(拾遺集卷十四、恋四、八三、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、うき、三五四)〔異〕

58 おらばおちぬべきはぎの露 (詠7・77)

をりてみば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわわにおける白露

(古今集卷四、秋上、三三、題しらず 読人しらず・古今六

帖第一、露、三三三、)〔枝もとをく〕に〕・家持集、一三三〇

〔紫〕〔異〕〔河〕枝もとをく〕に〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔余〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕、入V引歌までもな

き、〔休〕〔引歌までも有べからず〕、〔紹〕〔引歌不及〕

59 ひろはゞきえなんとみる玉ぎのうへのあられなど (詠7・

77)

いづくにか宿りとるらむあさひこがさすや岡への玉笹の上

(古今六帖第一、照る日、三三三、)〔玉笹の上に〕・同第三、

やどり、三三三、)〔いづくにか〕かやどりとるらん〕たまご

まひこの、〔釈宮〕いづくにかやどりとるらん〕たまご

のあられ、〔釈書〕やどりはすらむ朝日さす岡辺の玉

篠のうへのあられ、〔奥〕いつらにかあさひこの、〔紫〕

〔異〕いづくにかあさひこの、〔河〕〔孟〕やどりはと

らんあさひこの、〔休〕〔正句ノミ〕、〔引歌までもなし〕、

〔岷〕あさひこが、〔湖〕あさひこの、〔事〕

60 中将ながしはしれもの、物がたりせむとて (詠13・78)

春の日の 霞める時に 墨吉の 岸に出で居て 釣舟の

とをらふ見れば 古の ことと思はゆる 水江の 浦島子

が 鯉釣り 鯛釣り誇り 七日まで 家にも来ずて 海界

を 過ぎて漕ぎ行くに 海神わたづみの 神の娘むすめ子に たまさか

に い漕ぎ向かひ 相とぶらひ 言成りしかば かき結

び 常世とこよに至り 海神の 神の宮の 内のへの 妙なる

殿に 携たづなはり 二人入り居て 老いもせず 死にもせずし

て 永き世に ありけるものを 世の中の 愚か人の 我

妹子こいもに 告りて語らく しましきは 家に帰りて 父母に

事も語らひ 明日のごと 我は来なむと 言ひければ

妹が言へらく 常世とこよに また帰り来て 今のごと 逢は

むとならば このくしげ 開くなゆめと そこらくに 堅

めしことを 曇吉とむきちに 帰り来りて 家見れど 家も見かね

て 里見れど 里も見かねて 怪しみと そこに思はく

家ゆ出でて 三年さんねんの間に 垣もなく 家失せめやと この

箱を 開きて見れば もとのごと 家はあらむと 玉くし

げ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世とこよに たな

びきぬれば 立ち走り 叫こゑび袖振り こいまろび 足ずり

しつゝ たちまちに 心消こゝろ失せぬ 若かりし 肌はだも皺しわみぬ

黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶えて 後

遂に 命死いのちにける 水江の 浦島うらしま子が 家所見いへゆ（万葉集

巻六、二四〇）〔弄〕〔休〕世間愚人乃吾妹児爾（二部ノミ、

巻六、二四〇）〔弄〕〔休〕世間愚人乃吾妹児爾（二部ノミ、

る（後撰集巻十、恋六、一〇三、題しらず 読入しらず）

78)

61 たのむにつけてはうらめしとおもふ事もあらむと（冥二・

〔一〕

62 おさなきものなどありしにおもひわづらひてなでしこの花を

おりておこせたりし（冥11・79）

置く露のかゝる物とは思へどもかれせぬものは撫子の花

（後撰集巻十、恋二、六九、かくておこせて侍りけれど宮づ

かへする人なりければいとまなくて又の朝に床夏の花につ

けておこせて侍りける）〔異〕

63 山がつのかきほあるともおりくにあはれはかけよなでしこ

の露（冥14・79）

①山がつの垣ほにはへる青つゞら人はくれども言つてもなし

（古今集巻十、恋四、七四、題しらず 寵）〔河〕〔孟〕

②あな恋し今も見てしが山がつのかきほに咲ける大和撫子

（古今集巻十、恋四、六九、題しらず 読入しらず・古今六

帖第六、なでしこ、三三三、和泉式部日記、冥六、一垣ほに生

ふる）〔新〕〔事〕

64 むしのねにきほへるけしきむかし物がたりめきておぼえ侍し

（若二・79）

①きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思ひはわれぞまさ

れる（古今集巻四、秋上、一六、人のもとにまかりける夜き

りぐすの鳴きけるを聞きてよめる 藤原たゞふさ）

〔新〕

②虫のごと声に立てゝは鳴かねども涙のみこそ下に流るれ

（古今六帖第五、人知れぬ、三三三、古今集巻十、恋三、冥八、

題しらず 清原深養父）〔余〕

65 やまとなでしこをばさしきてまじちりをだになどおやの心をとる(吾4・79)

①塵をだにするじとぞ思ふ咲きしより妹とわがぬるところ夏の花(古今集卷三、夏、一七、隣よりとこ夏の花をこひにおこせたりければ惜しみてこの歌をよみて遣はしける 躬恒・古今六帖第六、なでしこ、三四三、「植ゑしより」・和漢朗詠集卷上、秋、前裁、三六、「植ゑしより」〔釈前〕〔河〕うへしより、〔釈宮〕うゑしよりいもとわがぬる〔奥〕

〔紫〕〔異〕〔一〕〔休〕〔初〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔第二句ノミ〕、〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②われのみやあはれと思はむきりぎりすなくゆふかげのやまとなでしこ(古今集卷四、秋上、二四、寛平の御時きさいのみやの歌合の歌 素性法師・素性法師集、一三三・古今六帖第六、なでしこ、三四三、素性、「哀とは思ふ」・寛平御時后宮歌合、三四六、素性)〔河〕〔孟〕

66 うちらはらふ袖も露けきとこなつにあらし吹そふ秋もきにけり(吾6・80)

ひこ星のまれに逢ふ夜の床夏はうちらはらへども露けかりけり(後撰集卷五、秋上、二三、かれにける男の七日の夜まできたりければ女のみみて侍りける 読人しらす)〔紫〕

〔河〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔事〕〔集〕
67 わづらはしげにおもひまつはすけしきみえましかば(吾11・80)

敷島の 日本やまとの国に 人多おほに 満みちてあれども 藤浪の

思おもひ纏まとはり 若草の 思おもひつきにし 君が目に 恋こひや明かさむ 長きこの夜を(万葉集卷三、相聞、三四四)〔拾〕
藤浪乃 思纏 若草乃 思就西(二部ノミ)

68 あはれたえざりしもやくなきかたおもひなりけり(吾1・80)

①伊勢のあまの朝な夕なにかづくことふあはびの貝の片思ひにして(万葉集卷上、三三六・古今六帖第四、片恋、三三六)「かづくてふ」片思ひにて、「新勅撰集卷十、恋四、題しらす 読人しらす、「潜ひそめてふ」片思ひして)〔釈前〕〔孟〕かづくてふ…かたおもひして、〔釈宮〕かづくてふ…かた思ひにて、〔紫〕かた思ひにて、〔異〕〔河〕かづくてふ、〔帳〕

②われは思ふ人はのけひくこれやこの涙がいそのあはびなるらん(未詳)〔釈宮〕

69 人やりならぬむねこがるゆふべもあらむとおほえ侍(吾3・80)

①人遣りの道ならなくに大方はいきつしといひていざ帰らなむ(古今集卷六、離別、三六、山ざきより神なびの森まで送り人々まかりて帰りがてにして別れ惜みけるによめる 源さね)〔紫〕、〔異〕いざかへりこん、〔河〕いざかへりてん、〔孟〕、〔新〕〔第二句ノミ〕、〔余〕

②身の憂きをしればはしたに成りぬべみ思へば胸の焦れのみする(後撰集卷六、雜四、三七六、題しらす 伊勢・伊勢集、一三三四)「身のうさを…くだけのみする」〔河〕身のうさを

③涙にも思ひのきゆる物ならばいとかく胸は焦がざらまし
〔後撰集卷十、恋三、六五、題しらず 貫之〕〔河〕涙にし…
こがれざらまし

70 世中やたゞかくこそとりぐにくらべくるしかるべき〔異8
・81〕

世の中はくらべくるしく成りにけりながくみじかく思ふす
ちなし〔未詳〕〔休〕〔引〕

71 さくがにのふるまひしるきゆふぐれにひるますぐせといふが
あやなさ〔六一・84〕

わがせこがくべき宵なり笹がにのくものふるまひかねてし
るしも〔古今集墨滅歌、二二〇、衣通姫のひとりめて帝をこ
ひ奉りて・古今六帖第三、我がせこ、三六五、衣通姫・日本
書紀卷三、二三、衣通郎姫、「くものおこなひ今宵するし
も」〔業〕、〔異〕わきもこが、〔二〕〔休〕〔紹〕〔眠〕〔湖〕
〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

72 五月のせちにいそぎまいるあしたなにあやめもおもひしつ
められぬに〔三五・85〕

郭公なくや五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな
〔古今集卷十、恋一、四九、題しらず 読人しらず〕〔花〕
〔眠〕〔湖〕〔下旬ノミ〕

73 きくの露をかこちよせなどやうのつきなきいとなみに〔三六
・86〕

菊の花露と起き居ていざ折らむ濡れなば袖の香こそ匂はめ
〔古今六帖第一、九日、三〇七〕〔河〕〔孟〕

74 はてはあやしき事どもになりてあかし給つ〔三二・
86〕

世の中をかくいひくのはてははいかにやいかにならむ
とすらむ〔拾遺集卷六、雑上、三〇七、題しらず よみ人しら
ず・同卷三、哀傷、三四〕〔余〕

75 あなかまとてけうそくによりおはす〔三二・87〕

①音無し山の山の下行くさざれ水あなかま我も思ふころかな
〔伊勢集、一、五七、古今六帖第三、水、三三三〕、「さざら水…
思ふ心あり」・金葉集卷六、恋下、三六、「かしがまし」思ふ
心あり〕〔異〕かしがまし…思ふ心あり

②鳴り高しや 鳴り高し 大宮近くて 鳴り高し あはれの
鳴り高し 音なせそや 密かなれ 大宮近くて 鳴り高
し あはれの 鳴り高し あな喧 子供や 密かなれ 大
宮近くて 鳴り高し あはれの 鳴り高し〔風俗歌、鳴り
高し、三〕〔河〕〔孟〕

76 中河のわたりなる家なんこのごろ水せきいれてすゞしきかけ
に侍〔三二・88〕

中川に洗ふ根芹のねを掘りてあらはれてこそあるべかりけ
れ〔実方朝臣集、三三三、承香殿の宰相の君の里にいた
るに人あるけしきなればかへりて白河に芹あらふ女して〕
〔最〕

77 あるじもさかなもとむとこゆるぎのいそぎありくほど〔三二
・89〕

玉垂れの 小瓶を中に据ゑて 主はも や 魚求ぎに 魚

取りに こゆるぎの 磯の若藻 刈り上げに (風俗歌、玉垂れ、三) (釈前) たまたれのこがめを中にすへてあるじ

はもやさかなもとめにこゆるぎのいそのわかめかりゆけ、(釈宮) (釈書) 玉だれのこがめを中にすゑてあるじ

はさかなまいにさかなもとめにこゆるぎの磯にわかめかりあげに、(紫) (異) (河) (一) (細) (紹) (孟) (湖) (引) (新)

〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

78 人のけはひするきぬのをとなひはらくとしてわかきこゑどもにくからず (六五五・89)

音せぬは苦しきものを身にちかくなるてふ厭ふ人もありけり (詞花集卷六、雑上、三三) 忍びたる男の鳴りける衣をか

しがましとおしのけゝればよめる 和泉式部) (拾)

79 とばり帳もいかにそはさるかたの心もなくてはめさましきあるじならむとの給へばなによけむともえうけ給はらずと (六

4・90)

我家は 帷帳も 垂れたるを 大君来ませ 簪にせむ 御着に何よけむ 鮑栄螺か 石陰子よけむ

子よけむ (催馬楽、我家、六) (釈前) 利伊戸波 一と波 利帳毛 一多礼太留牟捨々保支美支万世衣、无己余世无

一美ツ左加奈余奈余与介无 一安波安々比左多乎加 一 加世与介无 一安波々比左太平可 一加世与介无 一、

〔釈宮〕、〔奥〕和加伊戸波止波利帳於毛多礼留乎於々保支美支万世衣、无己余世无美以左可奈余奈与介无安波安々

比左多乎加可世与介无安々波安々比左太平可加世与介无、

〔紫〕〔異〕〔河〕〔花〕〔一〕〔細〕〔紹〕〔屋〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕 (引) (新) (全) (対) (事) (評) (集)

80 いかゞはわたくしのしうとこそは思ひて侍めるを (七4・92)

春の野に緑にはへるさねかつら我が君さねと頼むいかにぞ (大和物語、五) (拾)

81 君はとけてもねられ給はずいたづらぶしとおぼさるゝに (七9・93)

いかなりし時くれ竹のひと夜だにいたづらぶしを苦しといふらむ (拾遺集卷五、恋三、八) 題しらず、読人しらず

〔異〕〔河〕〔一〕、〔孟〕いかならむ、〔峴〕〔湖〕〔引〕〔新〕

〔余〕〔事〕〔大〕

82 ねたう心とどめてもとひきけかしとあぢまなくおぼす (六六4・93)

年ふれど忘れ果てぬ人の世は心とめてぞ猶聞かれける (伊勢集、一) (要三) (紫) (異) 人のうへは、〔河〕〔孟〕人のうへは心とめて猶きかれけり

83 たがうべくもあらぬ心のしるべを思はずにもおほめい給かな (六九7・95)

① 知るしらぬ何かあやなく分けていはむ思ひのみこそ知るべなりけれ (古今集卷五、恋一、四七、かへし 読人しらず・

伊勢物語、二) (古今六帖第五、いひはじむ、三三六、一分きていはむ) (新) (余)

② いづかたに立ち寄れとてか春霞思はずにのみ空に見ゆらん

〔忠見集、三〇五〕年かへての頃恨みたる人に〔余〕

84 なよ竹の心ちしてさすがにおるべくもあらず〔三二・一・97〕

①なよ竹のよながきうへに初霜のおきりて物を思ふ頃かな
〔古今集卷十六、雑下、三〇三、寛平の御時にもろこしのほう
官にめされて侍りける時に東宮のさぶらひにてをのことも
酒たうべける序でによみ侍りける 藤原のたゞふさ〕

〔紫〕〔異〕〔河〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引歌不及歌〕

②やましろの風の寒さにをとめをぞかけてぬぬ夜のながきな
よ竹〔未詳〕〔河〕〔孟〕

85 ありしなごらの身にてかゝる御こゝろばへをまみしかば〔三二・97〕

とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と
思はむ〔未詳〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕
〔引〕〔拾〕〔新〕〔余〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

86 のちせをもおもひ給へなぐさまましを〔三二・8・97〕

①若狭なるのち瀬の山の後も逢はむわが思ふ人にけふならず
とも〔古今六帖第三、四、三三三〕〔釈前〕〔釈宮〕〔紫〕〔異〕

〔河〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔余〕後にまたあはんかなら
ず、〔釈書〕のちに又かならずあはん、〔事〕〔大〕〔集〕

②後瀬山後も逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日までも生
けれ〔万葉集卷四、三六、家持・古今六帖第三、山、三七五、
「後も逢ひ見むと思へばぞ、けふまでもふる」・新拾遺集卷
四、恋四、三三二〕〔新〕〔余〕

③かにかくに人は言ふとも若狭道の後瀬の山の後も逢はむ君

〔万葉集卷四、言、大嬢〕〔玉〕

87 いかうかりなるうきねのほど思ひ侍に〔三二・8・97〕

片岸の松のうきねと忍びしはさればよ遂に頭はれにけり
〔拾遺集卷十一、恋三、三三、題しらず 読人しらず〕〔休〕
〔玉〕

88 いまはみきとなかけそとておもへるさま〔三二・9・97〕

それをだに思ふこととて我が宿をみきとないひそ人のきか
くに〔古今集卷五、恋五、八二、題しらず 読人しらず・大
和物語、四七・古今六帖第五、くちがたむ、三〇六、これを
だに〕〔釈前〕それをゝにみよとなかけそ、〔釈宮〕み
きとないひそ、〔奥〕見きとなかけそ、〔紫〕見きとなか
けそ人のきかくに〔イあひきともいはず〕、〔異〕みきとなか
けそ人のきくがに、〔河〕〔入弄〕〔二〕〔細〕〔休〕〔紹〕
〔孟〕、〔岷〕〔第二句ノミ〕、〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕
〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

89 ひきたてゝわかれ給はど心はそくへだつるせきとみえたり
〔三二・11・99〕

①相坂の名をば頼みてこしかども隔つる関のつらくもあるか
な〔新勅撰集卷三、恋三、三三、題しらず 読人しらず〕

〔釈前〕〔釈書〕名をばたつねて、〔釈宮〕なをたのみつゝ、
〔奥〕〔紫〕〔異〕、〔河〕〔細〕名を頼みつゝ、〔二〕名を頼
みで、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔大〕〔集〕
②ひこ星に恋はまさりぬ天の川へだつる関を今はやめてよ
〔伊勢物語、一、三〕〔河〕〔細〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔新〕〔余〕〔対〕

〔事〕〔大〕〔集〕

90 よすがだになきをとかへりみがちにて(三三〇・99)

ほにいでうたゝにあらじ花すゝき風もよすがをいとほざ

らなん(未詳)(異)

91 なまめきたるさましてあて人とみえたり(三三〇・100)

大方の秋をかなしみみることもあてなる人はしらすぞあり

ける(未詳)(異)(河)(孟)

92 みし夢をあふ夜ありやとなげくまにめさへあはでどころもへ

にける(三三〇・101)

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりま

さるかな(古今集卷三、恋三、六四、人に逢ひてあしたによ

みて遣はしける 業平朝臣・業平集、二六四、古今六帖第

四、片恋、三三六、業平)(一)(二)(第四句ノミ)(休)(新)

93 みし夢をあふ夜ありやとなげくまにめさへあはでどころもへ

にける ぬる夜なければなどめをもよばぬ御かきさまも(三三

一〇・101)

①恋しきをなにつけてか慰さむむ夢にだに見ずぬる夜なけ

れば(拾遺集卷三、恋三、七三、天曆の御時歌合に 順・天

徳四年内裏歌合、三三四、能宣)(釈前)こひしきは…な

ぐさまんぬるよなければ夢にだにみず、(釈宮)なぐさ

めんゆめにだにみえずめるよなけなば、(奥)(紫)(異)

なぐさまん夢にもみえず、(一)(二)(屋)恋しきの…なぐさま

ん夢にもみえず、(細)恋しさを、(休)(孟)恋しさを…

なぐさまむぬる夜なければ夢にだにみず、(紹)(眠)。

〔湖〕恋しさを…夢にもみえず、〔引〕〔新〕〔余〕恋しさを

…なぐさまん夢にも見えず、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

②しきたへの枕をまきて妹と我ぬる夜は無くて年ぞ経にける

(万葉集卷十一、三六五、古今六帖第三、としへていふ、三三〇〇、

貫之、妹とあれと)(余)

③夢の中にあひみん事をたのみつゝ暮せる宵はねむ方もなし

(古今集卷十一、恋一、三三、題しらす 読人しらす、古今六

帖第四、片恋、三三六)(余)

94 はゝき木の心をしらでその原のみちにあやなくまどひぬるか

な きこえんかたこそなけれとの給へり女もさすがにまどろ

まざりければ かずならぬせ屋におふる名のうさにあるに

もあらずきゆるはゝ木々(只四・105)

①園原や伏屋に生ふる帯木のありとは見えて逢はね君かな

(古今六帖第三、くれど逢はず、三六五、ありとて行けど)

・是則集、二七〇、(紫)(異)(孟)ありとは見れど、(河)

(一)(引)(余)(全)(対)(事)(大)(集)

②ゆかばこそ逢はずもあらぬ帯木のありとばかりは音づれよ

かし(後拾遺集卷三、雜一、八七、はゝきの園に侍りけるは

らからの音し侍らざりければたよりにつけて遣しける 馬

内侍・馬内侍集、三六六、はらからなる人のはゝきととい

う所にて音もせねば便につけて、(音)づれよ君(河)(孟)

1 かくてはえやむまじう御ころにかゝり (五11・109)

たれならむはかなながらぞ頼まるゝかくてもつひにやまじ
と思へば (忠見集、三〇三〇、恋) (余)

2 ゆふやみのみちたどくしげなる (六三・110)

夕やみは道たどくし月まちて帰れわがせこそそのまにも見

む (古今六帖第二、夕やみ、三三〇、大宅娘女・万葉集卷四、
古元、豊前国の娘子大宅女、「路たつたつし：行かせわが背
子」) (釈前)、〔釈宮〕ゆふやみは…そのまにもみん、〔奥〕

〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕
〔全〕〔对〕〔事〕〔大〕〔集〕

3 いよのゆげたもたどくしかるまじうみゆ (六1・112)

①伊予の湯の 湯桁は幾つ いさ知らず や 算へず数ます

やれ そよや なよや 君ぞ知るらうや (体源鈔、風俗
歌、奥) 〔奥〕伊予のゆのゆげたはいくついさしらずかぞ

へすよますきみぞしる覧、〔紫〕〔異〕〔河〕〔花〕〔入〕〔弄〕
〔一〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔事〕〔釈〕〔集〕
〔一〕〔休〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔对〕〔大〕〔集〕

4 かぜふきとをせとてたゝみひろげてふす (六12・114)

風吹くと人には云て戸はさゝじ逢はむと君に云てし物を
(古今六帖第三、戸、三三三) 〔紫〕〔異〕〔休〕〔絶〕〔湖〕 明け

んと君に、〔河〕、〔一〕〔湖〕〔引〕〔余〕 風吹けど、〔孟〕戸
をさゝじ、〔集〕

5 こころにはなるゝおりなきころにて心とけたるいだにねら
れずなむ (六4・114)

君恋ふる涙のこほる冬の夜は心とけたるいやはねらるゝ
(拾遺集卷五、恋三、三三、題しらず 読人しらず) 〔紫〕

〔河〕〔休〕、〔絶〕 なみだのかゝる、〔孟〕〔湖〕〔湖〕〔引〕
〔新〕 いだにねられず、〔余〕 涙のかゝる…いだにねられ
ず、〔对〕〔事〕〔大〕〔集〕

6 ひるはながめ夜はねざめがちなれば春ならぬこのめもいと
げかしきに (六5・115)

①桜花匂ふ物からつゆけきは木のめも物をおもふなるべし
(拾遺集卷五、哀傷、三三三、むすめにまかり後れて又の年
の春枝の花ざかりに家の花を見ていさゝかに思をのおとい
ふ題をよみ侍りける 大中臣能宣) 〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕
〔屋〕〔湖〕

②このめはる春の山田を打返し思ひやみにし人ぞこひしき
(後撰集卷六、恋一、五五、女に年をへて心ざしある由をのた
まひわたりける女猶今年をだに待ちくらせとたのめけるを
その年もくれてあくる春までいとつれなく侍りければ 読
人しらず・古今六帖第三、春の田、三三三) 〔紫〕〔河〕

③夜はさめ屋はながめにくらされて春はこのめぞいとなかり
ける 一条撰政御集、二三、きさらぎばかりにいかにぞと
のたまうたるに、をんな) 〔河〕〔一〕、〔絶〕〔湖〕 春はこの

めも、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔湖〕、〔引〕春のこのめぞ、〔新〕〔余〕
〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

④哀れともうしとも物を思ふ時などか涙のいとなかるらむ
〔古今集卷七、恋三、〇五、題しらず 読人しらず〕〔河〕

〔孟〕〔新〕

⑤ひぐらしの声もいとなく聞こゆるはあき夕暮になればなり

けり〔後撰集卷七、秋下、四三、題しらず 貫之・古今六帖
第六、ひぐらし、三六六〕〔河〕〔孟〕

7 かのぬぎすべしたるとみゆるうす衣をとりて〔五七・117〕

逢ふまでの形見とてこそ留めけむ涙に浮かぶ藻屑なりけり

〔古今集卷四、恋四、七四、親の守りける人のむすめにいと
忍びにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひけれ

ば急ぎかへるとて裳をなむぬぎ置きて入りける、其後裳

を返すとしてよめる 興風・興風集、二六六・古今六帖第五、

かたみ、三六六、よしありの大臣〕〔異〕もくつなりけん、

〔河〕〔孟〕〔岷〕

8 うつせみのみをかへてける木のもとになを人がらのなつかし

きかな〔四四・119〕

①打ちはへて音をなき暮らすうつ蟬の空しき恋も我はする

哉〔後撰集卷四、夏、一三、題しらず 読人しらず〕〔紫〕

〔河〕〔孟〕〔岷〕

②今はとて梢にかかる空蟬のからを見むとは思はざりしを

〔後撰集卷三、恋四、八四、つらくなりにける男のもとに今
はとて装束など返し遣はすとて 平なかきが女〕〔余〕

9 伊勢をのあまのしほなれてやなど思もたゞならず〔五11・

120〕

鈴鹿山伊勢をの海士のすて衣しほなれたりと人やみるらむ

〔後撰集卷七、恋三、七九、女の許にきぬをぬぎ置きてとり

に遣はすとて 伊尹朝臣〕〔釈前〕〔釈宮〕〔釈書〕〔異〕

⑦は

つかしや…ぬれ衣しほなれたりと、〔興〕〔新〕〔余〕すゞ

か川、〔紫〕〔異〕④〔河〕⑦、〔河〕④〔岷〕⑦はつかしや…

ぬれ衣、〔一〕ぬれ衣しほなれけりと、〔細〕〔上句ノミ〕は

つかしや、〔休〕〔紹〕、〔孟〕ぬれ衣、〔屋〕、〔岷〕④

10 またしる人もなきことなれば人しれずうちながめてゐたり

〔五13・120〕

枕よりまた知る人もなき恋を涙せきあへずもらしつるかな

〔古今集卷三、恋三、三〇、題しらず 平貞文・古今六帖第

三、まくら、三四七〕〔紫〕〔異〕、〔河〕なき物を、〔休〕〔紹〕

〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔事〕

11 こぎみのわたりありくにつけてもむねのみふたがれど御せう

そこもなし〔五14・120〕

山がつの垣ほにはへる青つゞら人はくれども言伝もなし

〔古今集卷四、恋四、七四、題しらず 龍〕〔紫〕〔異〕

12 いとあさはかにもあらぬ御けしきを〔五2・120〕

①紅の薄染衣浅らかに相見し人に恋ふる頃かも〔万葉集卷

三、三六六〕〔河〕〔孟〕あさはかにやみにし物をこふるこ

かな

②桃花ぞめの浅らの衣浅らかに思ひて妹に逢はむものかも

(万葉集卷六、三三〇) (河) (孟) あさはかに (第三句)

13 ありしながらのわが身ならはとり返すものならねどしのびが
たければ (五五二・120)

とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と

思はむ (未詳) (釈前)、(釈宮) 世の中をイ本 わびつゝも、(釈書) (奥)

(紫) (異) (河) (二)、(細) (第二句ノミ)、(休) (紹) (孟)

(岷) (引) (余) (全) (対) (事) (集)

14 うつせみのはにをく露の木がくれてしのびくぬるゝそで
かな (五五・120)

うつせみの羽におくつゆの木がくれてしのびしのびにぬる

ゝ袖かな (西本願寺本伊勢集、四三) (河) (細) (休) (紹) (孟)

(岷) (引) (余) (全) (対) (事) (集)

夕 顔

1 むつかしげなるおほぢのさまをみはたし給へるに (二〇四・123)

春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば京の大路念ほゆ (万葉集卷六、四四) (河) (休) (紹) (孟)

2 かみははじとみ四五けむばかりあげわたして (二〇五・123)

誰とてかあれたる宿といひながら月よりほかの人をいるべき (後拾遺集卷六、雑一、八) 空、月あかく侍りける夜はじとみに女共の立ちて侍りけるを男まぬらむなどいひいれよとて侍りければよめる 読人しらす (岷) (湖)

3 いづこかさしてとおもはしなせばたまのうてなもおなじこと也 (二〇一・123)

世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿と定むる (古今集卷六、雑下、九七) 題しらす 読人しらす

(釈前) (奥) (河) (細) らうくかさして、(釈宮) いづこかさして、(紫) (紹) (屋) らうこかさして、(異) いづこ

をさしてわくならん、(二) いづこかさしてわれならん、(休) (孟) (岷) (湖) (引) (新) (余) (全) (対) (事) (大) (集)

4 たまのうてなもおなじこと也 (二〇一・123)

① 何せむに玉の台も八重葎はべらむ中に二人こそねめ (古今六帖第六、むぐら、三四三) (河) (岷) (湖) はべらん宿に、(細) (紹) (引)、(新) おほへる宿に、(余)

②世の中はとてもかくても同じこと宮もわらやも果てしなげ
れば〔新古今集卷六、雑下、一五〕、題しらず 蟬丸

〔余〕

5 しろき花ぞおのれひとりゑみのまゆひらけたる (二〇一三・
124)

数々に君がたよりに引くなれば柳の眉もいませひらくる

〔蜻蛉日記、一六七〕〔河〕柳のまゆは、〔孟〕、〔岷〕君がた

ちより…柳の眉はいまもぞひらく

6 をちかた人に物申とひとりごち給をみずいじんついでか
しろくさけるをなむゆふがほと申侍 (二〇一三・124)

うち渡すをちかた人にも申すわれそのそこにしろくさけ

るはなにの花ぞも (古今集卷六、雑体、旋頭歌、二〇七、題

しらず 読人しらず・古今六帖第四、せんとう歌、三三三六・

躬恒集、一四六、頭へ旋らす歌、「あこそかの」〔釈前〕

わがそのそこに…なにぞのはなぞも、〔釈宮〕〔奥〕〔紫〕

〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔相〕〔孟〕〔墨〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕、〔余〕

かちわたす、〔全〕〔対〕〔事〕〔一〕〔集〕

7 このもかのもあやくうちよろほいてむねくしからぬのき
のつまなどに (二〇一三・124)

①筑波根のこのもかのもに陰はあれど君がみかげにます陰は

なし (古今集卷三、東歌、一〇五、常陸歌) 〔釈宮〕、〔紫〕

ます、かげぞなき、〔異〕〔河〕ハ一〇五〔孟〕〔岷〕〔事〕

②山風の吹きのまにまに紅葉ははこのもかのもに散りぬべら

なり (後撰集卷七、秋下、四六、題しらず 読人しらず)

8 のきのつまなどにはひまつはれたるを (二〇一三・124)

よそに見て帰らむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

〔古今集卷三、春下、二六、志賀より帰りけるをうなども

花山に入りて藤の花の下に立ちよりて帰りけるに詠みて送

りける 僧正遍昭・古今六帖第六、ふち、三三三六、遍昭〕と

かむまをだに〕 (第五句)・遍昭集、一六七、志賀よりかへ

り侍りし人花山に入りてふちのはな見はべりしかば)

〔河〕あかずみて (本木ヨシユ)、〔岷〕あかずして、〔事〕

9 ものゝあやめみ給へわくべき人も侍らぬわたり (二〇一三・124)

①奥山のゆづる葉いかで折りつらむ文目も知らず雪のふれる

に (兼盛集、一七三、十一月大雪のふれるに家にをのこか

しらに雪かかりてゆづる葉もちてきたり) 〔河〕〔岷〕

〔岷〕

②郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

(古今集卷三、恋、四六、題しらず 読人しらず) 〔孟〕

〔岷〕

10 たゞかく御まへにさぶらひ御らむせらるゝことのかはり侍

なん事をくちおしくおもひたまへたゆたいしかど (二〇一三・

125)

いで我を人などがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふ頃ぞ

(古今集卷三、恋、五八、題しらず 読人しらず・古今六

帖第三、舟、三三三六、「物思ふ頃ぞ」〔紫〕、〔異〕物思ふこ

ろ

11 さらぬわかればなくもがなとなんこまやかにかたらひ給て

(1011・126)

① 老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まくほしき君かな (伊勢物語、一六・古今集卷七、雑上、九〇、業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りける時に業平宮づかへすとて時々も得まかりとぶらはず侍りければしはすばかりに母のみこのもとよりとみの事とて文をもてまうできたりあけて見れば言葉はなくてありける歌) [釈前] (奥) さらぬわかれの、(異) (河) (五) (岷) (集)

② 世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとと歎く人の子のため (古今集卷七、雑上、九〇、かへし 業平朝臣・伊勢物語、一六、「千代もと祈る」・業平集、一六、四、「千代もと祈る」) [釈] ちよもといのる、(奥)、(紫)、(異)、(休)、(絶) [屋] (岷) (湖) (引) (余) 千代もといのる、(河)、(一) [第二句]、(「さらぬわかれは」)、(五)、(新) 千代もといはふ、(全) (对) (事) (大) (集)

12 心あてにそれかとぞみるしら露のひかりそへたるゆふがほの花 (1018・127)

心あてに折らばやをらむ初霜のおきまどはせる白菊の花 (古今集卷七、秋下、三三、白菊の花をよめる 凡河内躬恒・古今六帖第六、きく、三三、六 躬恒・和漢朗詠集卷上、秋、菊、三三、躬恒) (紫) (異) (河) (五) (岷) (事) (集)

武蔵鑑さすがにかけて頼むには訪はぬもつらし訪ふもつるさし (伊勢物語、三三) (河) (五) 思ふには (第三句)

14 御たゝうがみにいたうあらぬさまにかきかへ給て (1016・128)

① をしと思ふ心はなくて此の度は行く馬に鞭をおほせつるかな (後撰集卷六、離別、三三、伊勢へまかりける人ときいなど心もとながると聞きて旅の調度などとする物からたゝん紙にかきてとらする名をばうまといひけるに) [五] (岷)

② 君が手をかれ行く秋の末にしも野飼に放つ馬ぞかなしき (後撰集卷六、離別、三三、かへし) (五) (岷)

15 ひのひかりほたるよりけにほのかにあはれなり (1013・128)

夕されは螢よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき (古今集卷五、恋三、五三、寛平御時后宮の歌合の歌 紀友則・古今六帖第六、螢、三三、六 友則・友則集、一六、四) (河) (休) (絶) (五) (岷) (湖) (引) (新) (余) (对) (事) (大) (集)

16 あさけのすがたはげに人のためできこえんも (1013・128)

① わがせこが朝明の形よく見すて今日の間を恋ひ暮すかも (万葉集卷三、四四) (河) (五) (湖) (新) (余) (集)

17 とぎくながゞきのかひまみし侍に (1011・129)

② 朝鴉早くな鳴きそわがせこが朝明のすがた見れば悲しも (万葉集卷三、三三、五・古今六帖第六、からす、三三、三) 「いたくななきそ」 (河)、(五) (引) いたくななきそ：見れば悲しき、(拾) (余)

冬ながら春のとりの近ければ中垣よりぞ花はちりける

(古今集卷六、雑体、誹諧、二三、明日春立たむとしける
日隣の家の方より風の雪を吹きこしけるをみて其隣へ詠み
て遣しける 清原深養父・古今六帖第三、まがき、三〇〇元、
深養父、「花は咲きける」〔河〕〔孟〕〔引〕

18 いとねたくまけてやみなんを心にかゝらぬおりなし (二〇〇H・
130)

つれもなき人に負けじとせしほどに我もあだ名は立ちぞし
にける (後撰集卷十一、恋三、七言、女のもとに遣はしける

藤原清正) (余)

19 秋にもなりぬ人やりならずこゝろづくしにおぼしみだるゝ事
どもありて (二〇七g・132)

①木の間よりもりくる月のかけ見れば心づくしの秋は来にけ
り (古今集卷四、秋上、一六、題しらず 読人しらず・古今

六帖第一、秋の月、三二七・小町集、二六五) (河)〔孟〕〔帳〕

〔湖〕〔新〕〔余〕〔对〕〔毒〕〔大〕〔集〕

②人遣りの道ならなくに大方はいきうしといひていざ帰りな

む (古今集卷六、離別、三六、山ざきより神なびの森まで送
りに人々まかりて帰りがてにして別れ惜みけるによめる

源さね) (異)〔河〕〔孟〕

20 みなみのはじとみあるなかやにわたつきつゝ (二一〇g・134)

橘の寺の長屋にわが率宿し童女放髪は髪あげつらむか (万
葉集卷六、三三三) (河) かみあげつらん、〔孟〕〔湖〕〔余〕う

なひはなるはわが恋まさる、△新▽

21 うちはしたつ物をみちにてなむかよひ侍 (二一三・134)

背の山に直に向かへる妹の山事許せやも打橋渡す (万葉集
卷七、二五、古今六帖第三、橋、三四七) (河)〔孟〕ことゆ
るすやも

22 はしよりおちぬべければいでこのかつらぎのかみこそさかし
うをきたれと (二二一・134)

岩橋のよるの契りも絶えぬべし明くる佗しきかつらぎの神

(拾遺集卷六、雑賀、三〇三、大納言朝光下らふに侍りける
時女のもとにしのびてまかりて曉にかへらじといひければ

春宮女藏人左近・小大君集、一六五、人の許にきける人
の三年ばかり更に見えざりけるを見むとてあすは明けはて

ゝくるまはるてこといひたりければあやしう久しき事と思
へど人をやりてそひてこといはせたりけるをつとらへて

内にもえ入らでみしていとねたかりければ男藤大納言と

か) (紫)〔河〕〔孟〕〔帳〕

23 御つかひに人をそへあか月の道をうかゞはせ御ありかみせむ
と (二二九・136)

みじか夜の残りすくなくふけゆけはかねて物うきあかつき
の道 (清正集、二六六、人のもとにいきて夏頃忍びたりけ

りと聞く人静まる程にいたう更けてやうく夜中はかりに
いであひたり) (余)

24 かゝるすちはまめ人のみだるゝおりもあるをいとめやすくし
つめ給て (二二二・136)

まめなれどあだ名は立ちぬ戯れ島よる白浪を濡れ衣にきて

(後撰集卷五、雑一、二三、女のあだなりといひければ

くも 善けくも見むと 大船の 思ひ憑むに 思はぬに
 横風の にふぶかに 覆ひ来れば 為む術の 方便を知ら
 に 白たへの 手襖を掛け ませ鏡 手に取り持ちて 天
 つ神 仰ぎ乞ひ祈み 地つ神 伏して額つき かからずも
 かかりも 神のまにまにと 立ちあがり われ乞ひ祈め
 ど 須臾も 快けくは無しに 漸漸に 容貌つくほり 朝
 な朝な 言ふこと止み たまきはる 命絶えぬれ 立ち踊
 り 足摩り叫び 伏し仰ぎ 胸うち嘆き 手に持てる 吾
 が児飛ばしつ 世間の道 (万葉集卷三、四) (河) 地祇布
 之百額持可加良受毛 (一部ノミ)

32 うばそくがおこなふみちをしるべにてこむ世もふかき契たが
 ふな (二八九・一四)

① うばそくがあざ名に刻む松の葉は山の雪にや埋もれぬらむ
 (曾丹集、三三三) (異)

② 優婆塞がおこなふ山の椎がもとあなそばくしとこにしあ
 らねば (うつほ物語、菊の宴) (河) とこにしもあらね
 ば、(絶)(孟)(岷)(湖)(引)(余)

33 いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを (二一六・一四二)

④ 山の端にいさよふ月を出でむかと待ちつゝをるに夜ぞふけ
 にける (古今六帖第一、雑の月、三三三・万葉集卷七、一〇七・
 同卷七、一〇八)、「いつとかも我が待ち居らむ夜はふけにつ
 つ」(釈前)まぢてゝおるに、(釈宮、(紫)よはふけに
 けり、(異)(河)(孟)(岷)待ちつゝぬるに、(湖)(余)
 (事)

② もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行く方知らず
 も (万葉集卷三、三六、柿本朝臣人麿・柿本集、一五九、近
 江よりのぼりて宇治川のほとりにて、「よるべ知らずも」
 ・古今六帖第三、網代、三三三、人麿、「網代木に：よるべ
 しらずも」新古今集卷七、雑中、一六六、題しらず 人麿
 (河)(孟)(岷)(湖)(余)

③ 君やこむ我や行かむの十六夜に横の板戸もささずねにけり
 (古今集卷十四、恋四、六六、又は宇治のたまひめ 読人しら
 ず・古今六帖第三、戸、三三三、「横の板戸を」(河)(孟)
 (岷)

④ 隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ
 (万葉集卷三、四六、柿本朝臣人麿) (河)(孟)かくらくの
 …山ぎはに…いもにやあるらん、(岷)かくらくの…い
 もにやあるらん

34 あれたるかどのしのぶぐさしげりてみあげられたる (二二九・
 一四二)

八重葎しげれる宿の寂しきに人こそみえね秋はきにけり
 (拾遺集卷三、四、河原院にて荒れたる宿に秋来るといふ
 こゝろを人々よみ待りけるに 惠慶法師) (岷)(余)
 35 おきながはとちぎり給ことよりほかのことなし (二〇五・
 一四三)

には鳥のおきなが河はたえぬとも君に語らふことつきめや
 は (古今六帖第三、鳩、三三三・万葉集卷三、四四六、馬史国
 人、「君に語らむ言尽きめやも」(奥)(紫)(異)(河)(二)

〔細〕〔休〕、〔絶〕〔新〕 君に語らんことつきめやも、〔孟〕、
 〔屋〕 君とかたらふ、〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔余〕〔第二句ノミ〕、
 〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕
 36 けちかきくさきなどはことにもどころなくみな秋のゝらにて
 (二〇〇・144)

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる
 (古今集卷四、秋上、二四)、仁和の帝みこにおはしましけ
 るときふるの滝御覽せむとておはしましける道に遍昭が母
 の家に宿り給へりける時に庭を秋の野につくりておほむ物
 語のついでによみて奉りける 僧正遍昭・古今六帖第二
 宿、三三三、僧正遍昭・遍昭集、一六六、仁和の帝のまだみ
 こにおはしまし、時布留の滝御覽せむとておはしましける
 道に遍昭の母の家侍りけるに庭を秋野につくりていとをか
 しい御物がたりのついでによみたてまつりし、〔紫〕〔異〕
 〔河〕〔二〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔対〕〔事〕
 〔大〕〔集〕
 37 光ありとみしゆがほのうは露はたそがれ時のそらめなりけり
 (三二・144)

空めをぞ君は御手洗川の水浅しやふかしそれはわれかは
 (拾遺集卷六、雑下、三三、賀茂にまつて侍りける男の見侍
 りて今はな隠れそいとよく見てきといひおこせ侍りければ
 伊勢・伊勢集、一六六、〔河〕〔孟〕〔岷〕〔余〕
 38 あまの子なればとてさすがにうちとけぬさま (三三・144)
 ①白浪のよするなぎさによをすくす海人の子なればやどもま

だめず (和漢朗詠集卷下、遊女、三三) 〔紫〕〔異〕〔河〕、
 〔花〕〔細〕 (第五句ノミ)、〔一〕〔上句ノミ〕、〔休〕〔絶〕〔孟〕〔岷〕
 〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕
 ②よひくゝに宿も定めぬ海人の子も猶人なみのよるべまつま
 つ (未詳) 〔屋〕
 39 よしこれも我からなめりとうらみかつはかたらひくらし給
 (三六・145)

海人のかる澤にすむ虫のわれからと音をこそ泣かめ世をは
 うらみじ (古今集卷五、恋三、題しらず 典侍藤原直
 子朝臣・伊勢物語、二三・古今六帖第三、われから、三三三、
 内侍のすけきよこと) 〔釈前〕、〔釈宮〕人はうらみじ、〔釈
 書〕人はうらみじ、〔紫〕〔異〕〔河〕〔花〕〔一〕〔休〕〔絶〕
 〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕
 40 やまびこのこたふるこゑいとまじ (三三・147)

①打ちわびてよばらむ声に山彦の答へぬ山はあらじとぞ思ふ
 (古今集卷十二、恋一、三三、題しらず 読人しらず)
 〔河〕〔休〕〔余〕よばらむ声に、〔絶〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕
 ②つれもなき人を恋ふとて山彦の答えするまで歎きつる哉
 (古今六帖第三、山びこ、三六六、古今集卷十二、恋、三三、亭
 子院歌合、三三三) 〔河〕〔孟〕〔新〕

41 あせもしとゞになりてわれかのけしきなり (三三・147)
 ①夢にだに何かも見えぬ見ゆれども我かもまどふ恋の繁きに
 (万葉集卷十二、三九三) 〔紫〕夢にだになにかも見えず、〔河〕
 〔細〕〔湖〕夢だに何とも見えず…ことのしげきに、

〔孟〕、〔岷〕何とも見えず

②あまびこの音信しとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に
〔古今集卷十六、雑下、九三、左近将監とけて侍りける時に女
のとぶらひにおこせたりける返事によみて遣しける 小野
春風〕〔河〕〔河〕〔河〕〔孟〕山びこの〔初包〕、〔湖〕

③秋霧にしとにぬれてよぶこ鳥さほの山べに鳴きわたる也
〔未詳〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕秋霧の

42 大きぐちなりければゆづるいとつきくしくうちならして
〔三三・一四〕

①梓弓末の腹野に鳥狩する君が弓弦の絶えむと念へや〔万葉
集卷十一、三三〕〔河〕〔孟〕〔湖〕末の、原に：たえんと思ふ
な、〔余〕たえんと思ふに

②梓弓爪引く夜音の遠音にも君が御幸を聞かくし好しも〔万
葉集卷四、三三、海〕上王・古今六帖第二、みゆき、三〇六六
海の上女王、「聞くがうれしき」〔拾〕〔新〕〔余〕

③単人の名に負ふ夜声いちしろくわが名は告りつ妻とたのま
せ〔万葉集卷十、三〇七〕〔拾〕〔余〕我が名をいひてつまと

たのまむ

43 ものゝあしおとひしくゝとふみならしつゝ〔三六・一〇・一五〕

さし焼かむ 小屋の醜屋に かき棄てむ 破薦を敷きて
うち折らむ 醜の醜手 を さし交へて 宿なむ君ゆゑ
あかねさす 昼はしみらに ぬばたまの 夜はすがらに
この床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも〔万葉集卷三、
三三〇〕〔拾〕〔新〕〔余〕此とこのひしとなるまでなげきつる

かも〔二部ノミ〕

44 ありかさだめぬものにてこゝかして尋けるほどに〔三三・一〇・
一五〕

風の上にありか定めぬ塵の身は行方も知らず成ぬべらなり
〔古今集卷十六、雑下、九六、題しらず 読人しらず・古今六
帖第一、塵、三三三〕〔河〕〔紹〕、〔孟〕なりにけるかな、〔岷〕

〔湖〕〔余〕

45 夜のおくるほどのひさしきは千世をすぐさむ心し給〔三三・
一〇・一五〕

①くるゝまは千歳を過ぐす心地してまつは誠に久しかりけり
〔後拾遺集卷十一、恋三、交七、平行親の朝臣のむすめのもと
にまかりそめて又のあしたによめる 藤原隆方朝臣〕〔釈
前〕くるゝまの、〔釈宮〕くるゝまは、〔奥〕〔岷〕〔湖〕〔余〕

いはぬまは〔初包〕、〔兼〕ちとせをすぐる、〔異〕、〔河〕〔孟〕
いはぬまはちとせを過ぐる、〔評〕

②秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りて鳥や鳴きな
む〔伊勢物語、六・続古今集卷三、恋三、二六五〕〔大〕〔集〕

46 ありくゝておこがましきなをとるべきかなとおほしめぐらす
〔三三・一五〕

ありありて後も逢はむと言のみを堅くいひつつ逢ふとは無
しに〔万葉集卷十一、三三、問答の歌〕〔余〕いふのみをか
たみにしつゝ

47 かゝるとみの事にはず経などをこそはすなれ〔三三・一一・一五〕
老いぬればさらぬわかれのありといへばいよゝ見まくほ

しき君かな (伊勢物語、二五・古今集卷七、雑上、六〇)、業
平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りける時に業平宮つかへす
とて時々も得まかりとぶらはず侍りければしはずばかりに
母のみこのもとよりとみの事とて文をもてまうできたり、
あけて見れば言葉はなくてありける歌 (河) (初句ノミ)
48 をのれもよゝとなきぬ (三六・二・一五三)

君によりよゝゝゝとよゝゝと音をのみぞ鳴くよゝゝ
くゝゝと (古今六帖第四、雑の思、三〇〇) (河) (孟) (岷)
(湖) (引) (余)

49 これみつがちゝの朝臣のめのとに侍しものゝみつわぐみてす
み侍なり (三六・一一・一五四)

年ふれば我が黒髪も白川のみつはぐむまで老いにけるかな
(後撰集卷七、雑三、つくしの白川といふ所にすみ侍りける
に大式藤原興範朝臣のまかり渡るついでに水たべむとて打
ち寄りてこひ侍りければ水をもて出でゝ詠み侍りける 檜
垣の岷) (業) (河) (孟) なりにけるかな (栞包)、(異) むは玉
の我が黒髪は、(岷) (湖) (引) (新) (余) (大)

50 かちより君にむまはたてまつりてくゝりひきあげなどして
(三六・四・一五)

山科の木幡の山を馬はあれどかちよりわが来汝を思ひかね
(万葉集卷十、二四三・拾遺集卷六、雑恋、二二五・古今六帖
第二、国、三三三) (余) こはたの山に

51 これ光もなくゝいまはかきりにこそは物し給めれ (三三・七・
一五七)

憂きながらさすがに物の悲しきは今は限りと思ふなりけり
(元輔集、一五三三、時々まかる女にこと人まかると聞きて・
清慎公集、三三三、もとすけ人知れぬことありて女を恨み
て・詞花集卷八、恋下、三五、かよひける女のこと人に物い
ふときゝていひ遣はしける 清原元輔) (余)

52 けさはたにゝおち入ぬとなんみ給へつる (三三・一一・一五二)

①世の中のうきたび毎に身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ
(古今集卷六、雑体、俳諧、二〇二、題しらず 読人しらず)
(河) (孟) (屋) (湖) (新) (余) (対) (事) (大) (集)

②鳥部山谷に煙のもえたつははかなく見えし我と知らなむ
(拾遺集卷十、哀傷、二三四、題しらず 読人しらず) (河)
(余) (二句ノミ)、△細▽ (岷) (湖) (余)

53 とりへのゝかたなどみやりたるほど (三三・四・一五三)

鳥部山谷に煙のもえたつははかなく見えし我と知らなむ
(拾遺集卷十、哀傷、二三四、題しらず 読人しらず) (河)
(孟) もえたゝは

54 かゝるみちの空にてはふれぬべきにやあらん (三三・四・一五二)

①たちて行く行ゑも知らずかくのみぞ道の空にてまじふら
なる (平中物語、三五段) (河) (休) (紹) (孟) (岷) (湖) (拾
(余)

②身を捨てつ心をだにもはふらさじ終には如何なると知るへ
く (古今集卷六、雑体、俳諧、二〇二、題しらず 興風)

(異)、(河) (上句ノミ)、(紹) (孟) (湖) (身は捨てつ)、(岷) (上
句ノミ)、「身はすてつ」

③心にもあらぬ我が身のゆきかへり道の空にて消えぬべき哉
〔新古今集卷十三、恋三、二七〇、題しらす、道信朝臣〕〔拾〕

〔余〕

55 かわのみづにてをあらひてきよみづのくわんをんをねむじた
てまつり〔三三、一六二〕

なほ頼めしめちが原のさしも草われ世の中にあらむ限りは
〔新古今集卷十、釈教、一七二、清水の観音〕〔紫〕

56 殿のうちの人のあしをそらにておもひまごふ〔三二、一六三〕

①立てて居るたどきも知らにわが心天つ空なり土は踏めども
〔万葉集卷三、二六六〕〔拾〕〔余〕立居するたどきもしらす

②吾妹子が夜戸出のすがた見てしより情空なり地は踏めども
〔万葉集卷三、二五五〕〔拾〕〔余〕

③たもとほりゆきみの里に妹を置きて心空なり土は踏めども
〔万葉集卷十、二五二〕〔拾〕立ちとまり、〔余〕

④下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ〔万
葉集卷十、二五三〕〔拾〕

57 うちより御つかひあめのあしよりもげにしげし〔三二、一六三〕

君を思ふ数にしとらばおやみなく降りそふ雨の脚は物かは
〔兼盛集、一七三〕おなじ人に、〔拾〕〔余〕

58 あながちにみだてまつりしもかゝるべき契こそはものし給け
めと〔三五、一六五〕

三輪山の山辺真麻木綿短木綿かくのみ故に長しと思ひき
〔万葉集卷、二五七、高市皇子尊〕〔新〕長くと思ひし

59 いとみぐるしきにすみわび給て山ざとにうつろひなんとおほ
したりしを〔三三、一六六〕

住みわびぬ今は限りと山里に身を隠すべき宿求めてむ〔伊
勢物語、三三・業平集、一六〇〇・後撰集卷五、雜一、二〇四、

世の中を思ひうじて侍りける頃、業平朝臣、「つままこる
べき」〔第四包〕〔河〕〔孟〕今はかぎりの、〔二〕〔休〕〔岷〕

60 いとしも人にとくやしくなん〔四二、一六八〕

思ふとていとこそ人に馴れざらめしか習ひてぞ見ねば恋し
き〔拾遺集卷十四、恋四、九〇〕題しらす、読人しらす、〔釈
前〕〔奥〕〔二〕〔休〕〔孟〕〔屋〕いとしも人にむつれけん、〔釈
宮〕いとしも人にむつれけん、〔紫〕〔異〕いとしも人にむ
つれけんしかならひては、〔河〕いとしも人にむつれけん、

〔細〕〔紹〕いとしも人にならざらん、〔岷〕〔湖〕〔余〕いとし
も人になれざらん、〔引〕、〔拾〕〔上句ノミ〕、「いとしも人
になれざらん」、〔新〕〔玉〕〔第三句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕

〔大〕〔集〕

61 みし人の煙を雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな
〔四二、一六九〕

①見し人の煙となりし夕より名もむつまじきしほがまの浦
〔紫式部集、二二〇〕世のはかなきことを歎く頃陸奥の名あ
る所々かいたるを見て、しほがまの浦・新古今集卷八、哀

傷、二〇、世のはかなき事をなげく頃みちの国に名ある所
々かきたる絵を見侍りて、紫式部、「煙になりし」〔岷〕

傷、二〇、世のはかなき事をなげく頃みちの国に名ある所
々かきたる絵を見侍りて、紫式部、「煙になりし」〔岷〕

々かきたる絵を見侍りて、紫式部、「煙になりし」〔岷〕

けわりとなりし、〔拾〕〔新〕〔余〕〔集〕

②見し人の雲となりし空なれば降る雪さへも珍らしき哉

〔斎宮集、一六三三〕、継母の北の方 〔余〕

62 ますだはまことになむときこえたりめつらしきにこれもあは

れわすれ給はずいけるかひなきや 〔四一四・一七〇〕

①ねぬなはの苦しかるらむ人よりもわれぞ益田の生けるかひ

なき 〔拾遺集卷十四、恋四、八四、題しらず 読人しらず〕

〔釈前〕〔釈宮〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔河〕〔細〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔余〕君よりも 〔第三句、一〕〔休〕〔孟〕〔全〕〔対〕〔事〕

〔六〕〔評〕〔集〕

②にくさのみ益田の池のねぬなはいとふにはゆる物にぞあ

りける 〔未詳〕 〔異〕

63 うつせみの世はうき物としりにしをまだことの葉にかゝるい

のちよ 〔四二〇・一七〇〕

空蟬の世は常なしと知るものを秋風寒み偲ひつるかも 〔万

葉集卷三、四三、家持〕 〔河〕世はつれなしと 〔真本つねなし〕…

しのひつるかも 〔真本しのひつるかな、〕 〔休〕知りしを、

〔孟〕しのびつるかな、 〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕

64 たかやかなるおぎにつけてしのびてとの給へれど 〔四二一・

一七二〕

山里の物さびしきは萩の葉のなびくごとにぞ思ひやらるゝ

〔後撰集卷三、秋上、三六、秋、大輔がうつまきの傍なる家

に侍りけるに萩の葉に文をさしてつかはしける 左大臣〕

〔異〕〔河〕、〔孟〕〔湖〕物さびしきは、 〔岷〕物さびしきは…

なびくことにも、〔新〕

65 なをこりずまに又もあだなはたちぬべき御心のすさびなめり

〔四二六・一七二〕

①こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし

住まへば 〔古今集卷三、恋三、三三、題しらず 読人しらず〕

〔釈前〕〔釈宮〕〔奥〕〔河〕またもあだなは、 〔釈書〕〔紫〕〔異〕

〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕

〔集〕

②風を痛みくゆる煙の立ちいで、猶こりずまの浦ぞ恋しき

〔後撰集卷三、八六、人のむすめのもとに忍びつつ通ひ侍り

けるを親聞きつけていといたくいひければかへりてつかは

しける 貫之 〔余〕

66 なくくもけふはわがゆふしたひもをいつれの世にかとけて

みるべき 〔四二二・一七二〕

二人して結びし紐を一人して我は解き見じただに逢ふまで

は 〔万葉集卷三、四三、三〕 〔集〕

67 こまやかにおかしきさまなるくしあふぎおほくして 〔四二六・

一七四〕

涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風なわすれそ

〔新古今集卷六、離別、八六、太宰帥隆家下りけるに扇賜

ふとて 枇杷皇太后宮 〔紫〕風に忘れば 〔河〕〔孟〕〔岷〕

〔湖〕

68 ぬさなどわざとがましくてかのこうちぎもつかはず 〔四二六・

一七四〕

①このたびは幣もとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまに／＼
(古今集卷六、羈旅、四三)、朱雀院の奈良におはしましける
 時に手向山にてよめる 菅原朝臣〔業〕〔異〕〔河〕〔五〕

②世の常に思ふ別れの旅ならば心みえなる手向せましや〔藤
 原長能集、三三六二〕、いづれの年にかありけむ唐きぬ扇など
 取らせて遠江にくだり侍りしに) 〔異〕

69 あふまでのかたみばかりとみしほどにひたすら袖のくちけける
 かな (二四〇・174)

①逢ふまでの形見とてこそとどめけめ涙に浮かぶ藻くづなり
 けり(古今集卷五、恋四、七五)、親の守りける人のむすめに
 いと忍びにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひ
 ければ急きかへるとて裳をなむぬぎ置きて入りにける其後
 裳を返すとてよめる 興風・興風集、二六六)、親のまもりけ
 るむすめをいと忍びてあひて物いひける程に親のあふとい
 ひければ急ぎていりにけるそのも返すとて・古今六帖第五、
 かたみ、三三六二、よしありの大臣 〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕

〔五〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔事〕〔集〕

②今はとて梢にかかる空蟬のからを見むとは思はざりしを
(後撰集卷五、恋四、八〇)、つらくなりにける男のもとに今
 はとて装束など返し遣はすとて 平なかきが女 〔拾〕

〔新〕〔余〕

③忘らるる身をうつ蟬のから衣かへすはつらき心なりけり
(後撰集卷三、恋四、八五)、かへし 源巨城 〔拾〕〔新〕〔余〕

70 せみのはもたちかへてける夏衣かへすをみてもねはなかれけ

り (二四一・174)

①忘らるる身をうつ蟬のから衣かへすはつらき心なりけり
(後撰集卷三、恋四、八五)、かへし 源巨城 〔新〕〔余〕〔事〕
 〔集〕

②鳴く声はまだ聞かねども蟬の羽の薄き衣はたちぞきてける
(拾遺集卷二、夏、五)、天曆の御時の歌合に 大中臣能宣
 〔集〕

③今はとて梢にかかる空蟬のからを見むとは思はざりしを
(後撰集卷五、恋四、八〇)、つらくなりにける男のもとに今
 はとて装束など返し遣はすとて 平なかきが女 〔集〕

71 すぎにしもけふわかるゝも二みちにゆくかたしらぬ秋のくれ
 かな (二四六・174)

①過ぎにしも今行く末もふた道になべて別れのなき世なりせ
 ば(西本願寺本斎宮女御集、三五) 〔河〕〔五〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔余〕〔事〕〔集〕

②ゆくたびも過ぎにしかたを思ふにも誰をもとまる身をいか
 にせむ(西本願寺本斎宮女御集、二七) 〔集〕

72 あまりものいひさがなきつみさりとどろなく (二四七・174)
 こゝにしも何句ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に
(拾遺集卷七、雑、二〇六)、房の前裁見に女どもまうで来り
 ければ 僧正遍昭・遍昭集、二八七)、嵯峨に侍りし法師の
 坊の前に前裁のはべりけるを女どものたちとまりて見侍り
 しかば 〔河〕〔五〕〔湖〕〔新〕〔余〕

1 きた山になむなにかし寺といふ所に (三五二・177)

① 北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離りて (万葉集 卷二、一六二) 「河」たなびくそらの…ほしわかれかく月もわかれて、 (孟) (湖) (余) ほしわかれかく月もわかれて

② さゞ波や志賀の山路のつゞら折りくる人絶えて枯れやしぬらむ (古今六帖第三、寺、三三五) (孟) (岷) (湖) (余)

2 京の花さかりはみなすぎにけりやまのさくらはまださかりにて (三五八・177)

① 故郷に花は散りつゝ三吉野の山の桜はまだ咲かずけり (家持集、早春、三五八) 「紫」 (河) (休) (岷) (湖) (余) ふるさとの…まださかりなり、 (孟) 古人の…まださかりなり、 (引)、 ^ 細 V (引歌に及はず)

② 里はみな散りはてしを足引の山の桜はまださかりなり (玉葉集卷三、春下、三三) 題しらず 躬恒 (紫) (異) (古) (河)、 (孟) (本歌を引に不及、 (岷) (湖)、 (拾) (第五句) …「まださかずけり」、此歌によりてかけるにはあらず、 (余) (对) (事) (大) (評) (集)

3 みねたかくふかきいはの中にぞひじりいりあたりける (三三二・178)

いかならむ殿の中に住まはかは世の憂き事の聞こえござらむ (古今集卷六、雑下、三三) 題しらず、読入しらず・古

今六帖第三、いはほ、三六六「住まへばか…尋ね来さらむ」 (河) (孟) (岷) (湖) (引) (余)

4 たゞこのつゞらおりのしもにおなじこしばなれど (三三二・178)

さゞ波や志賀の山路のつゞらおりくる人絶えて枯れやしぬらむ (古今六帖第三、寺、三三五) (紫) (異) (古)

5 人のくになどに侍るうみ山のありさまなどを (三五二・180)

ひと国に結婚よめに行きて太刀が緒もいまだ解かねばさ夜ぞ明けにける (万葉集卷三、二五〇) (河) 人のくに…: たちのをもまたとかざれば夜ぞ明けにける

6 あやしきこと所にせずゆほびかなる所に侍る (三五七・180)

みよし野のおほ河水のゆほびかにあらね物から波のたつらん (古今六帖第三、川、三三六) (古) (河) (孟) (湖) (引)、 (拾) (正句ノミ)、 (余)

7 大臣のゝちにていでたちもすべかりける人の (三五八・180)

今までに出で立たぬ身は百敷の宮の桜を見てややみなむ (躬恒集、一五三) (河)、 (孟) いま…ではいたらぬ身には 8 けしうはあらずかたち心はせなど侍るなり (三三六・181)

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人にみえつゝ (古今集卷十、物名、三三) さき、まつ、びは、ばせをば 紀のめのと) (河) (孟) (湖) (余)

9 君なに心ありてうみのそこまでふかうおもひいるらむそののみるめものむつかしうなど (三五四・182)

① あまのすむそこのみるめもはつかしくいそにおいたるわか

めぞつむ〔未詳〕〔釈前〕〔釈宮〕〔紫〕〔異〕〔古〕〔花〕

〔休〕〔岷〕〔新〕〔余〕〔集〕、〔奥〕〔孟〕〔引〕わかめをぞかる、

〔湖〕むつかしく〔第三句〕、△細▽〔本歌難用之〕、△玉▽

〔引歌無用〕

②波わけて見るよしもがなわたつみの底のみるめも紅葉散る

やと〔後撰集卷十、秋下、四七、題しらず 文屋朝康〕〔二〕

〔湖〕〔新〕〔余〕

③須磨のあまをしるべと思へば渡つ海のそのみるめはうた

がひもなし〔清正集、二六四、ひろはたの御息所の御曹子

にあごぎといふわらはに文遣すことすまといふ殿守遣し

て〕〔余〕

10をひたゝむありかもしらぬわか草のをくらす露ぞきえんそら

なき〔天1・186〕

限りなき雲居のよそに別るとも人を心におくらすむやは

〔古今集卷六、離別、三三、題しらず 読入しらず・大和物

語三・遍昭集、一八六三〕〔二〕〔新〕〔余〕

11はつ草のおひ行すゑもしらぬまにかでか露のきえんとすら

む〔二五三・186〕

①つら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばむ事をしぞ思ふ

〔伊勢物語二〇・古今六帖第六、春の草、三三三、業平・新千

載集卷十、恋二、二〇三、妹のをかしきを見てよめる、在原

業平朝臣〕〔古〕〔集〕

②初草のなごめつらしきことの葉ぞつらなくものを思ひける

かな〔伊勢物語、二〇・新千載集卷十、恋二、二〇七、返し、

読入しらず〕〔花〕〔休〕〔孟〕〔集〕

12くさの御むしろもこのばうにこそまうけ侍べけれ〔五五

187〕

①そのかみのいもひの庭に余れりし草の薙も今日やしくらむ

〔続後撰集卷十、釈教、三六、天台大師の忌日によみ侍りけ

る 大僧正慈恵〕〔紫いにしへの〕あまれかし、〔異〕、

〔古〕いまやしくらむ、〔河〕、〔孟〕〔湖〕しき忍ぶ〔第三句〕、

〔岷〕いにしへの〔初句〕、〔引〕

②春日野の青嶺が峯の苔むしろたれか織りけむたてぬきなし

に〔古今六帖第二、むしろ、三三〇〕〔古〕つくばねの…く

さむしろ…たてぬきにして

13中くくさかしら心なくうちかたらひて〔五10・190〕

①さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが独りぬる

〔古今集卷六、誹諧、二〇七、題しらず、読入しらず・古今

六帖第一、霜月、三〇二・同第五、ひとりね、三三三〕〔河〕

〔孟〕〔湖〕

②秋の野に行きて見るべき花のいろを誰さかしらに折りてき

つらむ〔古今六帖拾遺、三三三〕〔河〕〔孟〕

14かたみもなきかとおさなかりつるゆくゑの〔二12・190〕

結び置きし形見の子だになかりせば何に忍ぶの草をつまゝ

し〔後撰集卷六、雑二、二八、兼忠朝臣の母ままかりにけ

れば兼忠をば故枇杷左大臣の家にむすめをばきさいの宮に

さおらはせむとあひ定めて二人ながらまつ枇杷の家に渡し

送るとてくはへ侍りける 兼忠朝臣の母のめのと・古今六

帖第尋、かたみ、三三九七〔休〕結びをく、〔絶〕とゞめをく…

何を忍の草につまゝし、〔岷〕とゞめおく…露をかけまし

15 たきのよどみもまさりておとたかきこゆ〔三三二二・三三二一〕

滝つせの中にも流はありてふをなど我が恋の淵瀬ともなき

〔古今集卷十、恋一、四三三、題しらず 読人しらず〕〔河〕

〔孟〕〔湖〕〔余〕、八岷▽〔河に引歌あり之に及ばず〕

16 ましとおほしめぐらすことおほくてまどろませ給はず〔三三二二・三三二一〕

12・191

山おろしの風の声のみはげしくて井堰の水はもれど寝られ

ず〔赤染衛門集〕〔集〕

17 ほとけの御しるべはぐらきにいりてもさらにながうまじかな

るものをと〔三三二五・192〕

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

〔拾遺集卷二十、哀傷、三三三、性空上人のもとによみて遣は

しける 雅致女式部・和泉式部集、四三六六〕〔休〕、〔絶〕入

りにける

18 枕ゆふこよひばかりの露けさをみ山のこけにくらべざらなむ

〔三三二・193〕

奥山の苔の衣にくらべ見よいづれか露のおきはまさると

〔多武峯少将物語・新古今集卷六、雑中、二六四、少将隆光

横川にまかりてかしろおろし侍りけるに法服遣すとして 権

大納言師氏、「おきままするとも」〔花〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔余〕

くらべなんいづれか露はこほれまさると、〔集〕

19 ひがたう侍るものをときこえ給ふ〔三三二二・193〕

夕さればいとゞ千難き我が袖に秋の露さへおきそはりつゝ

〔古今集卷十、恋一、五三三、題しらず 読人しらず〕〔細〕、

〔絶〕夕暮は、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔集〕

20 さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心はさはぎやはする

〔三三二二・196〕

①古への野中の清水みるからにさしぐむものは涙なりけり

〔後撰集卷十、恋四、八四、あひすみける人心にもあらで別

れにけるが年月をへてもあひ見むとかきて侍りける文を見

出で、遣はしける 読人しらず〕〔異〕〔河〕〔孟〕、〔湖〕 中

句ノミ、〔引〕〔拾〕、〔玉〕〔第五句ノミ〕、〔余〕

②雲居よりうちえの声を聞くなべにさしぐむばかり見ゆる月

影〔蜻蛉日記、三〇二〕〔拾〕こちくの声を、〔玉〕

③昔より山水にこそ袖ひづれ君がぬるらむ露はものかは〔多

武峯少将物語〕〔集〕

21 名もしらぬ木草のはなども色くちりまじりにしきをしけ

るとみゆる〔三三二一・196〕

花の影たゞまくをしきこよひ哉錦をさらす庭のみえつゝ

〔後拾遺集卷二、春下、二六、花の庭にちりて侍りける所に

てよめる 清原元輔・元輔集、二五三三、桜の散れる所にて〕

〔紫〕〔異〕錦をしけるにはと見えつゝ、〔河〕〔孟〕〔岷〕〔余〕

〔湖にしきをしける〔第二句〕…たゞまくおしき庭とみえ

つゝ、〔休〕〔絶〕庭とみえつゝ、〔集〕

22 しかのたゞすみありくもめつらしくみ給になやましきままき

れはてぬ〔三三二二・196〕

- ①春なればすがるなる野のほととぎすほとほとと妹に逢はず来にけり〔万葉集卷十、夏の相聞、一〇七〕〔紫〕〔異〕
- ②萌えわたる草木もあらぬ春へには山辺にいそぐ鹿ぞふむらし〔うつは物語、梅の花笠〕〔大〕
- 23 おく山の松の戸ぼそをまれに明てまだみぬ花のかほをみるかな〔六〇二・197〕
- ①夕露にむろのとほそもたちこめて入るべき道も見えずもあるかな〔未詳〕〔紫〕〔異〕
- ②あし引の山桜戸をまれにあげてまだみぬ花の色を見るかな〔未詳〕〔細〕〔第三句ノミ〕、〔細〕〔上句ノミ〕、〔孟〕〔湖〕、〔新〕
明け置きてわが待つ人を誰かとむる〔万葉集〕、〔余〕
- ③奥山の真木の板戸をおし開きしゑや出で来ぬ後は何せむ〔万葉集卷十一、二二七〕〔拾〕〔余〕
- ④奥山の真木の板戸を音速み妹があたりの霜の上に宿ぬ〔万葉集卷十一、二二七〕〔拾〕〔余〕
- ⑤奥山の真木の板戸をこごとし我が開かむに入り来て寝さね〔万葉集卷十一、二二七〕〔拾〕〔余〕
- ⑥昨日見し花の顔とてけさみればねてこそさらに色まさりけれ〔後撰集卷三、春下、二六、ことふえなどしてあそび物語などし侍りける程に夜更けにければまかりとまりて又のあしたに 三条右大臣〕〔拾〕〔余〕
- ⑦薄くこき色はまがへど花といへば一つ顔にも見え渡るかな〔興風集、二〇七〕〔拾〕〔余〕
- ⑧桜花露にぬれたるかほ見ればなきてわかれし人ぞ恋しき
- 〔拾遺集卷六、別、三三、題しらず、読人しらず〕〔拾〕〔余〕
- 24 すきたるふくろにいれてこえうのえだにつけて〔二六五・197〕
- 針袋これは賜りぬすり袋今は得てしか翁さびせむ〔万葉集卷六、四三三〕〔河〕〔孟〕われはたばりぬ…いざはえてしか翁さたせん、〔岷〕われはたばりぬ…翁さたせん
- 25 ごえうのえだにつけてこむるりのつぼどもに御くすりどもいれて〔二六五・197〕
- 今はとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひ出でける〔竹取物語、一四〕〔拾〕君をころもとおもひ出たる
- 26 ゆふまぐれほのかに花のいろをみてけさはかすみのたちぞわづらふ〔二六四・198〕
- やま桜霞のまよりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ〔古今集卷十一、恋、四九、人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後によみてつかはしける 貫之〕〔古〕
- 27 まことにや花のあたりはたちうきとかすむる空のけしきをもみむ〔二六一・198〕
- ①君により我が名は花にはる霞野にも山にも立ちみちにけり〔古今集卷十一、恋三、六五、題しらず 読人しらず〕〔拾〕
- ②春くれば花見むと思ふ心こそ野べの霞とともにたちけれ〔後撰集卷三、春下、二二、女ども花みむとて野べに出で、典侍因香朝臣〕〔拾〕
- 28 あぶぎはかなううちならしてとよらの寺のにしなるやとうた

ふ (二六九・199)

葛城の寺の前なるや 豊浦の寺の西なるや 榎の葉井に
 白玉しづくや ま白玉しづくや おしとど おしとど し
 かしてば 国ぞ栄えんや 我家らぞ 富みせんや おしと
 ど としとんど おおしとんど としとんど (催馬楽、葛
 城、34) (釈前) 可川良色く支乃於く天良安く乃末安戸名
 留也丘く斗与良安く乃支ハ良乃余之ツ 奈留也江乃
 波丘く為余ツ良太万安末之ツ 久世於之止止於
 之火止く之可之ツ 天波安安久余曾太安可江无世安く
 和伊戸良留於之止美ツ 世无色於之止くと於之毛上
 ハ於之之上くと於之止と、ハ釈宮、(奥)可川良支乃
 天良乃末戸名留や止与良乃天良乃余之奈留や江の波の余
 之良太万之川久やま之良た万しづくやをしもともをしか
 らてはくはそさかえむや和以戸良曾と美せ牟やおく之と
 くと之屯止おく之屯止屯止、(紫)(異)(古)(河)(一)
 (休)(紹)(宝)(岷)(湖)(引)(新)(全)(对)(事)(大)(評)
 (集)

29 そはして (二六三・199)

世間の 術なきものは 年月は 流るる如し 取り続き
 追ひ来るものは 百種に 迫り寄る 少女らが 少女
 さびすと 唐玉を 手本にまかし 同輩兒らと 手携りて
 遊びけむ 時の盛りを 留みかね 過し遣りつれ 麴の腸
 か黒き髪に 何時の間か 霜の降りけむ 紅の 面の上

に 何処ゆか 嫩が来りし 大夫の 男子さびすと 劍太
 刀 腰に取り佩き 獵弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文
 鞆うち置き 備ひ乗りて 遊びあるきし 世間や 常にあ
 りける 少女らが さ寝す板戸を 押し開き い辿りより
 て 真玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜の 幾許もあらね
 ば 手束杖 腰にたがねて か行けば 人に厭はえ かく
 行けば 人に憎まえ 老男は 斯くのみならし たまきは
 る 命惜しけど せむ術も無し (万葉集卷三、(四) (河)
 (五)をとめさびすを とめさびすもからたまをたもとにまき
 てをとめさびすも (一部ノミ)

30 とはぬはつらきものにやあらんとしりめにみをこせ給へるま
 みいととはづかしげにけだかうつくしげなる御かたちなりま
 れまればあさましの御事やとはぬなどいふきはくことにこそ
 侍なれ心うくもの給ひなすかな (七五)14・202)

①君をいかで思はん人に忘れせてとはぬはつらきものとしら
 せん (未詳) (釈前) (釈宮) (釈書) (奥) (紫) (異) (古) (弄)
 (一) (休) (紹) (引) (君をいかに) (五) (屋) (湖) (拾) (玉)
 (余) (全) (对) (事) (大) (集)

②忘れねといひしにかなふ君なれど訪はぬはつらきものにぞ
 ありける (後撰集卷三、恋三、九元、朝頼の朝臣の年ごろせ
 をそこ通はし侍りける女の許よりようなし今は思ひ忘れね
 とばかり申して久しうなりにければこと女にいひつきて消
 息もせずなりにければ 本院のくら・古今六帖第四、うらみ、
 三九七) (古) (河) (細) (五) (物にやあらん、(岷) (湖) (余)

③恨むべきほどはなけれどおほかたもとはぬはつらき物にぞありける〔こともつきほどはなけれど片時もとはぬはつらきものにざりける〕古今六帖第五、おどろかす、三三三〔古〕〔六帖五〕トスル)

④こともつき程はなけれど片時もとはぬはつらきものにざりける〔古今六帖第五、おどろかす、三三三〕〔拾〕〔余〕物にぞ有ける、〔対〕〔大〕〔集〕

⑤我が宿にきるる鶯羽を弱み訪はぬはつらき物にぞありける〔古今六帖第六、うぐひす、三三三〕〔拾〕〔余〕

31 よしいのちだにとてよるのおましにいり給ひぬ〔二五・202〕
①命だに心にかなふものならば何か別れの悲しからまし〔古今集卷六、離別、三三三、源のさねがつくしへ湯あみむとて罷りける時に山崎にて別れ惜みける所にてよめる しろめ・古今六帖第四、別、三三三〕〔悲〕しかるべき〕・大和物語、六三、和漢朗詠集卷下、銭別、六三三〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔古〕〔河〕〔細〕

〔五〕〔帳〕〔湖〕〔引〕〔念〕なにかは人を恨みしもせん、〔弄〕〔休〕〔絶〕何かは人を忘れしもせん、〔一〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

②えぞしらぬ今心みよ命あらば我や忘るゝ人やとはぬと〔古今集卷六、離別、三三三、紀のむねさだがあつまへまかりける時に人の家に宿りて暁いでたつとてまかり申しければ女のみみて出せりける 読人しらす・古今六帖第四、雑の思、三三三〕、〔今試む〕 〔五〕〔湖〕〔新〕〔余〕

③命だにあらば見るべき身の果てを忍ばむ人もなきぞ悲しき

〔和泉式部集、四三三六・新古今集卷六、雑下、二二六、題しらす 和泉式部、〕あらばみつべき…忍ばむ人の〕〔屋〕
④いかにしてはし忘れむ命だにあらば逢ふ夜のありもこそすれ〔拾遺集卷十二、恋、六三三、題しらす よみ人しらす〕〔余〕

32 よのまの風もうしろめたくなむとあり〔二五三〇・203〕

朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風の後めたさに〔拾遺集卷二、春、三三三、題しらす 兵部卿元良親王〕〔紫〕いでぞ見つる、〔異〕〔古〕、〔河〕桜花〔不本梅の花、二〕〔第二句ノミ〕、〔細〕桜花、〔休〕〔絶〕〔五〕〔屋〕〔湖〕〔引〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

33 はかなうをしつゝみ給へるさまざままだすぎたる御めどもにほめもあやに〔二五二四・203〕

※まだすぎたる―さだすぎたる青御横神池首三河 おきつ波辺浪の来寄る左太の浦のこのさだ過ぎて後恋ひむかも〔万葉集卷十二、三三三、同卷十三、三三六〕〔河〕おきのなみ、〔五〕おきの浪…あまのさだすぎて、〔帳〕さだの浦…後恋んにも

34 ゆくての御事はなをざりにも思給へなされしを〔二五二六・203〕

三笠山きてもとはれぬ道のべにつらきゆくての影ぞつれなき〔新勅撰集卷古、恋四、六三三、采女まぢにて右近のつかさのさうしにまかり出づる人を待ち侍りけるに行き過ぎながら立ち寄らざりければ 采女明日香〕〔異〕きてもとまら

ぬみちゆへに

35 ふりはへさせ給へるにきこえさせむかたなくなむ (二七・
203)

春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ
(古今集卷二、春上、三、歌奉れと仰られし時詠みて奉れる

貫之・古今六帖第一、若菜、三(五四) (異)春の野に

36 まだなにはづをだにはかぐしうつづけ侍らざめれば (二七
7・204)

難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春へとさくやこの花

(古今六帖第六、花、三(五五)・和漢朗詠集卷下、帝王、六(六)

〔紫〕(古)〔孟〕〔河〕〔余〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

37 あさか山あさくも人をおもはぬになどやまの井のかけはなる
らむ (二七五・205)

①浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものは (古

今六帖第三、山の井、三(六三)・小町集、一九三三・大和物語、

三〇〇・万葉集卷六、三(七) 采女、「あさき心をわが思はなく

に」(〔紫〕〔河〕〔紹〕、〔孟〕思はぬ物を、〔湖〕〔引〕、〔新〕上
句ノミ、〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕)

②山の井の浅き心も思はぬにかげばかりのみ人の見ゆらむ

(古今集卷十五、恋三、支四、題しらず、読人しらず) (古)

38 くみそめてくやしとまじし山の井のあさきながらやかけをみ
るべき (二七六・206)

悔しくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみぬる山の井の水

(古今六帖第三、山の井、三(六三) (紫)袖のみぬらす、

〔異〕、〔古〕あさきけれど、〔河〕〔花〕〔弄〕(二)〔細〕〔休〕〔紹〕
〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔事〕〔集〕

39 などかなのめなることだにうちまじり給はざりけむとつら
さへぞおほさるゝ (二七三・205)

今はたゞそよ其の事と思ひ出て忘るばかりのうきこともが
な(後拾遺集卷十、哀傷、五三、敏道親王に後れてよみ侍り
ける 和泉式部) (休)、〔紹〕うきふしもがな

40 くらぶの山にやどりもとらまほしげなれど (二七四・206)

①暴染めの鞍馬の山にいる人はたどるくもかへりきなむ
(後撰集卷十、恋四、八三、淨蔵くらまの山へなむ入るとい

へりければ 平中興が女・古今六帖第二、山、三(七〇)、「く

らぶの山に入りし人惑ふくも」・大和物語卷六 (釈前)
〔異〕くらぶの山にたどるくぞかへりきにける、〔釈

宮〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔古〕〔河〕〔孟〕くらぶの山にたどる

くぞ帰るべらなる、〔弄〕〔岷〕くらぶの山に

②倉部山暗しと名にはたてれども妹がりといはゞ夜も越えな
む (古今六帖第三、山、三(七六) (古)〔花〕、〔孟〕いもがり

いはゞ、〔屋〕〔岷〕

③秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

(古今集卷四、秋上、二(四) 月をよめる 在原元方・古今六

41 殿におはしてなきねにふしくらし給ひつ (二七四・206)

④いざせこと小倉の山の家あして短き夏のををも恨みじ (曾

丹集、三(五四) 源順) (玉)〔大〕

夕されば君を待乳の山鳥の鳴くなくぬるを立ちもきかなむ

(古今六帖第三、山どり、三〇〇)〔拾〕〔新〕

42 この月ごろはありしにまさる物おもひにことぐなくなくてすぎゆく(二七三・208)

①厭ひては誰か別れのかたからむありしにまさる今日は悲し

も(古今六帖第四、別、三三四、業平・伊勢物語、九、「出でていなば」(初包)・業平集、二二五、「何か別れの惜しからむ」)

〔巻〕〔異〕〔古〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔余〕出でていなば、〔事〕、△細▽〔引歌に及べからず〕

②忘れなんいまはとおもふをりにこそありしにまさるもの思

ひはすれ(一条撰政御集、三〇・玉葉集卷十三、恋四、一六六、兼徳公のもとに遣しける 読人しらず、「時にこそ」)〔古〕

43 みちのほだしに思たまへられぬべきなどきこえ給へり(二五・210)

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり

けれ(古今集卷六、雑下、九三、同じ文字なき歌 物部よしな)〔河〕〔孟〕〔余〕〔事〕

44 おなじ人によとことさらおさなくかきなし給へるも(二七九・212)

①堀江とぐたななし小舟こぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ(古今集卷七、恋四、三三、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、江、三三二、「入江とぐ…同じ人のみ思はゆるかな」)

〔釈前〕みなといりの…おなじ人をや恋しと思ひし、〔釈

宮〕^{ほりまて}みなといりの…をなじ人をや恋わたりなん、〔紫お

人をや恋わたるべき、〔古〕同じ人をや、〔河〕、〔一〕〔休〕恋わたらん、〔細〕〔屋〕恋わたるべき、〔孟〕入江とぐ、

〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②みなと入りの葦わけ小舟さきはおほみわが思ふ人に逢はぬ

ころかな(拾遺集卷七、恋四、八三、題しらず 人麿・柿本集、二五九)、「恋しき人に」第四句・万葉集卷十、三三三、「わが思ふ君に逢はぬころかも」・同卷十三、三九六、「今来むわれ

をよとむと思ふな」(奥)〔古〕〔河〕〔孟〕〔湖〕〔余〕おなじ人

にや恋んと思ひし、〔岷〕おなじ人にや恋ひわたらんむ、〔拾〕おなじ人にや恋んと思ひし、④わが思ふ君に逢はぬ頃かも、⑤今くる我をこずと思ふな、〔新〕〔事〕

45 秋の夕はまして心のいとまなくおほしみだるゝ人の(二九一・212)

いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかり

けり(古今集卷七、恋二、五五、題しらず 読人しらず・小町集、一六六)、「あやしかりけり秋の夕暮」(古)〔引〕〔事〕

46 手につみていつしかもみむらさきのねにかよひけるのべのわか草(二〇一・212)

紫のひととゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る(古今集卷七、雑上、八三、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、むらさき、三三四)、「草はなべてもなつかしきかな」

〔河〕、〔細〕〔上句ノミ〕、〔休〕〔細〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔余〕〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

47 かつたじけなきなげの御ことのはゝのちの御心も (二二六・

214)

①よのつねはなげらのよそに見えし人も秋風吹けぶそれぞ恋しき (未詳) 〔五〕

②言の葉はなげなるものといひながら思はぬためは君もしるらむ (後撰集卷十一、恋三、八二六、人の許につかはしける 読人しらす) 〔拾〕

③哀をばなげの言葉といひながら思はぬ人にかくるものかは (古今六帖第四、雑の思、三九六) 〔拾〕

④ことのはをなげなるものと思ひせば何かは人のつらくしもあらむ (兼盛集、二七五五、女返しもせざりければなげなる物などいふこともあるものをとて・続後拾遺集卷十一、恋三、三九六、女の返りこともせざりければなげなる物をといふこともあるをとて 平兼盛) 〔拾〕

48 なを人づてならできこえしらせばや (二二一〇・214)

いかにしてかく思ふてふことをだに人伝ならで君に語らむ (後撰集卷十一、恋三、三九六、忍びてみくしげ殿のべたうにあひかたらふと聞きて父の左大臣のせいし侍りければ 教忠 朝臣・大和物語、五〇) 〔拾〕君にしらせむ、〔余〕

49 あしわかのうらにみるめはかたくともこはたちながらかへるなみかは (二二一一・214)

①あしわかの浦にきよする白波のしらじな君は我はいふとも (古今六帖第五、いひはじむ、三三六九・新勅撰集卷十一、恋一、

題しらす 読人しらす、「我が思ふとも」 〔奥〕〔巻〕〔異〕

〔古〕、〔河〕我が思ふとは、〔一〕〔休〕〔孟〕〔岷〕しらじな君を我が思ふとは、〔湖〕〔引〕〔余〕

②難波瀉こげども小舟は葦わかかえざる程こそ久しかりけれ (元真集、二〇三六、天徳三年九月十六日庚申に中宮の女房歌合せむといふによめる、庚申) 〔拾〕

③こりずまの浦の白波立ち出でゝ寄る程もなくかへるばかりか (後撰集卷十一、恋四、八二〇、あだにみえ侍ける男に 読人しらす) 〔余〕

50 なぞこえざらんとうちずしたまへるを (二二一四・215)

人しれぬ身は急げども年を経てなぞこえがたきあふさかの関 (後撰集卷十一、恋三、七三三、女のもとに遣しける これまさの朝臣) 〔奥〕、〔兼〕〔休〕〔湖〕〔新〕〔余〕人しれず：なぞこえざらん、〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔引〕人しれずなぞこえがたき、〔古〕〔尾〕人しれず、△弄▽〔一〕、〔細〕〔下句〕

ミ、〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

51 このひざのうへにおはとのごもれよいますこしより給へ (二二三七・216)

①いかにあらむ日の時にかも声知らむ人の膝の上わが枕かむ (万葉集卷五、二〇〇、大伴淡等) 〔拾〕

②膝に伏す玉の小琴の事なくはいとここだくにわれ恋ひめやも (万葉集卷七、二三六・古今六帖第六、こと、三三四、) いかくばかり我が恋ひずかも) 〔拾〕

52 いみじうきりわたれる空もたゞならぬに (二二四九・218)

しのゝめの空きり渡りいつしかに秋の景色に世はなりにけり〔業式部集、三六六、七日ついたち頃晴なりけり、かへし・玉葉集卷四、秋上、四四、七月一日あけぼの空をみてよめる 業式部、「いつしかと」〕〔拾〕〔新〕

53 あさばらけきりたつ空のまよひにも行すぎがたきいもがかどかな〔四一四・219〕

① 妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くなまた願ひむ〔万葉集卷三、三三三・猿丸大夫集、二五〇、相知りたる女の家の前を渡るとて草を結びて入るゝ、「妹がりと行き過ぎがてに：逢はむ日までに」〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔余〕逢はむ日までに、〔絶〕行き過ぎがてに：逢はむ日までに

② 妹が門行き過ぎかねつひぢ笠の雨もふらなむあまがくれせん〔古今六帖第一、雨、三三三〕〔一〕君があたり行き過ぎかねて、〔大〕〔集〕行き過ぎかねて

③ 妹が門 夫が門 行き過ぎかねてや 我が行かば 笠笠の 腋笠の 雨もや降らなむ してたをさ 雨やどり 笠やどり 宿りてまからむ してたをさ〔催馬楽、妹が門、46〕

④ 妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせむ〔万葉集卷十二、三六五〕〔評〕〔集〕

54 たちどまりきりのまがきのすきつくは草の戸をさしにさはりしもせじ〔二五二・219〕

① ちはやぶる神のいがきもこゆる身は草のとざしに障るもの

かは〔古今六帖第三、戸、三三三〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔古〕〔余〕

② 秋の夜の草のとざしのわびしきは明くれど明けぬものぞありける〔後撰集卷三、恋四、九〇〕、女の許にまかりたりけるよ門をさしてあけざりければまかり帰りて旦に遣しける 兼輔朝臣〕〔古〕〔河〕〔絶〕〔岷〕〔評〕〔集〕

③ いふからにつらさぞ増る秋の夜の草のとざしに障るべしやは〔後撰集卷三、恋四、九二、かへし 読人しらす〕〔異〕

〔古〕〔河〕〔絶〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔拾〕〔余〕〔評〕〔集〕

④ 君に見えむことやゆゝしきをみなへし霧のまがきに立ちかくるらん〔新撰万葉集卷下、女郎花、四、古今六帖第六、女郎花、三三三〕、一人の見ることや苦しき〕〔拾〕〔余〕

⑤ さやかにもけさは見えずやをみなへし霧のまがきにたちかくれつゝ〔新撰万葉集卷下、女郎花、二〇〕〔拾〕

⑥ 山里の霧のまがきのへだてすばをちかた人の袖もみてまし〔曾丹集、三三三〕、新古今集卷五、秋下、四三、題しらす 曾 祢好忠〕〔拾〕〔余〕

55 おかしかりつる人のなごり恋しくひとりゑみしつゝ〔二五二・219〕

① よもすがらなづさはりぬる妹が袖なごり恋しく思ほゆるかな〔古今六帖第五、あした、三三三〕〔古〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔湖〕 たづさはりつる、〔花〕、〔岷〕〔私云引歌におよばざる 歎〕〔余〕たづさはりつゝ、〔事〕

② 逢ひ見ては慰むやとぞ思ひしに名残しもこそ恋しかりけれ〔後撰集卷二、恋四、七五〕、人のもとより帰りまできて遣は

しける 坂上是則・是則集、一三六、あふ、「思ひしを」
〔余〕

56 としころもあつしくさだすぎ給へる人にそひ給へる (二五
13・220)

①人間守り葦垣越しに吾妹子を相見しからに言ぞさだ多き
(万葉集卷十一、三三六) 〔拾〕

②おきつ波辺波の来寄る左太の浦のこのさだ過ぎて後恋ひむ
かも (万葉集卷十一、三三三) 〔拾〕

57 ひるはさてもまぎらはし給ふをゆふぐれとなればいみじくし
給へば (二六六・221)

あふことの まれなる色に 思ひそめ 我身は常に あま
ぐもの 晴る時なく ふじのねの もえつゝとはに 思へ
ども 逢ふ事かたし なにしかも 人を恨みん わたつみ
の 沖を深めて 思ひてし 思ひは今は いたづらに な
りぬべらなり ゆく水の 絶る時なく かぐなはに 思ひ
みだれて ふる雪の けなげぬべく 思へども えぶの
身なれば なほやまず 思ひはふかし あしひきの 山下
水の 木がくれて 滝津心を たれにかも 相語らはん
いろにいでは 人しりぬべみ すみぞめの 夕になれば
ひとりゐて あはれくと 歎きあまり せんすべなみに
庭に出て 立ちやすらへば しろたへの 衣の袖にお
く露の けなげぬべく 思へども 猶歎かれぬ 春がす
み よそにも人に あはんとおもへば (古今集卷六、雑
体、短歌、二〇〇、題しらず 読人しらず) 〔古〕すみぞめ

のゆふべになればひとりゐてあはれあはれとなげきあま
りせんすべなみに庭にいであちやすらへばしるたへの
(一部ノミ)

58 あづまをすがかきてひたちにはたをこそつくれといふうたを

こゑはいとままめきてすさびるたまへり (二八七・223)

常陸にも 田をこそ作れ あだ心 や かぬとや君が 山
を越え 雨夜来ませる (風俗歌、常陸、12) 〔釈前〕比田

千仁波 田於故曾川久礼田礼遠加弥也末乎故江野本毛故
江若加河末田幾備世留也、〔釈宮〕度々ちにハ…これをか
ねふをこし乃おこしきみかあまよきませるや、〔釈書〕常
陸には田をこそつくれ (一部ノミ)、〔奥〕ひたちには田をこ
そつくれ田礼をかねやまをこえ野をもこえ君があまたき
ませる、〔最〕〔紫〕〔異〕〔古〕〔河〕〔一〕〔休〕〔五〕〔眠〕

〔湖〕〔引〕〔玉〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔六〕〔評〕〔集〕

59 みもしらぬしる五るこきませにひまなういでいりつゝ (二五
1・223)

①見わたせば柳さくらをこきませて都ぞ春の錦なりける (古
今集卷一、春上、五、花ざかりに京を見やりてよめる 素
性法師・古今六帖第三、都、三三三、素性「都は春の錦なり
けり」・素性法師集、一三〇五、和漢朗詠集卷下、眺望、三〇、
素性) 〔紫〕〔異〕〔古〕〔河〕〔五〕〔湖〕〔引〕〔余〕〔事〕〔評〕
②みゆきふる春日の山のさくらばなえこそみわかねこきませ
にして (延喜二十一年京極御息所妻于歌合、五) 〔河〕〔五〕
〔湖〕〔余〕春日の原の

60 むさしんといへばかこたれぬとむらさきのかみにかい給へる
〔二五〇・229〕

①知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の
ゆゑ〔古今六帖第五、むらさき、三三三三〕〔釈前〕、〔釈宮〕
むさし野てへ〔二五〇〕ば…よしやさらこそは、〔興〕よし
やさこそは、〔紫〕異〔古〕〔河〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕

〔岷〕〔湖〕〔引〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②紫のひとつも故にむさし野の草はみながら哀れとぞ見る
〔古今集卷七、雑上、六六、題しらず、読人しらず・古今六
帖第五、むらさき、三三三三〕「草はなべてもなつかしきかな」
〔引〕

61 ねはみねどあはれとぞおもふむさしのゝ露わけわぶる草のゆ
かりを〔二五〇・229〕

うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばむ事をしぞ思ふ
〔伊勢物語、一〇六・古今六帖第六、春の草、三三三三・新千載集
卷七、恋一、一〇二六、妹のをかしきを見てよめる、在原業平
朝臣〕〔花〕、〔一〕〔上句ノミ〕、〔岷〕〔湖〕

62 かこつべきゆへをしらねばおぼつかないかなる草のゆかりな
るらん〔二五14・230〕

①かこつべき人もなきよに武蔵野の若紫をなにてめづらむ
〔実方集、三七二〕、とのもりの君に紫こひたるおこすとして
〔古〕〔花〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔余〕ゆへもなき
身に…なにゝかくらん、〔新〕〔第三句ノミ〕、〔事〕

②知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の

ゆゑ〔古今六帖第五、むらさき、三三三三〕〔事〕

63 ころにまかせるてはふらかしつるなめりとなくくかへり
給ぬ〔二五〇・231〕

身は捨てつ心をだにもはふらまじつひにはいかなると知
るべく〔古今集卷七、雑体、一〇六六、題しらず、興風・興風
集、二五三三〕「なると見るべく」・古今六帖第六、雑の思、
三三三三〔紫〕〔古〕

末摘花

1 思へどもなをかざりしゆふがほの露にをくれし心地をとし
月ふれどおぼしわすれず (二〇一・235)

①しぐれつゝ梢々にうつるとも露に後れし秋な忘れそ (朝忠
集、二四四号、御四十九日女房のなかにいれる・信明集、
二〇一〇、御いみはてゝ出でける日、「梢はこゝに…秋は忘れ
じ」)

②思へども身をし分けねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞや
る (古今集卷六、離別、三三、あづまの方にまかりける人に
よみて遣はしける いかごのあつゆき) (余集)

③あかざりし袖のなかにや入りにけむ我が魂のなき心地する
(古今集卷六、雑下、九三、女ともだちと物語して別れて後
につかはしける みちのく) (集)

2 こりずまにおぼしわたればすこしゆへづきて (二〇五・235)
こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし
住まへば (古今集卷三、恋三、三三、題しらす 読人しらす)

3 おぎの葉もさりぬべきかせのたよりある時はおどろかし給ふ
(二〇一・236)

秋風の吹くにつけても訪はぬかな荻の葉ならば音はしてま

し (後撰集卷三、恋四、八号、平かねきがやうくかればた
になりにければつかはしける 中務・古今六帖第六、をき、
三三六二・中務集、二九七、「吹く折にしも」和漢朗詠集卷下
、風、四二、中務) (古) (花) (休) (孟) (事)

4 きゝる人こそあなれもゝしきにゆきかう人のきくばかりや
はとて (二〇九・238)

琴の音を聞き知る人のありければ今ぞ立ち出でて緒をもち
ぐべき (古今六帖第六、こと、三三三) (紫) (異) (河) (二)

5 かやうの所にこそはむかしものがたりにもあはれなる事ども
ありけれ (二〇四一・238)

虫だにもあまた声せぬ浅茅生にひとり住むらん人をこそ思
へ (うつほ物語、俊蔭) (古) (花) (孟) (湖) (新) 人をしぞ
思ふ、(余)

6 かへりやいで給ふとしたまつなりけり (二〇一十二・240)
こぬ人をしたに待ちつゝ久方の月を哀といはぬよぞなき
(拾遺集卷六、雑賀、二九、延喜十七年八月宣旨によりて
よみ侍りける 紀貫之・貫之集、三三三) (河) (引) (余)

7 ずいじむからこそはかばかきこともあるべけれ (二〇一五・
241)

鵲の渡せる橋の上を夜はに踏み分けることさらにこそ
(大和物語、六五) (弄) (細) (絶) (孟) 夜はにふみこえ、

〔唄〕〔湖〕〔新〕

8 おとどれいのき、すぐし給はでこまふえとりいで給へり(三
13・242)

こま笛の駒に我が乗り慰めむみきともいはじあなにくけれ
ど(古今六帖第五、笛、三三三) (古)

9 いとかうあまりうもれたらむは心づきなくわろびたりと(三
14・243)

久方の雨の降る日をたゞひとり山べにをればうもれたりけ
り(拾遺集卷六、雑恋、三三三、紀の郎女におくり侍りける
中納言家持・万葉集卷四、末三) (古)

10 いでやさやうにおかしきかたの御かさやどりにはえしもやと
つきなげにこそみえ侍れ(三13・244)

妹が門 夫が門 行き過ぎかねてや 我が行かば 眩笠の
雨もや降らなむ してたをさき 雨やどり 笠やど
り 宿りてまからむ 郭公(催馬楽、妹が門、三三三) (釈前)

伊毛可く度於世奈可く止(由支須本可禰天世安、和可由可
波比ツ、和可左乃於、比和可左乃)へ安毛於奈利不良奈余
无(之天多乎左、安毛於安良万世と利ツ、可太世と利世と
利ツ々天末加良毛)之天耳太多、(奥)伊毛可く度世奈可
く度 由支須支可禰天也 和可由可波 比知可左の比知
可左のあめもふらなむしてたを左あまやとり可さやとり
てまからむしてたをさき、〔榮〕〔異〕〔古〕〔河〕へへ(休
〔紹〕へ孟(唄)〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

11 またるゝ月の心もとなきにほしのひかりばかりさやけく(三
12・246)

下(に)のみ恋ふれば苦し山の端に出で来る月のあらはれはばい
かに(古今六帖第一、雑の月、三三四・万葉集卷六、三三三、

「隠(り)のみ…山の端ゆ…あらはさばいかに」(釈前)(奥)

〔紫〕〔異〕〔古〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔湖〕〔余〕 またるゝ月の、〔釈
宮〕またるゝ月のあらはれず如何に、(唄)、〔引〕みれば
くるしき…またるゝ月の、〔拾〕〔引歌に及べからず〕〔新〕

12 なみ／＼のたはやすき御ふるまひならねば(三11・247)

霰ふるみ山の里のわびしきはきてたはやすくとも人ぞなき
(後撰集卷八、冬、興九、題しらす 読入しらす) (河)み山

のいはの(不本庵は、真本里の)さびしきに(真本は、(玉)さび
しきは、(拾)へ唄(余)

13 たまだすきくるしとの給ふ(三10・248)

①ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世の中の玉だすき
なる(古今集卷六、雑体、俳諧、(三三三)題しらす 読入し
らす・古今六帖第五、玉だすき、三三三、「思はずは」初句)

〔釈前〕おもはずは…いひいでぬなど世の中の、〔釈宮〕
〔奥〕〔紫〕〔古〕〔河〕〔細〕〔孟〕〔唄〕〔湖〕〔新〕〔余〕思はずは、

〔休〕〔紹〕、〔屋〕おもはずは思はぬとだに、〔引〕〔全〕〔対〕
〔事〕〔六〕〔評〕〔集〕

②玉だすきかけねばくるしかけたればあな煩はし人の心や
(古今六帖第五、玉だすき、三三三・万葉集卷六、三三三)「つ

きて見まくの欲しき君かも」〔古〕

14 いはぬをもしふにまさるとしりながらをしこめたるはくるし
かりけり〔三四二・250〕

心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞいふにまされる
〔古今六帖第五、いはで思ふ、三四四〕〔古〕〔花〕〔一〕〔休〕

15 雨ふりいで、所せくもあるにかさやとりせむと〔三五二・251〕
婦が門 夫が門 行き過ぎかねてや 我が行かば 〔花笠の
脇笠の 雨もや降らなむ 郭公 雨やどり 笠やどり 舎
りてまからむ 郭公 催馬楽、婦が門、46〕〔釈前〕〔釈
宮〕〔入釈書〕〔奥〕〔異〕

はれぬよの月まつさとをおもひやれおなじ心にながめせずと
も〔三六六・252〕

恋しきは同じ心にあらずとも今宵の月を君見ざらめや〔拾
遺集卷三、恋三、廿六、月のあかゝりける夜女のもとに遣は
しける 源さねあきら・信明集、三〇三、女小野の宮に参
りてさぶらふを聞きつけてさぶらひにるて月のおかき夜人
しいひやる・中務集、三〇三、秋の月あかきに〕〔拾

〔新〕〔余〕〔事〕

17 むらさきのかみのとしへにければはひをくれふるめいたるに
て〔三六七・252〕

紫は灰さすものぞつば市の八十のちまたに逢ひし児や誰
〔万葉集卷三、三〇二、問答の歌〕〔新〕〔余〕〔上句ノミ〕

18 せちにおほす所ばかりにこそめすまはれ給へれ〔三七三・253〕

①心さへ奉れる君に何をかも言はず言ひしとわがぬすまはむ
〔万葉集卷十二、三五三〕〔拾〕〔余またせる君に〕〔第二句〕

②山河にうへを伏せ置きて守りあへず年の八歳をわが盗まひ
し〔万葉集卷十二、三三三・古今六帖第五、人知れぬ、三四〇〕
「守り兼ねて…我ね住ひし」〔拾〕〔余もりかへに〕〔第三句〕

19 心ぐるしくなどなきぬばかりおもへり〔三七七・253〕

移るはむことだに惜しき秋萩にをれぬばかりも置ける露か
な〔拾遺集卷三、秋、一三、亭子院の御屏風に 伊勢・古今
六帖第六、秋萩、三四三・伊勢集、二〇〇、まひ女・和漢朗
詠集卷上、秋、萩、二六四〕〔拾〕

20 われもうちゑまるゝ心ちしてわりなの人にうらみられ給ふ
〔三七二・254〕

雪の中にはゝゑむ梅のかほをこそ我もをかしと思ふべらな
れ〔句はねとほゝゑむ梅の花をこそ我もをかしと折りて
ながむれ〕曾丹集、三三六〕〔休〕

21 とびたちぬべくふるふもあり〔三九二・255〕

①世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあ
らねば〔万葉集卷三、八五、貧窮問答の歌、山上憶良〕〔河〕
〔弄〕〔一〕〔入細〕〔休〕〔入細〕〔孟〕、〔岷〕鳥にあらねば、
〔湖〕〔拾〕〔新〕〔余〕〔集〕

②古へも契りてけりな打ちはぶきとび立ちぬべし天の羽衣
〔後撰集卷三、雑一、二三、かへし 庶明朝臣〕〔拾〕

③冬の池のつがはぬ鴛鴦はさよ中にとびたちぬべきこゑきて
ゆなり〔和泉式部集、四三〇〕〔集〕

22 いろはゆきはづかしくしろうてさおにひたひつきこよなうは
れたるに (三〇11・257)

人魂のさ青なる君がただ独り逢へりし雨夜の墓し思ほゆ

(万葉集卷六、三六六) 「古」(拾)あへりし雨夜は久しとお

もほゆ、(余)ひさしとぞおもふ

23 うはぎにはふるきのかはぎぬいとぎよらにかうばしきを(三三

6・257)

①夏なれど山はさむしといふなればこのかはぎぬは風をふせ

がん(多武峯少狩物語) 「最」(異)「古」(河)「休」(孟)「岷」

「湖」(引)「拾」(新)「余」

②山風もふせぎとりつる皮衣うれしき波に袖ぞぬれぬる(多

武峯少狩物語) 「最」(異)「古」(孟)「岷」(袖はぬれつ)

③とこしへに夏冬行けやかはごろもあふぎはなはず山に住む

人(古今六帖第五、かはぎぬ、三三三・万葉集卷六、二六三、

「扇放たぬ」 「最」(休)「岷」

24 あさひさすのきのたるひはとけながらなどかつらゝのむすは

るるむむ (三三〇・258)

峯に日やけさはつららにさしつらむ軒のたるひの下の玉水

(曹丹集、三〇四) 「異」あさひこや…軒のたるひの、(花)

(休)「絶」(孟)あさひこや、(岷)あさひこやけさはつらら

に

25 まつのゆきのみあたゝかげにふりつめる山ざとの心さして

(三三〇・258)

①み山には松の雪だにきえなくに都は野への若菜つみけり

(古今集卷一、春上、二六、題しらず 読人しらず) (花)「孟」

(湖)「余」

②しらぬひの筑紫の綿は身につけていまだは著ねど暖かに見

ゆ(万葉集卷三、三三六、沙弥満誓・古今六帖第五、わた、三三

三)「新」

26 さとこばるゝゆきもなたつすゑのとみゆるなどを(三三14・

259) ※ななたつすゑのとみゆるなどを―なみこすゑのなと

おほゆるを河

①我が袖は名にたつ末の松山か空より波のこえぬ日はなし

(後撰集卷十、恋三、六四、男のもとに遣はしける 土左)

「積前」松なれや浪こすゑのきかぬ日はなし、(釈宮)な

みこすゑのこえぬるはなき、(釈書)浪こすうへの、

(奥)「紫」(異)「古」(湖)こえぬ日ぞなき、(異)「河」こえぬ

日はなき、(河)「一」(休)「絶」(孟)「新」こえぬまぞなき、

(弄)「初句ノミ」、(岷)「引」(全)「対」(大)「評」(集)、△細▽

(引歌に及ばず)

②浦ちかくふりくる雪は白波のすゑの松山こすかとぞ見る

(古今集卷六、冬、三六、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

藤原興風・興風集、一六六三、寛平の御時の中宮の和歌合に・

古今六帖第一、雪、三五四・寛平御時后宮歌合、三五七六、興

風)「花」、(弄)第二句ノミ、(孟)「湖」、(新)浦遠く、

(評)「集」

③君をおきてあたし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ

(古今集卷二、東歌、二〇三) △弄▽

27 ふうにけるかしらの雪をみるひともおとらずぬらすあさのそ
でかな (三三〇・259)

秋の野に笹分けし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひち勝りける
〔古今集卷十、恋三、三三、題しらず 業平朝臣・伊勢物
語、二、〕逢はでぬる夜ぞ 〔河〕〔湖〕〔新〕〔余〕 秋の野の

28 からころも君がころのつらければたもとはかくぞそぼちつ
ゝのみ (三五三・262)

いつかわれ涙の絶えむ唐ごろも君が心のつらき限りは (元
真集、三五二) 〔古〕〔花〕〔孟〕〔引〕涙のつきん、〔休〕いつか

29 つゝみにころもはこのおもりにかこだいなるうちをきてをし
いでたり (三五四・262)

わがたちてきることうけれ夏衣大方とのみ見へき薄さを
〔後撰集卷十、恋六、一〇四、元長親王に夏のさうぞくしてお
くるとてそへたりける 南部式部卿のみこの女〕〔紫〕

30 そでまきはさむ人もなき身にいとうれしき心ざしにこそは
(三五八・262)

沫雪は今日はな降りそ白妙の袖まきはさむ人もあらなくに
〔万葉集卷十、冬の雑歌、三三三・古今六帖第一、雪、三六三、
「けさはな降りそ」・柿本集、一五三六、「今朝はな降りそ」・袖
木をほさむ〕 〔釈前〕しら雪は〔初包〕、〔釈宮〕しらつゆは、

〔釈書〕〔孟〕白雪は…人もなき身に、〔奥〕〔紫〕〔異〕人もな
き身に、〔古〕、〔河〕しら雪は〔本本あはし…〕人もあらなく
いなき身に

に、〔二〕〔細〕〔休〕、〔屋〕人もなき身は、〔岷〕〔湖〕〔引〕
〔拾〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

31 なつかしき色ともなしになにゝこのすゑつむ花をそでにふれ
けむ (三六三・263)

① 人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花の色にいでなむ
〔古今集卷十、恋二、四四、題しらず 読人しらず・古今六
帖第五、くれない、三四三六〕〔紫〕〔異〕〔古〕〔河〕〔休〕〔細〕〔孟〕
〔岷〕〔湖〕〔新〕

② よそのみに見つ 恋せむ紅の末摘花の色に出でずとも (万
葉集卷十、二九三) 〔河〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕よそののみ
つゝやこひん、〔休〕よそののみ見てやはこひん、〔細〕よ
そののみみてやはこひん…色にいでは、〔孟〕よそのの
みみつゝや恋む…色にいづとも

32 色こきはなとみしかどもなどかきけがし給ふ (三六三・263)

① くれなるの色こき花と見しかども人をあくにはうつるてふ
なり (未詳) 〔釈書〕紅を…人のあくにはかへらざりけり、
〔奥〕紅を…人をあくだにうつるひにけり、〔紫〕〔古〕人を
あくだにうつるひにけり、〔異〕くれなるを…人のあだに
はかへらざりけり、〔河〕〔二〕〔細〕〔休〕、〔細〕紅を、〔孟〕

〔屋〕くれなるは、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔余〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕
〔集〕

② 紅にそめし心も頼まれずひとをあくにほうつるてふなり
〔古今集卷十、雑体、一〇四、題しらず 読人しらず・古今
六帖第五、いろ、三四三六、〕染めし衣も…人をあくにし返る

39 夢かと思ふとちぢずしていで給ふを(三九五・266)

①忘れては夢かと思ふおもひきや雪踏みわけて君を見むとは(古今集卷六、雑下、古) 惟喬のみこの許にまかり通ひけるをかしらおろして小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるにひえの山の麓なりければ雪いと深かりけりしひて彼のむろにまかりいたりてをがみけるに徒然としていと物悲しくて帰りまうできてよみて送りける 業平朝臣・伊勢物語、一五、古今六帖第一、雪、三吾、業平集、一六三(「釈書」〔紫〕〔異〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔一〕〔第二句ノミ〕、△細▽〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕)

②夢かとも思ふべけれどおぼつかかねぬに見しかばわきぞかねつる(後撰集卷十一、恋三、七五、人のもとに遣はしける)

清成が女(「奥」〔異〕〔古〕〔湖〕〔余〕夢とこそ、〔河〕〔岷〕夢とこそ思ふべらなれ、〔休〕夢とこそ思ふべらなれ…ねぬを見しかば、〔孟〕夢とこそ思ふべらなれ…かげぞかねつる、〔引〕〔事〕)

40 へいちうがやうに色どりそへ給なあかゝらむはあえなむ(三〇八・268)

①われにこそつらさを君がみすれども人にすみつく顔のけしきは(未詳)〔釈前〕、〔釈宮〕〔異〕〔一〕かほのけしきよ、〔釈書〕つらき心を…かほのけしきよ、〔奥〕〔紫〕〔古〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕つらさは君が…かほのけしきよ、〔紹〕つらさは君が…かほのけしきに

②紅を色よき花とみしかども人をあくにはうつろひにけり(未詳、参考「紅にそめし心も頼まれずひとをあくにはうつるてふなり」古今集卷六、誹諧、一〇四、題しらず、読んしらず)〔釈宮〕くれなるを、〔異〕くれなるの色づく花とむめはけしきばみほゝゑみわたれるとりわきてみゆ(三〇一〇・268)

句はねどほほゑむ梅の花をこそ我もをかしと折りてながむれ(曾丹集、三〇六、正月をはり)〔釈前〕、〔釈宮〕ほほゑむゝめのはなをみて…おりてながむる、(奥)なりてながむれ、〔異〕、〔古〕われもおかしくなりてながむれ、〔河〕〔紹〕、〔孟〕〔岷〕我も行ては折らまほしけれ、〔屋〕〔湖〕〔引〕〔余〕〔事〕)

紅葉賀

1 からのそでふることはとをけれどたちるにつけてあはれとはみき(三六・273)

① 立ちて思ひるてもぞ思ふ紅の赤裳たれひきいにし姿を(古今六帖第五、裳、三六・新勅撰集卷十四、恋四、三六、題しらず 読人しらず) (拾)、(新) (第二句ノミ)、(余)

② 立ちてゐてたときも知らに思へども妹に告げねは間使ひも来ず(万葉集卷十二、三六) (拾) (余) たちゐるするわざもしられず、(新) (第二句ノミ)「立居するたときもしらず」

③ 浦人の袖ふる事は遠けれど波の立ちゐにあはれとは見き(未詳) (新)

④ 立ちて居るたときも知らにわが心天つ空なり土は踏めども(万葉集卷十二、三六) (拾) (余) 立ち居するたときもしらず からの人の(中略) あはれとはみき 大かたにはとあるをかぎりなふめづらしう(三六・273)

もえ渡る敷きは春のさがなれば大方にこそあはれともみん(後撰集卷三、春中、六、春雨のふらばおもひのきえもせでいとどなげきのめをもやすらむといふ古歌の心ばへを女にいひ遣はしたりければ 読人しらず) (余) (集)

3 色々うつろひえならぬをかざしてけふはまたなきてをつくしたるいりあやのほど(三九・274)

万代の霜にもかれぬ白菊をうしろ易くもかざしつるかな

(後撰集卷三、賀、一三六、女八のみこ元良のみこのために四十の賀し侍りけるに菊の花をかざしにをりて 藤原伊衡) (紫) (異) (河) (孟) (岷) (湖) (新)

4 むかしの世ゆかしげなり(四〇・6・274) ※ゆかしげなりゆかしき人の御ちきりなり河七宮尾兼一ゆかしき人のちきりなり 河大

君と我いかなることを契りけむ昔の世こそ知らまほしけれ(和漢朗詠集卷下、交友、三六・新千載集卷十二、恋二、二〇三、題しらず 読人しらず) (異)

5 この事よりみのいたづらになりぬべき事とおほしなげくに(四一・281)

哀ともいふべき人はおもほえて身のいたづらになりぬべきかな(拾遺集卷五、恋五、三六、物いひ侍りける女の後につれなく侍りて更にあはず侍りければ 一条撰政) (花) (休)

6 こうきでんなどのうけはしげにのたまふときしを(四二・282) (新) (孟) (湖) (引) (新) (余)、△岷▽ (引歌に及はず)

罪もなき人をうけへば忘れ草おのが上にぞ生ふと言ふなる(伊勢物語、七五) (異)

7 宮の御心のおにいとくるしく(四三・282) わがためにうときけしきのつくからにまづはこころのおに見えけり(一条撰政御集、三三) (花) (新) かつは心の、

(休) かつは心の鬼と見えけり、(孟) (湖)、(引) かつら心の、(新)、△岷▽ (引歌ありそれに及はず)

8 はかなき事をだにきずをもとむる世に (三三〇12・282)

直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなき (後撰集卷六、雑二、二葉、いたくこと好む由を時の人いふとき、高津内親王) (屋)

9 いかならむよに人づてならできこえさせむとてない給 (三〇四・283)

いかにしてかく思ふてふことをだに人伝ならで君に語らむ (後撰集卷十三、恋三、突二、忍びてみくしげ殿のべたうにあひかたらふと聞きて父の左大臣のせいし侍りければ 敦忠朝臣・大和物語、天六) (拾) (余) (事)

10 みてもおもふみぬはたいかになげくらむこやよの人のまどふてふやみ (二四六9・283)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな (後撰集卷五、雑一、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかり罷りあかれけるにやんごとなき二三人ばかりとぞめてまらうとあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうちなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、三三三三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一六六五、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言) (湖) 子を思ふやみにまよひぬるかな、(引) (新) (余) (事) (評) (集) 11 よそへつゝみるに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花 (二二〇七・285) よそへつゝ見れど露だに慰まずいかかはすべきなでしこの

花 (清慎公集、三四三、母上東の宮にさぶらひ給ひしに暇に

て久しく参り侍らざりしかばなでしこにつけて給はせたりし・藤原義孝集、三三〇三、母上の東宮にさぶらひ給ひしに暇にて久しう参り侍らざりしかばなでしこにつけて奉りし母上) (花) (休) (孟) (引) いかにかすべき夏夏の花、(絶)

12 はなにさかなんとおもひたまへりしもかひなきよに侍りければ (三三〇七・285)

① 我が宿に咲きしなでしこいつしかも花に咲かなむよそへつゝ見む (古今六帖第六、なでしこ、三三〇四、家持・万葉集卷六、春相聞、一四六、大伴宿禰家持、坂上家の大嬢に贈る歌一首、「まきしなでしこ…なそへつゝ見む」) (釈前) まきしなでしこいつしかと…よそへてもみん、(釈宮) さきしなでしこ…よそへつゝみん、(釈書) まきしなでしこ…花はさかなんよそへてもみん、(奥) (紫) (異) (河) (一) (休) (絶) (屋) まきしなでしこ…よそへてもみん、(孟) (湖) (余) (岷) (対) まきしなでしこ、(事) (集) (大) (集)

② 我が宿の垣根に植ゑしなでしこは花に咲かなむよそへつゝ見む (後撰集卷四、夏、一六、題しらず、読人しらず) (引) (新) (余) (全) (対) (事) (大) (集) 13 たゞちりばかりこの花びらにときこゆるを (二二〇九・285) 塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしよりいもとわがぬる床夏の花 (古今集卷三、夏、二七、隣よりとこ夏の花をこひにおこせたりければをしみてこの歌をよみて遣はしける 躬恒・

古今六帖第六、なでして、三四三・和漢朗詠集卷上、秋前裁
三九、躬恒〔紹〕、〔湖〕初句ノミ、〔新〕第二句ノミ、〔余〕
〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

14 いりぬるいそのとくちすさみて口をくひしたまへるさま三四三
6・286)

しほみては入りぬるいその草なれやみらく少なくて恋ふらく
の多き〔拾遺集卷五、恋三、題しらず 坂上郎女・古
今六帖第六、雑の草、三四六・万葉集卷七、譬喻歌、三九四、
藻に寄する〕〔釈前〕こふらくはおほき、〔釈宮〕みるひす
くなくこふらくのおほき、〔釈書〕みる日すくなく、〔奥〕

〔莖〕〔異〕〔河〕〔一〕〔八細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕、〔岷〕みるめ
こそ、〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
15 みるめにあくはまさなき事ぞよとて三五七・286)

伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよし
もがな〔古今集卷十、恋四、六三、題しらず 読人しらず・
古今六帖第三、みるめ、三三三、伊勢の海の〕〔釈前〕伊

勢の海の、〔釈宮〕〔釈書〕〔奥〕〔莖〕〔異〕〔河〕〔一〕〔八細〕
〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕
〔評〕〔集〕

16 もりの下草おひぬればなどかきすさびたるを三五五・291)

①大荒木の森のした草おひぬれば駒もすさめずかる人もなし
〔古今集卷十、雑上、八三、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、もり、三三三、小野小町・同第六、下草、三四三、和
漢朗詠集卷下、草、四一〕〔釈前〕こまもすさます、〔釈宮〕

〔釈書〕〔奥〕〔莖〕〔異〕〔河〕、〔弄〕第三句ノミ、〔一〕〔細〕
〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔大〕〔評〕〔集〕

②なつければこりずまにおふるおほあききのもりのしたくさ
かひもあらなくに〔能宣集、大成本、三〇〕〔花〕〔孟〕

17 もりこそなつのとみゆめるとてなにくれとの給ふも三五六・
291)

①ひまもなく茂りにけりな大荒木のもりこそなつのかげはし
るけれ〔未詳〕〔釈前〕、〔釈宮〕しだりにけりな…もりこ
すなつ、〔釈書〕杜のしたこそ夏のかげはしけりけれ、

〔奥〕〔莖〕〔河〕かげはしりけれ、〔異〕、〔一〕〔屋〕〔引〕かげ
はしげけれ、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕
〔事〕

②夏くればこりずまに生ふる大荒木のもりの下草かひもあら
なくに〔能宣集、大成本、三〇〕〔岷〕

③時鳥きなくを聞けば大荒木の森こそ夏の宿りなるらし〔信
明集、三〇〇、おほあききの森〕〔拾〕〔余〕〔対〕〔事〕〔大〕
〔評〕〔集〕

18 きみしこばたなれのこまにかりかはむさかりすぎたる下葉な
りとも三五八・291)

①我が門のひとむらすきかりかはむ君が手なれの駒もこぬ
かな〔後撰集卷十、恋三、六五、男のこざりければ遣はしけ
る 小町があね〕〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔引〕〔新〕
〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

②大荒木の森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし
 (古今集卷十、雑上、八〇、題しらず 読人しらず・古今六
 帖第三、もり、三九三、小野小町・同第六、下草、三四〇・和
 漢朗詠集卷下、草、四) (五)第二四句ノミ
 19 さゝわけば人やとがめむいつとなくこまなつくめるもりのこ
 がくれ(三五10・291)

ささわわけば荒れこそ増さめ草枯れの駒なつくべきものの下
 かは(蜻蛉日記、二五) (花)〔休〕駒なつくめるもりの下か
 は、〔紹〕、〔孟〕駒なつくめる、〔眠〕、〔湖〕〔引〕〔新〕駒な
 つくめるもりの下かけ、〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕
 20 またかゝるものをこそ思侍らね今さらなるみのはちになむと
 て(三五11・291)

黒髪に白髪まじり老ゆるまでかかる恋にはいまだ会はなく
 に(万葉集卷四、五三、大伴坂上郎女・拾遺集卷十、恋三、
 突六、題しらず、坂上郎女、「生るまで…いまだ逢はざる
 に」)〔花〕しろかみに黒かみまじりおふるまでまたいとか
 ゝる物はおもはず、〔一〕〔紹〕〔孟〕おふるまでまたいとか
 ゝる物お思はず、〔細〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔余〕白髪に黒髪まじ
 り…またいとかゝる物お思はず、〔休〕白髪まじりて…ま
 だいとかゝる物はおもはず、〔引〕しろかみに黒髪まじり
 おふるまで又いとかゝる物はおもはず、〔拾〕〔新〕〔集〕
 21 今きこえむ思ひながらぞやとてひきはなちいで給を(三五
 12・291)
 人知れず渡しそめけむ橋なれや思ひながらにたえにける哉

(忠見集、三〇三、長柄の橋・続後撰集卷十、恋四、八〇、題
 しらず、忠見) (余)

22 せめてをよびてはしばしらとらみかくるを(三五13・292)
 ①思ふこと昔ながらの橋柱ふりぬる身こそ悲しかりけれ(新
 勅撰集卷十、雑四、二六五、謙徳公に遣はしける 読人しら
 ず)〔釈前〕〔釈宮〕〔釈書〕〔異〕②〔河〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔屋〕〔眠〕
 ③津の国のながらの橋の、〔奥〕つのにのながらのはし
 の、イおもふことむかしながらの…おい、イふりぬる身こそ、

〔孟〕つのにのながらのはしの…おひぬる身こそ、〔異〕
 ④〔眠〕④〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕
 〔集〕

②世の中にふりぬるものは津の国のながらの橋と我となりけ
 り(古今集卷十、雑上、八〇、題しらず、読人しらず)〔弄〕
 (第二句ノミ、)〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔余〕

③限りなく思ふながらの橋柱おもひながらになかやたえなむ
 (拾遺集卷十、恋四、八〇、題しらず 読人しらず)〔拾〕、
 〔新〕〔余〕思ひながらの

④年ふれば朽ちこそまされ橋柱昔ながらの名だに交はらで
 (忠見集、三〇六、返し・忠岑集、一七三、新古今集卷十、
 雑中、二五〇、長柄の橋をよめる 忠岑) (余)

23 にくからぬ人ゆへはぬれぎぬをだにきまほしかる(三五2・292)
 にくからぬ人のきせけむ濡れ衣は思ひにあへず今乾きなむ
 (後撰集卷十、恋三、五七、かへし 中将内侍)〔釈前〕人の
 きせける…いとひがたくもおほゝゆるかな、〔釈宮〕人の

28 まこととはうつし心かよたはぶれにくしや (三五五・295)
①ますらぞのうつし心も我はなし夜昼といはず恋ひしわたれ

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

〔新〕〔河〕〔紫〕〔異〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔下句〕ミ、〔余〕〔全〕〔対〕

〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔下句〕ミ、〔余〕〔全〕〔対〕

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

宵しるしも・古今六帖第五、我がせと、衣通姫、三九四
〔釈前〕〔釈宮〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔入〕〔休〕〔紹〕
わがせとがくべき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねて
しるしも (古今集卷三、東歌、二〇、衣通姫のひとりゐて
帝をこひ奉りて・日本書紀卷三、一三、「くものおこなひ今
宵しるしも」・古今六帖第五、我がせと、衣通姫、三九四)

27 くものふるまいはしるかりつらむものを心うくすかし給ける
よとて (三五六・294)

〔集〕

〔河〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕

〔集〕

〔紫〕〔異〕〔河〕〔入〕〔細〕〔休〕〔紹〕

ひもとさしもあらばこそそのとのわれささをしひら

のそのあまそきわれたちぬれぬとのとひらかせかすか

礼世比お川末、〔入〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔入〕〔細〕〔休〕〔紹〕

知〔奈〕〔良〕〔礼〕〔ぬ〕〔上〕〔乃〕〔近〕〔比〕〔良〕〔安〕〔可〕〔世〕〔加〕〔須〕〔可〕〔比〕〔毛〕〔於〕〔上〕〔左〕〔之〕

〔安〕〔良〕〔波〕〔已〕〔曾〕〔乃〕〔上〕〔於〕〔和〕〔礼〕〔名〕〔女〕〔於〕〔之〕〔比〕〔良〕〔知〕〔支〕〔末〕〔世〕〔和〕

鎖さめ おし開いて来ませ 我や人妻(催馬楽、東屋、六)

殿戸開かせ かすがひも 鏡もあらばこそ その殿戸 我

〔釈前〕安川末也乃〔安〕末利乃〔曾〕乃安万曾と支〔和〕礼多

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔下句〕ミ、〔余〕〔全〕〔対〕

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

〔紫〕〔異〕〔河〕〔入〕〔細〕〔休〕〔紹〕

〔新〕〔河〕〔紫〕〔異〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔下句〕ミ、〔余〕〔全〕〔対〕

東屋の 真屋のあまりの その 雨そそぎ 我立ち濡れぬ
殿戸開かせ かすがひも 鏡もあらばこそ その殿戸 我
鎖さめ おし開いて来ませ 我や人妻(催馬楽、東屋、六)

ば (万葉集卷三、三三三、古今六帖第四、恋、三六五、「夜屋

分かず)〔河〕〔孟〕よるひるいはず、〔湖〕〔余〕〔入〕〔岷〕〔引〕

歌かなはず略之

②ありぬやと心見がてら逢ひ見ねば戯れにきまでぞ恋しき

(古今集卷十、誹諧、一〇三、題しらず 読人しらず)〔河〕

〔孟〕〔湖〕〔新〕〔余〕

29 うへにとりきはしるからんといふ (三五九・296)

紅のこそめの衣下にきて上にとりきはしるからんかも (古

今六帖第五、ころも、三三〇、万葉集卷五、譬喩、衣に寄す

る、三三三、「深染めの衣…言なきむかも)〔奥〕〔紫〕〔河〕

〔一〕、〔細〕〔屋〕したにきん、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

30 うらみでもいふかたぞなき立かさねひきてかへりしなみのな

ごりに (三六〇・296)

いたづらに立ちかへりにし白波のなごりの袖のひる時もな

し(後撰集卷三、恋四、八三、大輔が許にまうできたりける

に侍らざりければ帰りて又のあしたに遣はしける 朝忠朝

臣・素性法師集、一五七三、「ひる時ぞなき」・朝忠集、物言

はで返し、一五九二)〔余〕

31 そこもあらはにとありおもなのさまやとみたまふも (三六〇・

296)

別れての後ぞ悲しき涙河そこもあらはになりぬと思へば

(新勅撰集卷十、恋四、三九、題しらず 読人しらず)〔新

前〕ながれての…なるとおもへば、〔釈宮〕〔紫〕〔異〕〔休〕

〔紹〕〔屋〕ながれての、〔河〕、〔二〕かくれての、〔細〕、
〔孟〕わすれても、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕、〔余〕後ぞこひし
き、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

32 あらたちし浪に心はさきはがねどよせけむいそをいかうらみ
ぬ(三〇・4・296)

あらかりし波の心はつられれどすごしによせし声ぞこひし
き(後撰集卷十、恋三、七頁、人の許にまかれりけるにすの
とにすゑて物いひけるをすを引きあげゝればいたく騒ぎけ
ればまかりかへりて又のあしたに遣はしける 藤原守正)

〔余〕

33 なかたえはかごとやおふとあやうさにはなだのおびをとりて
だにみずとてやり給たちかへり 君にかくひきとられぬるお
びなればかくてたえぬるなかとかこたむ(三〇・10・297)

①石川の 高麗人に 帯を取られて からき悔する いか
る いかなる帯ぞ 縹の帯の 中はたいれるか かやるか
あやるか 中はたいれたるか(催馬楽、石川、三、〔花〕

〔一〕〔八細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕
〔集〕

②あつま路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりも逢ひ見て

しがな(古今六帖第五、おび、三〇三頁・新古今集卷十、恋三、
一〇三頁) 〔一〕〔湖〕〔新〕〔余〕あはんとぞ思ふ、〔岷〕

34 まごとはうしや世中よといひあはせて(三三・3・297)

①流れてはいもせの山の中に落つる吉野の川のよしや世の中
(古今集卷十、恋三、八六、題しらず 読人しらず・古今六

帖第四、うらみ、三三六) 〔新〕

②しかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世
の中(古今集卷六、雑下、三三三、題しらず 小野篁朝臣・
古今六帖第四、うらみ、三三三頁、「まづ歎かるゝ」) 〔新〕

③人ごとはあまの刈る藻にしげくとも思はましかばよしや世
の中(古今六帖第四、うらみ、三三三頁) 〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔大〕〔評〕〔集〕

35 とこのやまなるとかたみにくちがたむ(三三・4・297)

大上のとこの山なるななやり川いさと答へよ我が名もらすな
(古今集、墨消歌、卷三、二〇六・古今六帖第五、名を惜む、
三三三頁、あめのみかど、「大上や…いさゝ川いさと答へて」
万葉集卷十、三三〇、「いさや河いさとをまきこせわが名のらす
な」) 〔釈前〕いさゝがはいさとこたえて、〔釈宮〕〔釈書〕
いぬかみや…いさらがはいさとこたえて、〔奥〕〔紫〕〔異〕

〔河〕いさら河いさとこたへて、〔一〕いさとこたへて、
〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔新〕〔余〕いさや川いさとこたへ
て、〔岷〕〔引〕いさや川、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

36 御こしのうちもおもひやられていとをよびなき心ちしたま
ふにすいろはしきまでなむ(三三・12・299)

大原や小塩の山もけふこそは神世のことと思ひ出づらめ
(古今集卷七、雑上、八七、二条の後のまだ東宮の御やすん
所と申しける時に大原野に詣て給ひける日よめる 業平朝
臣・伊勢物語、一五五・大和物語、七〇・業平集、一六三) 〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕〔第二句〕シ、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕

37 つきもせぬ心のやみにくるゝかな雲井に人をみるにつけても
 (三三・299)

花 宴

人の親の心は聞にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
 (後撰集卷十、雑二、二〇三) 太政大臣の左大将にてすまひの
 かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
 れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人三人ばかりとゞ
 めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のう
 へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第一、三三三、
 「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一三三、子の悲
 しきことを集りて云ひければ、中納言 (事) (集)

1 きざらぎのはつかあまりに南殿のさくらの宴せさせ給 (三六)

1・303

桜花今宵かざしにさしなからかくて千年の春をこそへめ

(拾遺集卷三、賀、三六、天徳三年内裏に花の宴せさせ給ひけるに 九条右大臣) (紫) (河) (孟)

2 おほかたに花のすがたをみましかば露も心のおかれまじやは
 (三三・304)

つゆならぬ心を花におきそめて風吹くごとに物思ひぞつく

(古今集卷十、恋三、其六、やよひばかりに物のたうびける人の許に又人まかりてせをそすと聞きてよみて遣はしける 貫之・古今六帖第一、露、三〇三、貫之、「物をこそ思

へ) (河) (細) (休) (相) (孟) (峴) (湖) (新) (余) (集)

3 うちなげきてなをあらじに弘徽殿のほそどのに (三三・4・305)

黙然^{だだ}あらじと言の慰^{なぐさ}にいふ言を聞き知れらくはあしくはありけり (万葉集卷七、三三〇) (河) (湖) (余) なをあらじとこ

となしぐさに：すくなかりけり、(拾) (第二句ノミ)

4 おぼる月夜ににるものぞなきとうちずして (三三・8・305)

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき (千里集、三〇三) 不明不暗朧々月、「朧月夜ぞめでたかりける」・新古今集卷一、春上、雲、文集、嘉陵春夜の詩、不明不暗朧々月といへることをよみ侍りける 大江千

- 里〔釈前〕〔釈宮〕、〔奥〕くもりはてぬゝにる物ぞなき、
 〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕〔第五句ノミ〕、〔休〕しくものもなし、
 〔紹〕〔孟〕〔屋〕、〔岷〕似るものぞなき、〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕
 〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
- 5 うき身世にやがてきえなばたづねても草のはらをばとはじと
 やおもふ〔三三〕8・307
- ①今日過ぎばしなまし物を夢にても何処をはかと君がとはま
 し〔後撰集卷十、恋二、六四〕、まかり出て御文遣したりけれ
 ば 中将更衣〔拾〕〔余〕
- ②我死なばいづこをはかと尋ねてかこの世に尽きぬことも語
 らむ〔小大君集、一六六、返しなるべし〕〔拾〕〔余〕
- 6 まだ世になれぬは五六の君ならんかし〔三三〕2・307
 我にまづ鳴きて聞かせよ時鳥まだよに馴れぬころの一声
 〔元真集、三三三、四月一日人のもとに時鳥待つ〕〔異〕
- 7 頭中將のすさめぬ四の君などこそよしときゝしか〔三三〕3・
 307
- ①大荒木の森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし
 〔古今集卷十、雑上、八三、題しらず 読人しらず〕古今六
 帖第三、もり、三三三、小野小町・同第六、下草、三三三、和
 漢朗詠集卷下、草、四四〔異〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕〔下旬ノミ〕
- ②山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそわれ見はやさむ
 〔古今集卷二、春上、五、題しらず 読人しらず〕〔異〕、
 〔孟〕山ふかみ、〔岷〕第二句ノミ、〔湖〕〔余〕
- 8 やはらかにぬる夜はなくてとうたひ給〔三三〕6・310
- 貫河の瀬々の やはら手枕 やはらかに 寝る夜はなくて
 親離くる夫 親離くる夫は ましてはし しかさらば
 矢矧の市に 沓買ひにかむ 沓買はば 線鞋の 細底を買
 へさし履きて 表裳とり着て 官路かよはん〔催馬楽、
 貫川、五〕〔釈前〕奴支可波乃世々乃也波良多安末安久良
 世波良加爾奴留与於波安名久天於也左久留ウ川末、
 〔釈宮〕、〔釈書〕ぬき川のせ々のたまくらやはらかにぬ
 る夜はなくておやのさくるつま、〔奥〕ぬきがはのせ々の
 や波良多まくらやはらかにぬるよはなくておやさくるつ
 まをやさくるつまはまして留宇留はし之加さらばやはぎ
 のいちにくつかひにかむ、〔紫〕〔異〕〔河〕〔花〕〔弄〕
 〔一〕〔細〕〔休〕〔紫〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕
 〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
- 9 おきなもほとほとまひいでぬべき心ちなんし侍しときこえ給
 へばことにととのへおこなふ事も侍らずたごおほやけ事にそ
 しいなるものゝしどもをこゝかしこにたづね侍しなりよろづ
 のことよりは柳花苑まことにこうだいのれいともなりぬべく
 みたまへしに〔三三〕13・310
- ①今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを〔古
 今集卷十、雑上、八六、題しらず 読人しらず〕〔奥〕〔紫〕
 〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔評〕
- ②翁こてわびやはをらむ草も木もさかゆる時に出てて舞ひて
 む〔続日本後紀、二四、尾張連浜主〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕
 〔評〕〔集〕

10 やよひの廿余日右大殿のゆみのけちに (三六〇・三二)

①弓はりの山のはさしている時はあやしく物ぞかなしかりける (円融院御集、弓結の比宮にわたらせ給て) (花) (孟) (湖)

②さとならで弓はりながら入る月は山のはにだに立ちとまらなん (円融院御集、返し宮) (花)

11 花ざかりはすぎにたるをほかのちりなむとやをしへられたり (三六七・三二)

見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし (古今集卷一、春上、六、亭子院の歌合の時よめる 伊勢・古今六帖第六、さくら、三五〇、いせ・伊勢集、二〇三六)

〔釈前〕なきわがやどの、〔釈宮〕奥〔紫〕異〔河〕、〔花〕下句ノミ、〔弄〕第五句ノミ、〔一〕下句ノミ、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

12 ことさらめきもていでたるをふさはしからずとまじ (三七二・三二)

鶉が鳴く東を指してふさへしに行かむと思へど由もさねなし (万葉集卷六、四三三) (岷)

13 かしこけれどこのおまへにこそはかけにもかくさせ給はめとて (三七二・三二)

咲く花の下に隠るゝ人おほみありしにまさる藤の蔭かも (伊勢物語、一五三) (河) (花) (一) 下句ノミ、〔紹〕〔屋〕 (岷) (湖)、〔余〕夢のかげかも、〔対〕〔集〕

71 花 宴 14 あぶきをよとられてからきめをみるとうちおほどけたるこゑに

いひなしてよりあたまへりあやしくもさまかへけるこまうどかなといらふるは心しらぬにやあらん (三六五・三三)

石川の 高麗人に 帯を取られて からき悔する いかなる いかなる帯ぞ 縹の帯の 中はたいれるか かやるか あやるか 中はいれたるか (催馬楽、石川、弄) (釈前)

伊之加波乃於々己未安宇と爾ツ、於比毛と於良礼天江可良支久以ツ、須留伊加奈留以火可奈留宇於比ツ、曾於波多伊礼ツ、奈留加、入釈宮、(釈書)いし川のこまうどにおびをとられて、(奥)いしかはのこまうどにおびをとられて

からきくいするいかなるおびぞはなだのおびのなかはたえたる、(紫)〔異〕〔河〕〔花〕〔入弄〕〔一〕〔細〕〔紹〕〔孟〕

15 あつさゆみいるさのやまにまどふ哉ほのみし月のかげにやみゆると (三六六・三三)

梓弓いるさの山はあき霧のあたるごとにや色まさるらむ (後撰集卷七、秋下、三六、題しらす 源宗平朝臣・宗平集、一六五九) (河) (孟) (引)、〔新〕第二句ノミ